浄妙寺旧境内遺跡（№408）

浄明寺三丁目 122 番 1・2

例　　言

1．本報は「浄妙寺旧境内遺跡」内、浄明寺三丁目 122 番 1・2 における埋蔵文化財発掘調査報告である。

2．調査期間　2004 年 8 月 9 日～同年 10 月 22 日（9 月 14 日～9 月 29 日中断）

　調査面積　49.5 ㎡

3．本調査地点の略称は J3122 とした。

4．調査体制

　担　当　者　馬淵和雄

　調　査　員　松原康子・鍛冶屋勝二・根本志保（資料整理）

　調査補助員　白石哲也・大塚悠介・岩崎卓治（資料整理）

　作　業　員　小口照男・川崎由紀夫・川島仁司・北島清一・田島道夫（以上社団法人鎌倉シルバー人材センター）

5．本報作成分担

　遺構図整理　馬淵・松原・鍛冶屋

　遺物実測　　松原・根本・岩崎

　同墨入れ　　松原・根本・岩崎

　同観察表　　松原

　原稿執筆　　馬淵・松原（担当部分末尾に執筆者名を記す）

　編集・総括　馬淵

目　次

第一章　遺跡と調査地点の概観 ---------- 117
1．浄明寺略村誌 ---------- 117
2．位置と地勢 ---------- 117
3．歴史的環境 ---------- 119
第二章　調査の概要 ---------- 125
1．調査にいたる経緯 ---------- 125
2．調査方法と経過 ---------- 125
第三章　調査結果 ---------- 127
第１節　層序と各面の概要 ---------- 127
第２節　各節 ---------- 130
1．Ⅰ面 ---------- 130
2．Ⅱ面 ---------- 134
3．Ⅲ面 ---------- 138
4．Ⅳ面上層面 ---------- 143
5．Ⅳ面下層面 ---------- 145
6．Ⅴ面 ---------- 151
7．Ⅵ面 ---------- 160
8．遺構外採集遺物 ---------- 161
第四章　まとめと考察 ---------- 171
1．遺構の変遷と年代 ---------- 171
2．まとめ ---------- 173

挿 図 目 次

図１　調査地点と近辺の遺跡・旧跡 ---------- 118
図２　座標と海抜 ---------- 126
図３　調査区壁土層断面，同出土遺物（1） ---------- 128
図４　調査区壁土層断面，同出土遺物（2） ---------- 129
図５　Ⅰ面遺構全図 ---------- 131
図６　柱穴列 1～5，同出土遺物 ---------- 132
図７　土坑 1～3，土師器集中部 1，同出土遺物 ---------- 133
図８　Ⅰ面出土遺物 ---------- 134
図９　Ⅱ面遺構全図，建物 1・柱穴列 6，同出土遺物 ---------- 135
図 10　柱穴列 7～10・土坑 4，同出土遺物 ---------- 136
図 11　土坑 14，同出土遺物，土坑 15・Ⅱ面柱穴出土遺物 ---------- 137
図 12　Ⅱ面出土遺物 ---------- 138
図 13　Ⅲ面遺構全図 ---------- 139
図 14　溝 1・柱穴列 11・土坑 5，同出土遺物・土坑 11・P. 34 出土遺物 ---------- 140
図 15　土師器集中部 2・同出土遺物 ---------- 141
図 16　Ⅲ面・Ⅲ面構成土出土遺物 ---------- 142
図 17　Ⅳ面上層面遺構全図 ---------- 143
図 18　溝 2・柱穴列 12・石列，同出土遺物 ---------- 144
図 19　Ⅳ面下層面遺構全図 ---------- 145
図 20　建物 2，同出土遺物 ---------- 146
図 21　建物 3，同出土遺物 ---------- 147
図 22　柱穴列 13～15，同出土遺物 ---------- 148
図 23　井戸 1，同出土遺物（1） ---------- 150
図 24　井戸 1 出土遺物（2） ---------- 151
図 25　土坑 7，同出土遺物 ---------- 152
図 26　土坑 6・7・9・12，同出土遺物・Ⅳ面柱穴出土遺物 ---------- 153
図 27　Ⅳ面出土遺物 ---------- 154
図 28　Ⅴ面遺構全図，Ⅴ面上出土遺物 ---------- 155
図 29　建物 4・土坑 13・P. 73，同出土遺物 ---------- 156
図 30　溝 3・4，P. 80 出土遺物 ---------- 157
図 31　Ⅵ面遺構全図 ---------- 158
図 32　Ⅵ面上／溝 5 出土遺物 ---------- 159
図 33　溝 5，深掘り出土遺物 ---------- 160
図 34　遺構外採集遺物 ---------- 161
図 35　遺構変遷図 ---------- 172

表 目 次

表 1　出土遺物観察表（1）- 162
表 2　出土遺物観察表（2）- 163
表 3　出土遺物観察表（3）- 164
表 4　出土遺物観察表（4）- 165
表 5　出土遺物観察表（5）- 166
表 6　出土遺物観察表（6）- 167
表 7　出土遺物観察表（7）- 168
表 8　出土遺物観察表（8）- 169
表 9　出土遺物観察表（9）- 170

図 版 目 次

図版 1　- 175
　1－1　調査地点鳥瞰
　1－2　浄妙寺背後から調査地点方向を望む（矢印の下）
　1－3　稲荷小路（調査地点は奥右手）
図版 2　- 176
　2－1　Ⅰ面全景（西から）
　2－2　Ⅰ面全景（東から）
　2－3　土坑 1（南から）
　2－4　Ⅱ面全景（南から）
　2－5　土坑 14（西から）
　2－6　土坑 14 東側石敷き（東から）
図版 3　- 173
　3－1　漆布状物質が付着した常滑片
　3－2　Ⅲ面全景（西から）
　3－3　溝 1（南から）
　3－4　土師器集中部 2（西から）
　3－5　Ⅳ面下層面全景（南から）
　3－6　Ⅳ面下層面全景（西から）
図版 4　- 178
　4－1　溝 2・柱穴列 12・石列（東から）
　4－2　溝 2・柱穴列 12・石列（西から）
　4－3　溝 2・柱穴列 12・石列（南から）
　4－4　溝 2（南から）
　4－5　溝 2 内常滑集中部（西から）
　4－6　溝 2（東から）
図版 5　- 179
　5－1　井戸 1（北から）
　5－2　井戸 1 木枠（北東から）
　5－3　土坑 7（西から）
　5－4　土坑 6 内検出の柱・礎板（東から）
　5－5　Ⅴ面上層面全景（東から）
　5－6　Ⅴ面上層面全景（南から）
図版 6　- 180
　6－1　建物 5（南から）
　6－2　同前（東から）
　6－3　Ⅴ面全景（西から）
　6－4　Ⅴ面全景（南から）
　6－5　溝 4（東から）
　6－6　溝 3（南から）
図版 7　- 181
　7－1　溝 4 側板（北から）
　7－2　溝 4 内柱穴・束柱（北から）
　7－3　土坑 13（北東から）
　7－4　柄杓出土状況（北壁際）
　7－5　Ⅵ面全景（西から）
　7－6　溝 5（東から）
図版 8　- 182
　8－1　調査区東壁土層断面
　8－2　調査区南壁土層断面
　8－3　調査区西壁土層断面
図版 9　- 183
　出土遺物 1
図版 10　- 184
　出土遺物 2
図版 11　- 185
　出土遺物 3
図版 12　- 186
　出土遺物 4
図版 13　- 187
　出土遺物 5
図版 14　- 188
　出土遺物 6
図版 15　- 189
　出土遺物 7
図版 16　- 190
　参考資料「浄妙寺境内絵図」

第一章　遺跡と調査地点の概観

１．　浄明寺略村誌

調査地点は鎌倉市浄明寺三丁目 122 番 1・2 に所在する。浄明寺は滑川中上流域に形成された谷間の集落で、北は二階堂、東は十二所、南は大町と逗子市久木（旧三浦郡久野谷村）、西は雪ノ下に接し、中央を県道金沢・鎌倉線、通称六浦道が貫通する。鎌倉五山の一つである浄妙寺の所在地であるところから、その名が生じた。近世には常明寺とも書かれた。徳川家康が天正十九年（1591）十一月日付で鶴岡八幡宮に与えた社領寄進の判物には、「相模国小坂郡鎌倉之内」の「常明寺」で「八拾九貫七拾文」とみえ（『鎌倉市史　史料編』1－141）、また江戸時代初期の「十二所村等鎌倉中幕領相給村総高帳」に、他の諸村と並んで「常明寺村」がみえる（『神奈川県史　資料編』６）。以後江戸時代を通じて１村であったが、滑川上流の谷間に位置する西御門村・二階堂村・十二所村の 3 村と併せ、「谷合四ケ村」として一括されることも多かった。近世は幕府直轄領と鶴岡八幡宮・報国寺・浄妙寺などの社寺領であった。『新編相模国風土記稿』には、天保年間初期（1830 年代初め）の浄明寺村家数は 29 とある。
『神奈川県皇国地誌　相模国鎌倉郡村誌』によると、明治九年（1876）の家数 43、人数 213、同十二年（1879）では、田 4 町 6 段（反）1 畝余り、畑 17 町 3 段 6 畝余りで、宅地は 2 町 1 段 4 畝、茅山・藪・山林 48 町・芝地があり、大町村と雪ノ下村にも田畑や山林の飛地がある。ほかには牝馬 4 頭となっている（『神奈川県郷土資料集成』第 12 集「浄明寺村」）。

村内に延福寺・大休寺・泰安寺といった禅宗の廃寺がある。

２．位置と地勢

調査地点の位置

六浦道を東に進むと、「歌ノ橋」付近から峠状の微高地となったあと杉本寺の手前あたりから次第に下り始め、滑川沿いに 200m ほどの直線が続く。道は報国寺門前手前から川に沿うかたちで右に折れ、ついで次の微高地に向かって緩やかに上りつつ左に曲がり、約 50m で左手（北）の臨済宗浄妙寺の参道入口にいたる。そこからさらに 30m 先（東）には参道に平行して北に延びる路地があり、調査地点はこれを 100m ほど入った右側に位置する。調査地点から約 100m 奥（北）には「鎌足稲荷」と呼ばれる稲荷社があり、おそらくはそれに由来するのであろう、一帯はかつて「稲荷耕地」と呼ばれていた（『鎌倉町土地宝典』1930 など）。ここはまた、南北朝～室町時代前期にこの付近にあった関東の首府「鎌倉府」のほとんど西側隣地というに近い場所でもある。

調査地点西側の路地は「稲荷小路」という。小路は先に触れた稲荷社の下で山裾に当って右（東）に大きく折れ、200m ほどで北に入る狭い谷（「胡桃ケ谷」）の入口と丁字形に接したあと、平地のへりを囲むようにさらに巡って、「青砥橋」の先で再び六浦道に出てくる。「稲荷小路」に囲まれた場所は東西約 400m、南北（奥行）約 180mで、調査地点はその西端近くに位置する。東半部には鎌倉府に由来するとみられる「御所ノ内」の遺称がある。

地勢

地勢上からみれば、調査地点は東の朝比奈山塊を下ってきた滑川が、十二所付近の狭い谷間を抜けて両岸に形成した河岸段丘、もしくは山麓平野の上に位置する。段丘平野は平坦ではなく、ほぼ二カ所の微高地とその前後の低地から成る。調査地点付近の六浦道に沿っていえば、いわゆる「青砥橋」付近か

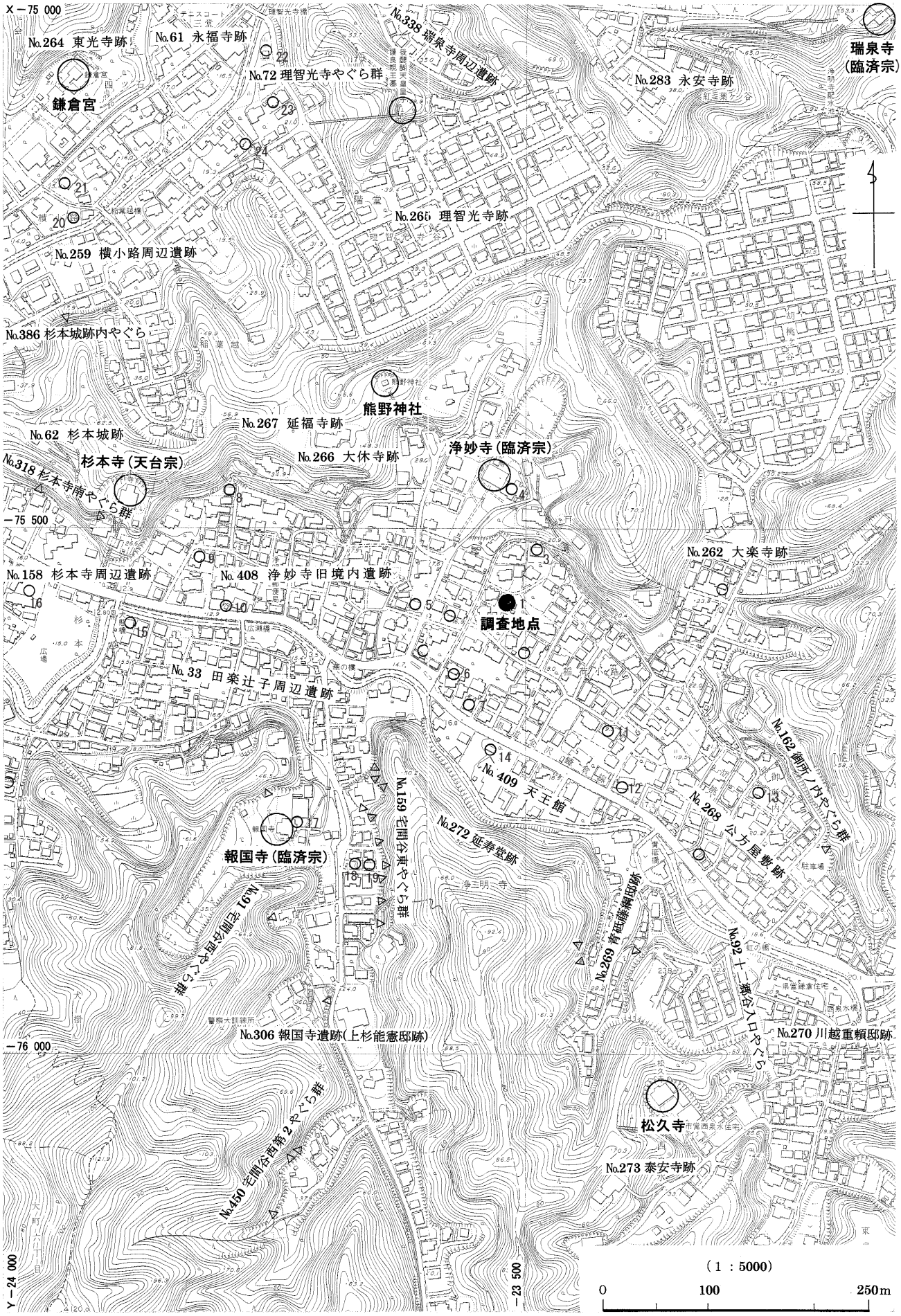


図１　調査地点と近辺の遺跡・旧跡

図１調査地点名（遺跡名）・地点番号・地番・（担当者と調査年度）・「調査報告書」（編集者と発行年度）

(№408 浄妙寺旧境内遺跡)

1．本調査地点　浄明寺 3－122－1・２(馬淵 2004)　２．浄明寺字稲荷小路 129－2(原 1984)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書１」(原ほか 1985)　３．浄明寺 3－126(原 2002)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 第２分冊」(原 2005)　４．浄明寺字向小路 78(斎木 1977)「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報１」(斎木 1983)　５．浄明寺字向小路 90－1(田代・原 1989)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７」(田代・原 1991)　６．浄明寺 3－101-13(斎木 2003)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22 第２分冊」(斎木ほか 2006)　７．浄明寺 3－115－2(田代 1997)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15 第２分冊」(松山 1999)　８．浄明寺 3－16－1(継 2000)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18 第２分冊」(宗臺 2002)　９．浄明寺 3－126(原 2002)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 第２分冊」(原 2005)　10．浄明寺 3－6－3(大河内 1994)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12 第２分冊」(大河内 1996)

(№268 公方屋敷跡)

11．浄明寺 3－143－2(原 1992)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10 第１分冊」(原 1994)　12．浄明寺 3－151-1、151－4(宮田 1994)「公方屋敷跡発掘調査報告書」(宮田 1996)　13．浄明寺 4－273(熊谷 2003)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22 第２分冊」(熊谷 2006)

(№409 天王館)

14．浄明寺 5－1－10(河野 1980)

(№33 田楽辻子周辺遺跡)

15．浄明寺字宅間 562－33(大上 1990)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書８」(大上 1992)

(№158 杉本寺周辺遺跡)

16．二階堂 912－1(馬淵 1990、1999)「杉本寺周辺遺跡」(馬淵 2002)

(№306 報国寺遺跡　上杉能憲邸跡)

17．浄明寺字宅間 533(田代 1976)「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I」(田代 1983)　18．浄明寺 2－474－12(原 2003)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23 第１分冊」(小野ほか 2007)　19．浄明寺 2－474－11 外(原 2003)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23 第１分冊」(山口 2007)

(№259 横小路周辺遺跡)

20．二階堂字横小路 110－3(宗臺 1994)「横小路周辺遺跡」(宗臺 1996)　21．二階堂字四つ石 115－3 の一部(福田 2003)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23 第２分冊」(福田 2007)

(№265 理智光寺跡)

22．二階堂字理智光寺谷 749－1(1973 大三輪)「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I」(大三輪 1983)　23．二階堂字稲葉越 802－7(大河内・瀬田 1990)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７」(大河内・瀬田 1991)　24．二階堂字理智光寺谷 750－1(手塚 1999)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17 第 1 分冊」(手塚・野本 2001)

ら下流に向かって徐々に高くなっていき、最高位で標高 18.9mほどの微高地となるが、ここを過ぎて次の微高地である杉本寺前面まで、長さ 500～600mにわたって、最大幅 300m ほどの低平な平坦面が形成されている。

調査地点はこの微高地間低地東縁にある。一帯の現地表の標高は 17.6～17.8m 前後で、微高地間の最低位地点（浄明寺郵便局前面付近）とは 4mの比高差がある。東側微高地より 2m余り低く、約 100m 北の浄妙寺本堂付近よりもやはり 2m ほど低い。

３．歴史的環境

縄文時代

縄文時代については、本地点と最も近いところでいえば、直線距離で 700～800m 北西に位置する荏柄天神社の参道脇地表下約 3m・標高 9m前後の層から、前期の諸磯ｂ式土器が採集されたことがあるが（赤星 1959)、本地点付近での報告例はまだない。縄文海進絶頂期の汀線が現在の海抜で 15m～20mだとすると、採集地点の離水時期や遺跡形成時期、あるいは出土層の性格などについて、あらためて検討されなければなるまい。

弥生時代

滑川沿い中上流付近の平坦面は広くはないが、弥生時代中期には早くも開けていたらしい。本地点西 400m にある杉本寺周辺遺跡（地点 16）では、この辺の基盤層である黒褐色粘質土上に弥生時代の住居址らしい落ち込みが検出され、中期後半頃の遺物も数点採集されている（馬淵ほか 2002)。もう少し西

に行けば、本地点から 900mほど離れた大倉幕府周辺遺跡群で、住居址数 10 軒と方形周溝墓で構成される中期後半～後期にかけての集落が報告されている（馬淵 1998・1999／斎木ほか 2007）。川沿いでは点々と弥生時代中期後半以降の土器が採集されているので（地点 10－大河内 1996／地点 14－未報告、筆者実見）、本地点周辺でもその頃から人の往来があったとみるべきだろう。本地点西北 600mの横小路周辺遺跡では、西遠江の系譜を引く後期後半の高坏が出土している（野本ほか 1999）。

古墳時代

前期の遺構は、鎌倉市内で今のところ山稜部と海岸部でしか発見されていない。六浦道沿道では、大倉幕府周辺遺跡群のうち鎌倉時代の大倉幕府東南角に当たる地点で、弥生時代末期～古墳時代初期の土師器甕が 1 点見つかっているのみで、本地点近在では報告例がない。しかし、逗子市と葉山町の境の山上に 4 世紀代の 2 基の前方後円墳が築かれていることから（「長柄・桜山古墳群」）、古墳時代前期、鎌倉地方にきわめて有力な豪族が蟠居していたことは間違いない。当然、広範な集落の存在も予想されよう。なお 2 基の前期古墳の位置は、後の律令時代では鎌倉と御浦の郡境にあたり、また奈良時代の古東海道に臨む場所でもあるのは、この地が早くから交通の要衝であったことを示唆していよう。

『古事記』には、倭建命の子足鏡別王（あしかがみわけ）が「鎌倉別（かまくらのわけ）」などの祖と記されている。ヤマト王権とつながりの深い「ワケ」が鎌倉にいたとすれば、当地が王権にとって東国経営の重要な場所であったことが想像できよう。

後期になるといっきに情報が増える。周辺丘陵地のいたるところで集落が発見され、横穴墓も少なくない。海岸地帯にあったといわれる古墳群（「下向原古墳群」）も、この時期のものであろう。本地点西 800m の大倉幕府周辺遺跡群の一角では、東御門川旧流路とその周辺から当該期の土師器が多数出土しており（馬淵 1993）、西御門山麓の横穴墓の点在と併せて考えれば、近隣に集落の存在することが十分に予想できる。

律令時代（奈良時代～平安時代前期）

この時代、当地方は相模（摸）国八郡の一つ「鎌倉郡」に属していた。鎌倉郡はいくつかの郷からなり、律令時代では、尺度・荏草・鎌倉・沼浜・方瀬の五郷が見える（天平七年 735『相摸国封戸租交易帳』／天平勝宝元年 749「正倉院古裂」）。平安時代中期承平五年（935）成立の『倭名類聚抄』には、上記に加えて梶原・尺度・大島が現れており（方瀬を除く）、これらもあるいはもっと早くから存在した地名であった可能性はあろう。

郷それぞれの範囲はいまだ確定的ではないが、調査地点付近は荏草郷に属していた可能性が高い。「荏草」の読みは、多くの写本を残す『倭名類聚抄』のうち那波道円の元和古活字本では、「エカヤ」と振られている。『新編相模国風土記稿』は、これがのちに現在の大倉東側一帯に残る字「エガラ」に変わったのであろうというが、根拠は示されていない。「エカヤ」と振られているのは元和古活字本の他になく、「荏草」郷の範囲についても議論を要する。おそらく後世の「大倉」以東で（高柳 1959）、六浦道を中心とした地域を指すのであろう。

さて、大化改新直後、五畿七道制が施行され、初期東海道は鎌倉を通過する。鎌倉郷への入り方については後世の大仏坂からと稲村ケ崎からの二説あり、郷内での経路等についても確定的ではないが、おおむね海岸寄りを通っていたとみて間違いない。初期東海道は鎌倉郡内では鎌倉郷からおそらく小坪を経て沼浜郷（逗子市）に出て、田越川を河口近くで渡った後御浦郡に抜ける。そして葉山町堀内付近から同町木古庭の地溝帯を通過、東京湾側の馳水（横須賀市走水）から房総に渡り、北上して終点の常陸

国府（石岡市）にいたる道筋をとった。

宝亀二年（771）五畿七道制の改編にともない、武蔵国が東海道に入れられ、代わって常陸国が東山道に編入される。これによって、相模国府を出た東海道駅路は相模野を北上して武蔵府中に行く道筋に変わり、鎌倉から外れることとなった。このことが、後述するように、鎌倉の集落構造に新たな要素を付け加えることになる。それは調査地点付近にも大きな影響を与えずにはいなかったはずである。

王朝国家時代

房総の大乱平忠常の乱（長元元年 1028～長元四年 1031）を平定するため、源頼義は父頼信とともに関東に下り、検非違使平直方に代わってこれを収める。頼義は康平五年（1062）、安倍貞任を討って「前九年の役」に勝利し、東国で「武家の棟梁」としての地歩を固めた。頼義は岳父となった直方から鎌倉の所領を譲られ、由比に石清水八幡宮を勧請して瑞籬を営んだ。みずからの拠点に精神的な核を据え、これによって鎌倉は名実ともに東国における河内源氏の拠点となった。

1 世紀後、頼義四代の後裔義朝は、のちの寿福寺の場所に居館「鎌倉之楯」を構えた。朝比奈峠を越えて鎌倉に入ってきた「六浦道」は、鶴岡八幡宮のまだなかったこのころ、大倉の辺から直線的に義朝の館に向かう。当時「鎌倉之楯」は、いわば六浦道の終点ともいえる場所に位置している。要するに「六浦道」は、当初、六浦津から義朝邸に向かう道として出発したのである。

かつて直方や頼義は、平忠常の乱に向かう際、鎌倉を兵站基地とした（野口 1993・馬淵 1994）。房総に渡る彼らの船はどこから出航したのだろうか。かつての東海道駅路の津であった走水は、鎌倉からは現在の単位で 30km近くあり（地図により馬淵概測）、当時でも、駅路が廃されてから 300 年近くを経て衰退の気配すでに濃かったのではないか。このとき、より鎌倉に近い東京湾側の天然の良港であった平潟湾が、代わって津として整備された可能性を視野に入れておきたい。六浦は武蔵国久良（くらき）（岐）郡に属するが、中世には「相州六浦」などと記された史料が散見される。西岡芳文はこの点に関して、「平忠常の乱の追討のために、鎌倉から上総へ通じる六浦が、海上交通の要衝・兵站基地として、事実上相模国の支配下におかれていたのではないだろうか」とし、「実は六浦が鎌倉と一体化して相模国衙の支配下にあった痕跡」である可能性を指摘している（西岡 2001，53 頁）。肯ける意見である。

このころ、六浦道に至近の位置にある調査地点一帯がどういう状況であったかは、伝わらない。律令時代の「荏草（えかや）」は平安時代のいつかの時点で「荏柄」に転訛した可能性が高いとされるが、今のところ当地点とのかかわりは不明である。

鎌倉時代

平安時代末期から鎌倉時代の初めにかけて、六浦道は三浦一族が要所を固めていた。東の起点である六浦には「和田ケ谷」があって和田氏の本拠とされ（異見もある）、また朝比奈峠には和田義盛三男の朝夷奈三郎義秀が蟠居していたと伝わる。中間の要衝杉本にはここを名字の地とする杉本義宗（三浦大介義明長男、和田義盛父）が住み、のちにおそらく和田に相承されている（馬淵ほか 2002）。西の起点義朝の館跡には、平安末期、岡崎義実（義明弟）・土屋義清父子が堂を営んでおり、義朝死後その地を管理していたことがわかる。また、六浦道から指呼の距離にある「荏柄（社）の前にありて御所の東隣たる」（『吾妻鏡』建保元年三月二十日条）場所には、義盛甥和田胤長の「屋地」もあった。ここにみられる三浦一族の配置には、彼らが「源家累代の家人」を名乗る所以が示されている。六浦道を守る意識の背後には、旧義朝邸が依然として武士団の精神的な拠りどころであり、それに向かう六浦道が集落の基軸と看做されていることがわかる。しばしば指摘されるように、頼朝が大倉に居館（「御所」）を構えたのも

その認識に立っていたからであろう。

しかし鎌倉時代において、調査地点付近の消息の伝わるのは中期になってからである。現在の地名「浄明寺」の元となった臨済宗寺院浄妙寺の開創以後のことであるが、この寺については後述する。鎌倉後期から末期にかけて鎌倉中で何度か起きた災害が、この一帯に及んだかどうかはわからない。しかし、弘安三年（1280）の火災や（『鶴岡社務記録』など）、永仁元年（1293）の大地震（『随聞私記』）、乾元元年（1302）の大火（同前）・延慶三年（1310）の火災（『北条九代記』）などは近在での罹災が記録されているので、その影響を想定しておくべきだろう。

南北朝～室町時代前期

元弘三年（正慶二年，1333）5 月、鎌倉幕府が滅ぶ。直後に鎌倉に入った足利尊氏の嫡子千寿王（義詮）は、二階堂の別当坊に居を占めたという。これを『新編相模国風土記稿』では永福寺といっているが、高柳光寿はこれについて、「二階堂の別当坊ということは永福寺の別当坊ということで永福寺そのものではない」といっている（高柳 1959，1972 改訂版 372 頁）。従うべき見解と考えるが、いずれにせよ永福寺のある谷間のどこかであろうから、調査地点とも山一つ隔てた、当地点からそう遠くない場所ということになる。この戦乱の影響については不明である。

延元二年（建武四年，1337）、陸奥の北畠顕家は奥州五十四郡の勢を合わせて 10 万余騎をもって鎌倉に攻め入る。顕家は朝比奈峠から鎌倉に入り、「杉本城」で足利方の大将である斯波三郎家長と戦った（『常楽記』建武四年十二月廿二日条）。このとき自軍の不利を知った足利方は、「城ヲ堅クシ塁ヲ深クスル謀ヲモ事トセス、一萬余騎ヲ四手ニ分ケテ、道々ニ出合、懸合懸合、一日支テ、各身命ヲ惜シマス戦」ったという（『太平記』巻十九「追奥勢跡道々合戦事」）。家長は三浦に退いて自刃している（『御的日記』、ただし『常楽記』『鎌倉大日記』は杉本城とする）。「杉本城」とは杉本寺背後の山塊のことである。この山塊が「城」と呼ばれるのはこの時期を措いて史料上にないが、赤星直忠は城域を東に広く見て、浄妙寺はもちろん北東の瑞泉寺の裏山付近まで郭の存在を想定している。北畠軍は合戦後東海道を西に向かうが、『太平記』によれば彼らは「無慚無愧の夷ども」で、途中路次の民家を掠奪し神社仏閣を焼き払っている。「城」の範囲内に本地点背後の山も当然含まれていること、また戦いが「道々」でおこなわれた、とあること、そして北畠軍の行状からみて、戦火が調査地点にも及んだ可能性は高い。

建武二年（1335）、権力を得た足利尊氏は、嫡子義詮を鎌倉に置き関東の管理にあたらせる。暦応元年（延元三年 1338）8 月に征夷大将軍となった尊氏は、貞和五年（1349）10 月、義詮のかわりに 5 歳の次男基氏を関東の首長として下向させる。彼の居宅を「鎌倉府」・「鎌倉御所」・「関東幕府」（義堂周信『空華日用工夫略集』）・「公方」などと呼んだ（ここでは「鎌倉府」と呼ぶ）。鎌倉府は以後足利五代にわたって存続するが、実質的には四代目持氏の永享十一年（1439）に滅ぶ（永享の乱）。鎌倉府については、調査地点東側のほとんど隣地というに近い場所にあり、その動静が当地点にも直接的影響を与えたことは間違いないので、これについては別に述べる。

さて、鎌倉府の設置により、鎌倉の街構造は大きく変わった。すなわち少なくとも権力者の意識構造の内部においては、石井進のいうように、街路の基軸が鎌倉時代の鶴岡八幡宮と若宮大路からかつての六浦道に戻ったと看做さざるをえない。それは確実に、旧幕府による都市空間を否定する意図に発していたと考えたい。しかし、鎌倉の全体的な頽勢のなかにあって、かつての若宮大路一帯のような繁栄が六浦道にもたらされることは、ついになかったであろう。

永享の乱から 10 年後の宝徳元年（1449）、持氏の子成氏（永寿王）が京から下って公方となる。この

とき従来の浄妙寺の公方屋敷は焼けていたという（『鎌倉大草紙』）。これがいつの火災によるものかは不明だが、その時には調査地点にも影響が及んだ可能性は高い。享徳三年（1455）、成氏は下総古河に去り、鎌倉府は完全に潰えた。以来鎌倉は政治的にも一集落に戻り、都市的性格を急速に失っていったはずである。高柳光寿によれば、明応の頃（1492～1500）にそれまでの都市区画である丈尺制に基づいた屋地の制はすたれ、かわって坪の制が用いられるようになった、という（高柳 1959）。これは鎌倉内の土地管理制度が、都市のそれから村落のそれに移行したということである。

鎌倉の都市的な場は、鎌倉幕府崩壊後若宮大路周辺から次第に失われていき、14 世紀第 3 四半期以降の鎌倉府の時代には六浦道沿いに移行していたであろう。しかし、それとてもかつての繁栄には遠くおよばず、鎌倉府の滅亡を待たずして、14 世紀後半頃には早くも衰退の気配濃厚だったのではないか。

近世以後

近世に入ると、鎌倉を扱った旅行記・地誌は多く書かれるようになるが、調査地点近辺に関する記述は、杉本寺を除いて目ぼしいものはない。江戸時代も後期になると、相模湾でとれた魚を材木座に集積し、六浦道を経由して金沢（六浦）に運んだあと、船で江戸に向かう搬路が形成されたという（阿部 1958）。六浦道自体の往来はある程度盛んだったことがうかがえる。本章第 1 項に述べたように、『皇国地誌』によれば、明治初期の浄明寺村が山がちの地形であって、滑川沿いにさほど広くはない田畑があるという状況が見てとれる。

稲荷山浄妙寺について

遺跡名ともなっている浄妙寺は、調査地点から北西へ直線距離で約 80m（山門まで）の位置にある。山号稲荷山。この寺の動静は、六浦道や鎌倉府とともにこの一帯の情勢に深く影響したであろう。この寺の沿革について、川副 1959 などにより要点だけ記しておきたい。

浄妙寺の開創経緯については、不明な点が多い。寺伝『稲荷山浄妙禅寺略記』（『浄妙寺略記』）によれば、文治四年（1188）足利義兼が創建し、寺号を極楽寺といった。開山は退耕行勇であった。のち義兼の子義氏が、当初密教の道場であった極楽寺をあらためて禅刹とした。『新編相模国風土記稿』は、宝暦八年（1758）の碑文（『浄妙寺略記』所載）により、極楽寺が禅刹となった年代を建仁元年（1201）とする。しかし、『略記』中の「当山歴代」にはその後寿福寺系の妙寂全玄・大歇了心が住したとあるので、禅刹とはいえ密教的な傾向が強かった。それを足利貞氏が中興したらしい。川副武胤はこれを次のように整理している。

> はじめ極楽寺といい、寿福寺と同じく密教的な傾向のある寺院であったのが正嘉のはじめ蘭渓道隆に嗣法した月峯了然が住山して後、純粋の禅にかわり、さらに後に寺号を浄妙と改めた。又貞氏がこれに帰依し、この寺の檀那となったと考えられる（川副／貫 1959，242 頁）。

鎌倉時代浄妙寺の沿革に関しては、筆者は大きく次のように把握する。当地にあった足利義兼建立の極楽寺が禅刹に変えられたのは、寿福寺創建と同じく宋風禅の導入政策の一環としてとらえられる。正嘉のはじめ（1257 年頃）の純粋禅への移行は、建長年間から弘長・文永年間（1260 年代～70 年代前半）にかけて全国的に起きた北条得宗政権による禅律重視策（馬淵 1998）の現われであろう。

貞氏の子尊氏もこの寺に縁が深かった。ただしずっと足利氏の氏寺だったわけではなく、北条高時が元弘二年（1332）から建武元年（1334）までの一時期、竺仙梵僊を浄妙寺に請住させている（川副／貫 1959，244 頁）。元亨三年の貞時十三回忌に、浄妙寺の僧衆 51 人が参加していることから、川副武胤は寺の総人口を 100 人前後と推定している。

鎌倉幕府滅亡後ほどなく、鎌倉の諸寺院に対し後醍醐天皇の新政府はそれらの所領を安堵している。鎌倉府の時代には、足利氏菩提寺の一つとして毎年2月公方の参詣を受けている。南北朝時代はこの寺のもっとも盛んであった時代であろうと推測されるが、資料に乏しく、規模など詳細は伝わらない。関東五山に列せられたのは、制度がはじまってしばらく経った文和二年（1353）以後のことである。

鎌倉府は当寺の東300～400mの距離にあるので、火災などがあれば当寺も影響を免れえなかったであろう。応永三十一年（1424）には寺が焼けており、永享元年（1429）および永享二年にも焼けている。享徳四年（1455）の乱のとき、幕命により公方成氏を討つために鎌倉に入った今川範忠の軍は、御所と「谷七郷」に火を放ったが、これらの火が当寺に及んだ可能性は高い。とすればその間にある調査地点もまた、確実に罹災したであろう。

鎌倉府の庇護を失ってからは衰えたらしく、文明十八年（1486）にこの寺を訪れた堯恵は、「台あれて春の草にかたぶき、ひはだ朽て苔のみどりにひとし」と荒廃を伝えている（『北国紀行』）。

その後、鎌倉の寺社の復興に努めた小田原北条氏から、天文年間に計四貫三〇〇文の寺地の寄進を受け（天文十六年1547・同二十二年1553）、天正十九年（1591）には徳川家康からも北条氏と同高が寄進されている。承応二年（1653）には、天正十八年（1590）以来欠いていた梵鐘を鋳造した（『新編鎌倉志』所引の梵鐘銘文による）。寛文二年（1662）再興のための勧進がおこなわれた。寛延元年（1748）、火災。宝暦四年（1754）には仏殿が再興された（「浄妙禅寺略記」）。江戸時代の塔頭は10余りあったが、現在はすべて廃絶した。明徳三年（1393）銘の足利貞氏逆修の宝篋印塔が境内にある。

鎌倉府と当地点

鎌倉府は調査地点の東隣の地にあたり、その動静が当地点に直接的な影響を与えたことは間違いない。あらためてその消長をみて、当地点とのかかわりを探ってみたい。

鎌倉府は関東10カ国を統治する機関で（のち氏満の明徳三年1392に12カ国に）、首長は「関東公方」・「鎌倉公方」「鎌倉殿」などと呼ばれ、基氏以下、氏満・満兼・持氏・成氏の五代をいう。補佐役として執事が置かれ、当初義詮の執事として斯波家長があたったが、家長が先述の杉本の戦いで敗死したあと、尊氏は高師冬と上杉憲顕を京都から下した。補佐役の二院制は尊氏と弟直義の二頭政治を反映したもので、観応二年（正平六年1351）まで続く。

観応の擾乱（1350～1352）で直義が滅んだ後、尊氏は配下の畠山国清を基氏の補佐役に置いたが、国清没落後の貞治二年（正平十八年1363）、基氏は隠棲していた旧直義派の憲顕を管領として再び迎えた。関東管領の称が確立されるのはこれ以後である。

基氏没後、公方は次第に京都の将軍と対立するようになり、四代持氏のとき上杉禅秀の乱後将軍を足利義政と競い、六代将軍義教と衝突して永享十一年（1439）乱をおこした（永享の乱）。戦いは幕府方の勝利に終わり、持氏は永安寺で自刃する。これにより鎌倉府は実質的に消滅したといえる。

永享の乱から10年後の宝徳元年（1449）、持氏の子成氏（永寿王）が京から下って公方となる。このとき従来の浄妙寺の公方屋敷は焼けていたので、成氏は山内の龍奥（興）院を経て浄智寺に入った。翌宝徳二年十一月、新第ができてそれに移ったという（『鎌倉大草紙』など）。この「新第」がどこであったかはわからない。しかし成氏も管領上杉憲忠を謀殺して幕府と衝突し、康正元年（1455）下総古河に逃れる。これで鎌倉府は完全に消滅した。

（馬淵）

引用・参考文献は第四章末に一括

第二章　調査の概要

１．調査にいたる経緯

本調査区は市内東部の浄明寺三丁目、県道金沢・鎌倉線の北側、現在の浄妙寺境内の東南約 80 メートルに位置する。個人専用住宅の鋼管杭打ちによる基礎工事が行われることになり、平成１６年（2004）６月 3･４日に確認調査を行った結果、表土下約 75cm より中世遺物・中世遺構面を確認したため本調査を行うことになった。

２．調査方法と経過

北側に小山を控えた平坦な場所に位置する当調査地は旧浄妙寺境内に含まれる可能性がある。現地表下 60～70 ㎝までおよぶ表土層のうち、50～60cm まで重機を用いて除き、以下を人力により掘削した。

調査面積は 49.50 ㎡。調査時の測量は便宜上、任意の方眼設定を用いて実測した。本書に図化するにあたっては、周辺の 4 級基準点から調査地点の座標を求めた後、遺構図と座標軸を照合したものを掲載した。調査区はＸ－75 566～75 576・Ｙ－23 517～23 524（エリア 9）内に位置する。

調査は平成 16 年 8 月 9 日～同年 10 月 22 日の期間を要した。主な作業内容は以下のとおり。

8 月 9 日（月）重機による表土掘削
8 月日 17（火）機材搬入
8 月 18 日（水）Ⅰ面遺構確認開始
8 月 23 日（月）Ⅰ面全景撮影・平面実測
8 月 24 日（火）Ⅱ面への掘り下げ・遺構確認開始
8 月 27 日（金）Ⅱ面全景撮影
8 月 28・30 日（土・月）平面実測
8 月 31 日（火）Ⅲ面へ掘り下げ・遺構確認開始
9 月 3 日（金）Ⅲ面全景撮影
9 月 4 日（土）Ⅲ面平面実測
9 月 14 日（火）作業中断
9 月 29 日（水）発掘調査再開。Ⅳ面全景撮影
9 月 30 日（木）Ⅳ面平面実測・Ⅴ面への掘り下げ・遺構確認開始
10 月 4･5 日（月・火）豪雨により水没
10 月 6･7 日（水・木）Ⅴ面上層全景撮影
10 月 8 日（金）台風に備え養生
10 月 14 日（木）Ⅴ面全景撮影
10 月 15 日（金）Ⅴ面平面実測・Ⅵ面へ掘り下げ開始
10 月 16 日（土）調査区壁精査開始
10 月 19 日（火）台風に備え養生
10 月 22 日（金）Ⅵ面全景撮影。調査区壁土層断面実測および座標移動をおこなったのち機材撤収、調査を完了する

（松原）

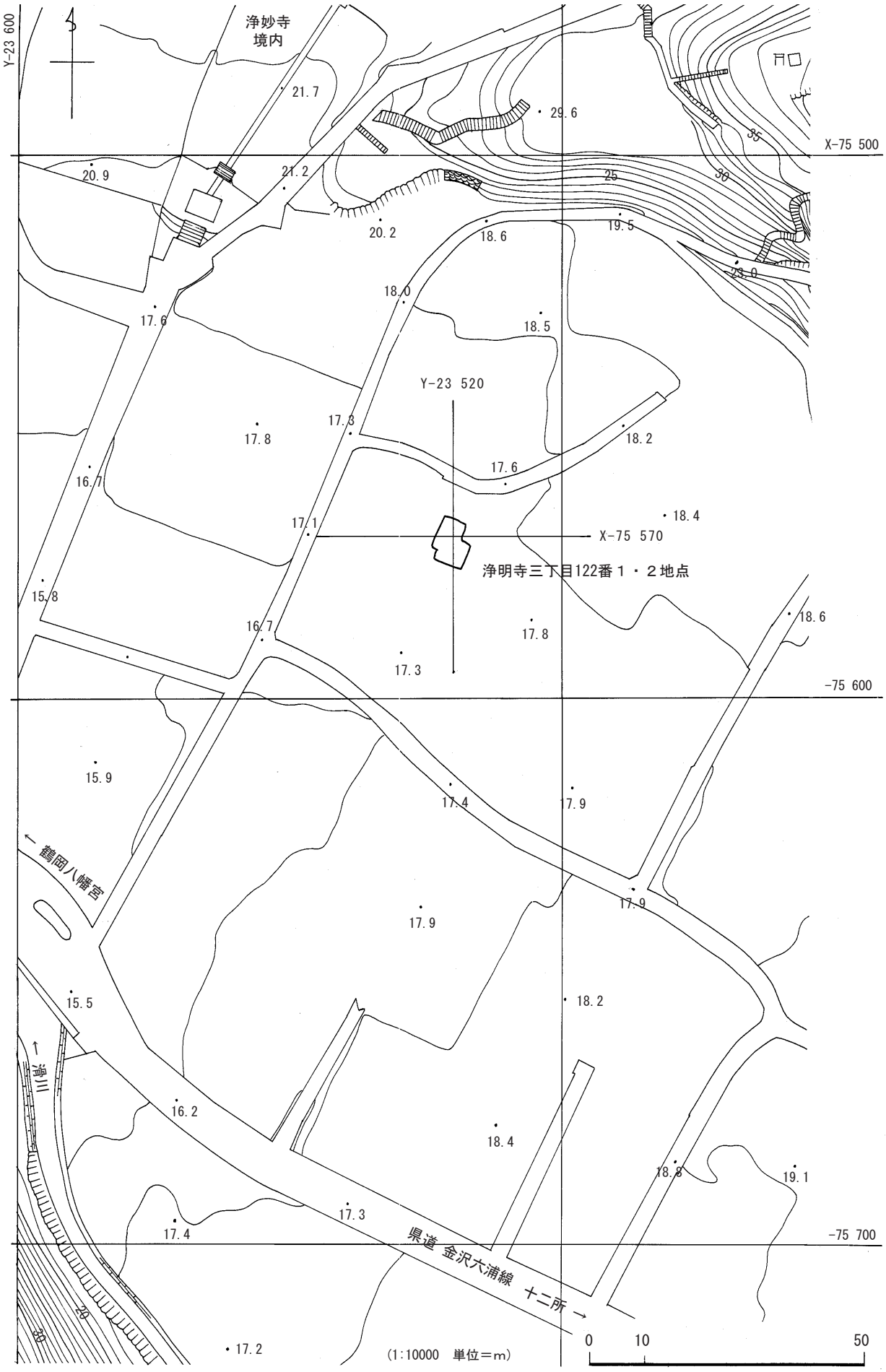

浄妙寺
境内
Y-23 600
X-75 500
Y-23 520
X-75 570
浄明寺三丁目122番１・２地点
-75 600
-75 700
鶴岡八幡宮
三浦
県道 金沢六浦線 十二所
21.7
29.6
20.9
21.2
20.2
18.6
19.5
23.0
18.0
17.6
18.5
17.8
17.3
18.2
17.6
16.7
18.4
17.1
15.8
16.7
17.8
18.6
17.3
15.9
17.4
17.9
17.9
17.9
15.5
18.2
16.2
18.4
18.8
19.1
17.3
17.4
17.2
(1:10000 単位＝m)
0
10
50

図２　座標と海抜

第三章　調査の成果

第１節　層序と各面の概要

地表面

標高は、調査区東側が高く約 17.70m、西側が 17.60mであり、その下の表土は平均 60 ㎝前後の厚みがある。表土は多く近世～近代の耕作土で、粗い暗灰褐色を呈している。これを除くと、10～20 ㎝の遺物包含層を挟み、第Ⅰ面が現れる。

Ⅰ面

標高 17.0～17.1mにある。面上にある包含層は大量の炭化物や泥岩の小塊、遺物片を含む粘性ある土で、出土遺物からみて、南北朝時代以後の中世後期にすでに入っているとみてよい。

この面はおおむね拳大～半人頭大の破砕泥岩による地形（じぎょう）で構築され、下層ほどには遺構密度は高くない。検出遺構には土坑 4 基、土師器集中部 3 群、柱穴列 5 列を含む柱穴様の小穴 34 口などがある。そのほか、面上に土師器皿の大型片が 10 数点散在している。調査区西南角付近で、近世とみられる大型の浅い土坑 1 基が検出されている。

Ⅱ面

Ⅰ面を構成する泥岩群や挟雑物の多い茶褐色～暗褐色粘質土は、15～25 ㎝の厚みがあり、これを排除すると、広い範囲で人頭大凝灰岩切石の粗く敷かれた面が現れ、これを「Ⅱ面」とした。凝灰岩と凝灰岩の間は拳大～半人頭大の泥岩や黄褐色のロームで充填される。面の標高は 16.8～16.9m。

検出された遺構は、土坑 3 基、掘立柱建物 1 棟・柱穴列 5 列を含む柱穴様の小穴 51 口などで、小穴の中には礎石の可能性のある加工された凝灰岩の入ったものもある。

Ⅲ面

Ⅱ面構成土である凝灰岩・泥岩・ローム地形土を排除すると、15～20 ㎝でⅢ面に当たる。この面はおおむね数㎝大の泥岩や炭化物・遺物が大量に入った明黄褐色土を敷いて構築されているが、西南の一部は人頭大泥岩を敷いた強固な地形層が見られる。面の標高は 16.6～16.8m。

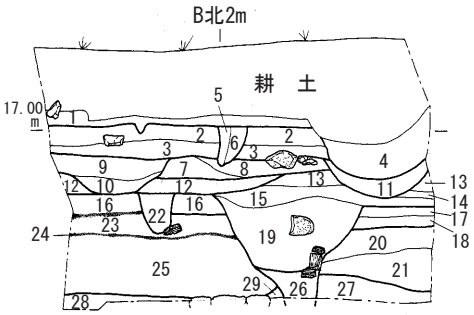
調査区中央部から東南域にかけて、東側は溝 1 に落ちていき、西側も直線的に段をなす約 3m幅、高さ 10 ㎝ほどの浅い高まりがある。

検出された遺構は、溝 1 条、土坑 3 基、柱列 1 列を含む柱穴様の小穴 9 口、土師器集中部 2 群などである。

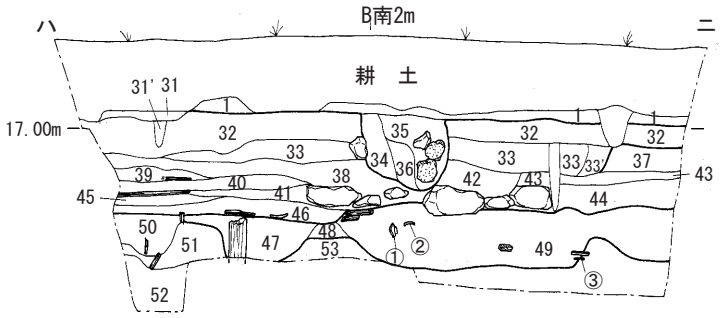
Ⅳ面上層面

Ⅲ面構成土は 20～30 ㎝の厚みがあり、その下に暗茶褐色～明茶褐色の泥岩地形と炭化物の混じった硬い面がある。これをⅣ面とした。しかし「Ⅳ面」の構成層は 5～10 ㎝の厚みを持ち、その下にはもう一枚の面がある。調査時点ではこれを「Ⅳ面下層面」とし、当初の面を「上層面」と称して区別した。後述するように、両者はまったく異なった面の状況を持っているため、本来ならば下層面には別の数字（「Ⅴ面」）を与えることを考慮すべきであるが、資料整理時の混乱を避けるため変更しなかった。

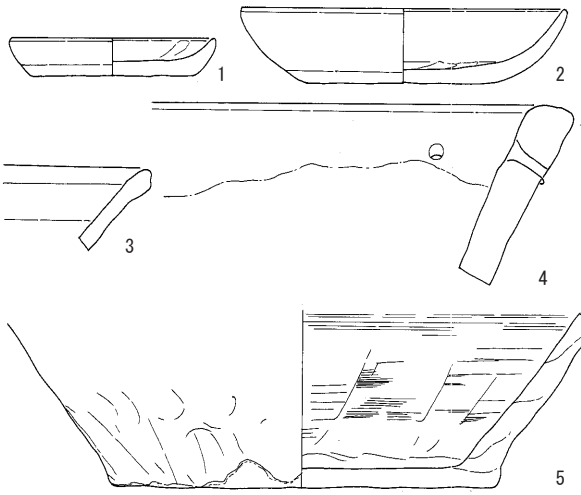
上層面は標高 16.35～16.5mにある。面西半部に土師器・木製品等の遺物の散在する平坦面があり、その東端は南北に列をなす 7 個の凝灰岩切石で示されている。その 80 ㎝前後東側には切石列に平行して柱穴の連接する長さ 2.1mほどの落ち込みがあり、さらに 80 ㎝東側の調査区東壁際には、木枠を持つ溝 1 条が南北方向に通じる。また二箇所に炭化物のひろがりが認められる。切石列の西側には土師器と角

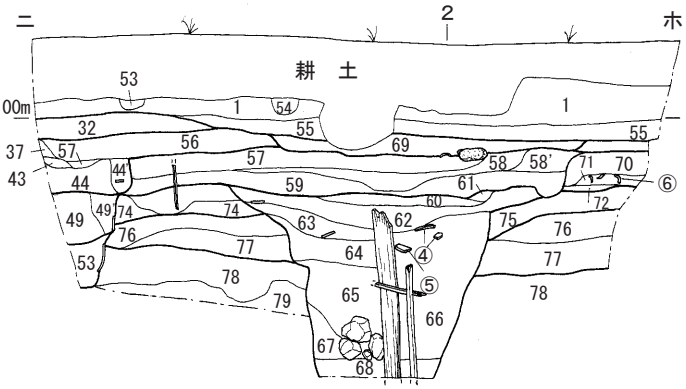


東 壁 北 側

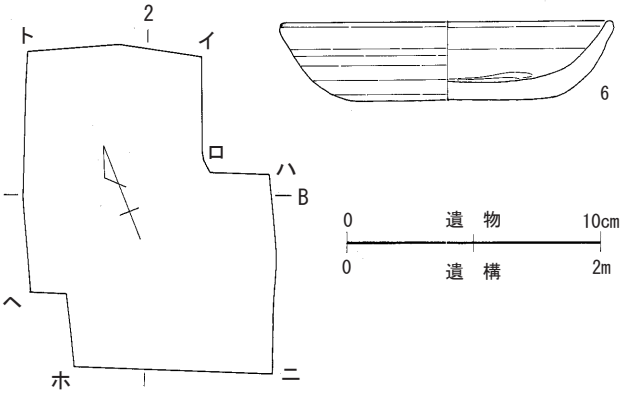


東 壁 南 側



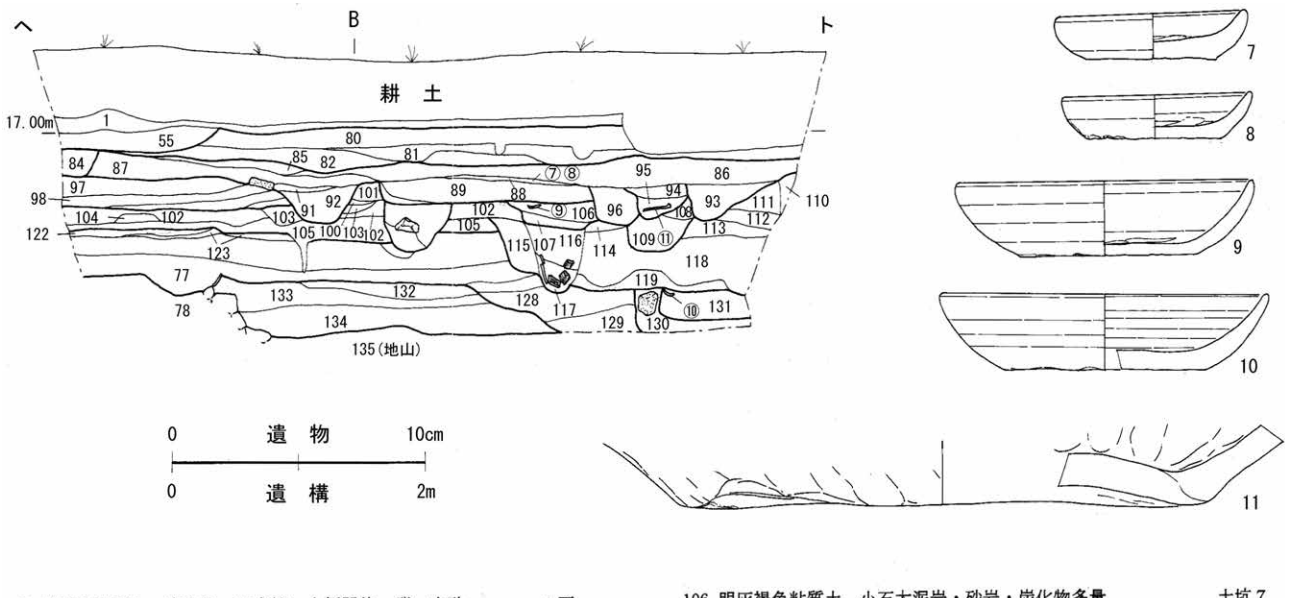


南 壁



1 黒褐色粘質土　泥岩粒・炭化物・スコリア・山砂
2 茶褐色弱粘質土　泥岩粒多量　玉石・土師器片少量　1面
3 暗茶褐色弱粘質　泥岩粒多量　炭化物・土師器片少量　1面
4 茶褐色弱粘質土　大小泥岩粒多量　土師器片・炭化物少量
5 暗茶褐色弱粘質土　小泥岩粒多量　土師器片・炭化物少量
6 暗茶褐色弱粘質土　小泥岩粒多量　土師器片・炭化物少量
7 茶褐色粘質土　泥岩粒多量　ロームブロック少量　2面
8 ローム土　泥岩粒・炭化物少量　しまり良　2面
9 暗茶褐色粘質　泥岩粒多量　炭化物・土師器片　土坑4
10 暗茶褐色粘質　泥岩粒多量　炭化物・土師器片　土坑4
11 暗茶褐色粘質　泥岩粒・ロームブロック　炭化物少量
12 暗褐色弱粘質　泥岩粒・炭化物・土師器片　3面
13 暗茶褐色粘質　泥岩粒・ロームブロック　3面
14 暗茶褐色粘質　砂岩ブロック・木片　3面
15 暗茶褐色粘質　砂岩・ロームブロック多量　3面
炭化物・泥岩・木片・土師器片少量
16 暗茶褐色粘質土　粒～拳大泥岩多量　炭化物・土師器片　4面
17 暗褐色腐植土　泥岩粒・炭化物少量　4面
18 暗褐色腐植土　泥岩粒少量　4面
19 暗褐色腐植土　粒～拳大泥岩多量　木片・土師器片・炭化物
20 人頭大泥岩つまる　隙間は暗褐色腐植土　5面
21 人頭大泥岩つまる　隙間は暗褐色腐植土・泥岩粒・砂　5面
22 暗褐色粘質土　拳大泥岩・ロームブロック・炭化物含む
23 人頭大泥岩・破砕泥岩層　5面
24 木器層
25 人頭大～大型泥岩つまる　隙間は暗褐色腐植土　溝4
26 黒褐色粘質土　木片・貝片多量　泥岩
27 黒褐色粘質土　混入物ほとんどなし　溝5
28 暗褐色粘質土　炭化物・木片　溝4B
29 暗褐色粘質土　溝4B
30 暗褐色粘質土　拳大泥岩・炭化物・山砂
31 暗褐色粘質土　小石大泥岩・炭化物・土師器片
32 半人頭大泥岩・破砕泥岩の地行　1面
33 明褐色粘質土　泥岩粒・炭化物多量　土師器片・山砂　1面
34 暗褐色粘質土　土師器片・炭化物多量　粒～半人頭大泥岩
35 暗褐色粘質土　泥岩・安山岩・砂岩・土師器片・炭化物
36 明褐色粘質土　破最泥岩多量　炭化物
37 拳大泥岩地行　炭化物多量　2面
38 暗茶褐色粘質土　粒～拳大泥岩　・炭化物多量
土師器片・山砂
39 明茶褐色粘質土　粘性強　泥岩粒・炭化物木片小量
40 暗茶褐色粘質土　拳大泥岩多量　炭化物・土師器片
41 暗茶褐色粘質土　拳大～大型泥岩つまる　炭化物
42 暗褐色粘質土　粒～拳大泥岩多量に詰まる　溝1
炭化物・土師器片　溝1
43 黒褐色粘質土　炭化物多量　小石大泥岩・土師器片　溝1
44 大型泥岩群　溝1
45 暗青灰色粘質土　炭化物多量　小石大泥岩・木片・土師器片　溝1
46 暗青灰色粘質土　炭化物多量　小石大泥岩　粘性強　溝1
47 暗青灰色粘質土　小石大泥岩微量　粘性強　溝2
48 暗青灰色粘質土　小石大泥岩・炭化物・木片　粘性強　溝2
49 暗青灰色粘質土　小石大泥岩・炭化物・木片・土師器片　粘性　溝2
50 明青灰色粘質土　半人頭大泥岩・多量　炭化物・木片
51 人頭大泥岩群
52 暗青灰色粘質土　小石大泥岩・炭化物
53 暗褐色粘質土　炭化物多量
54 暗褐色粘質土　土師器片・炭化物・木片・礫・泥岩粒
55 明褐色粘質土　泥岩粒・炭化物・土師器片　近世土坑
56 泥岩地行　2面
57 明黄褐色粘質土　粒～小石大泥岩非常に多量　3面
炭化物・土師器片・山砂
58 暗灰褐色粘質土　炭化物多量　3面
小石～拳大泥岩・土師器片・山砂
59 暗灰褐色粘質土　炭化物・木片・小石大泥岩・土師器片
60 炭化層　青灰色粘土　泥岩・木片　井戸1
61 灰褐色土　鉄分含み硬化　井戸1
62 青灰色粘質土　炭化物・木片非常に多量　泥岩・遺物片　井戸1
63 黒褐色粘質土　木片非常に多量　炭化物・泥岩　井戸1
64 青灰色粘質土　炭化物多量　小石大泥岩　粘性強　井戸1
65 青灰色粘質土　少量の木片・炭化物・小石～半人頭大の泥岩・　井戸1
66 大型泥岩・砂岩群　炭化物混入　井戸1
67 青灰色粘質土　半人頭大の泥岩・砂岩多量　井戸1
68 砂利層　礫・小石大の泥岩・砂岩からなる　井戸1
69 暗灰褐色粘質土　小石～拳大泥岩・炭化物・礫・土師器片多量　土坑14
70 拳～人頭大泥岩・砂岩地行　炭化物多量
71 明褐色粘質土　土師器片・炭化物・泥岩粒
72 炭化層
73 明黄茶色粘質土　泥岩と炭化物混じりの粘土が混在　締まり良　4面
74 破砕泥岩地行　下層に炭化物を含む青灰色粘質土を敷く　4面
75 明灰色粘質土　少量の泥岩粒・炭化物・木片・礫・灰色砂　粘性強
76 破砕～人頭大泥岩砂岩地行　5面
77 青灰色粘質土　木片・炭化物・小石～拳大の泥岩　粘性強　5面
78 大型泥岩・砂岩地行　6面
79 明灰色粘質土　少量の泥岩粒・炭化物・木片・礫・灰色砂　粘性強

図３　調査壁土層断面図　同出土遺物（１）



80 暗褐色粘質土　炭化物・泥岩粒・土師器片・礫・山砂　1面
81 赤褐色粘質土　多量のローム土・小石～半人頭大泥岩・炭化物　2面
82 暗褐色粘質土　ローム土ブロックと粒～半人頭大泥岩混在　2面
地行土
83 小石～半人頭大泥岩地行　2面
84 明灰色粘質土　小石大泥岩多量　炭化物・礫・土師器変片　土坑１５
85 暗褐色粘質土　粒～半人頭大泥岩の半地行土
86 暗褐色粘質土　炭化物多量　粒～半人頭大泥岩・砂岩・山砂・
遺物片・鉄分
87 大型泥岩・砂岩地行
88 土師器集中部２
89 明褐色粘質土　粒～拳大泥岩・炭化物・山砂
90 明褐色粘質土　粒～拳大泥岩・炭化物・山砂
91 暗褐色粘質土
92 明褐色粘質土　拳大の泥・砂岩多量
木片・炭化物・山砂・土師器片
93 灰茶褐色粘質土　大小泥岩・炭化物・遺物片　土坑１１
94 黄茶褐色粘質土　泥岩粒多量　炭化物　締まり良
95 黄灰褐色粘質土　泥岩粒多量　炭化物
96 灰茶褐色粘質土　小石大泥岩・炭化物多量　遺物片
97 半人頭大泥岩地行　3面
98 明褐色粘質土　泥岩砂岩粒・炭化物・土師器片　3面
99 明褐色粘質土破砕泥岩が詰まる　3面
100 暗褐色粘質土　泥岩粒・山砂　3面
101 拳大泥岩地行　3面
102 大型泥岩地行　4面
103 暗褐色粘質土　非常に多量の炭化物　泥岩粒・山砂・土師器片　4面
104 明褐色弱砂質土　多量の山砂　炭化物・土師器片　4面
105 青灰色粘質土　粒～小石大泥岩・炭化物多量　土師器片　4面
106 明灰褐色粘質土　小石大泥岩・砂岩・炭化物多量　土坑７
107 青灰色粘質土　炭化物多量　小石大泥岩・腐植土　土坑７
108 黄灰褐色粘質土　泥岩粒・炭化物・木片　土坑１２
109 暗灰褐色粘質土　半拳大泥岩多量　炭化物・木片　土坑１２
110 灰褐色粘質土　炭化物多量　拳大泥岩
111 灰茶褐色粘質土　拳大泥岩詰まる
112 青灰色粘質土　泥岩粒多量　大型泥岩含む
113 暗灰色粘質土　炭化物・小石大泥岩多量　締まりやや弱
114 青灰色粘質土(腐植土)　泥岩粒多量　大型泥岩含む
115 青灰褐色粘質土　粒～大型泥岩・炭化物　溝４
116 青灰色粘質土(腐植土)　１１４より泥岩少ない　溝４
117 青灰色粘質土　炭化物・泥岩粒・腐植土　大型泥岩含む　溝４
118 青灰色粘質土　大型泥岩詰まる　炭化物・木片　溝４
119 暗灰褐色粘質土　腐植土・炭化物・木片　溝４
120 青灰色粘質土　炭化物・小石大泥岩多量　P. ５７
121 炭化物層　泥岩粒少量　P. ５７
122 破砕泥岩地行　5面
123 明灰褐色粘質土　炭化物多量　泥岩粒・土師器片　5面
124 大型泥岩・砂岩地行　5面
125 青灰色粘質土　拳大泥岩　5面
127 暗灰色粘質土　貝片・泥岩粒・炭化物
128 暗灰褐色粘質土　貝片・泥岩粒　締まり強　溝４C
129 黒灰色粘質土　炭化物・明灰色土ブロック・木片　溝４C
130 暗灰褐色粘質土　炭化物　溝４B
131 明茶褐色粘質土　炭化物・木片　溝４B
132 暗灰色粘質土　泥岩粒・炭化物少量　粘性強　溝５
133 黄茶色腐植土　多量の木片　貝片・炭化物泥岩　溝５
134 暗灰色粘質土　僅かに灰色粘土・泥岩粒・炭化物木片混入　溝５
135 黒灰色粘質土　灰色土ブロック混入　地山

図４　調査区壁土層断面，同出土遺物（2）

材が散見され、人の生活痕跡らしき状況が認められる。

Ⅳ面下層面

上層面を構成する泥岩層などを除くとすぐにまた硬い平坦面が現れ、掘立柱建物２棟・柱穴列３列を含む柱穴様の小穴 69 口、大型の舟形を含む土坑３基、井戸１基が検出された。上層面と近接しているために「Ⅳ面下層面」と名づけたが、むしろこの間に当遺跡の画期を設定してよいほどに、面の状況はⅣ面上層面とはまったく異なる。この面は鎌倉時代後期に属する。

この面はおおむね平坦で、標高は 16.4～16.5m にある。

Ⅴ面

Ⅳ面構成層は平均して 20 cm前後の厚みがある。この下には泥岩による地形層が広っており、これをⅤ面とした。泥岩は拳大から人頭大まで大きさは場所により異なるが、強固で、泥岩と泥岩の空隙は褐色の植物性腐食土や青灰色の粘質土に充填されている。

この面は北側に溝、東側にも溝らしき板壁を持ち、町並の１区画の北東角に相当するとみてよい。北

側の溝から2.8mのところで北に向かって落ちる、落差10㎝弱の段状部がある。検出された遺構は、段を越えて存在する掘立柱建物1棟を含む小穴23口、土坑1基、北側溝に加えられた修復時の凝灰岩石積み1基等がある。

面の標高は、段の上部で15.8～15.9m、下部で16.8m前後である。

Ⅵ面

Ⅴ面を構成する厚い泥岩地形層、およびその下の青灰色粘質土は、併せて 20 ㎝から場所によっては40㎝もの厚みがある。これを除くと、今度は人頭大、あるいはそれ以上の大型泥岩で地形された面に当たる。これをⅥ面とした。

面の調査区南寄りには、北西から南東にかけて凝灰岩切石と板によって段差が形成され、北側が一段低くなっている。掘削深度規制により全体を底面まで掘り下げることはできなかったが、西壁際を深掘りして基盤層を確認した。面の標高は、上段で15.9～16.2m、下段基盤層面上で15.3～15.4mである。

第２節　各説

1.　Ⅰ面（図5）

検出高：　17.0～17.1m　構成土：暗褐色粘質土・破砕泥岩や泥岩塊による地形（じぎょう）　検出遺構：土坑4基・小穴34口（柱穴列5列含む）・土師器皿集中部3群

近世土坑（図5）

位　置：Ｘ－75 570～－75 576　Ｙ－23 524～－23 519　**規　模**：南北3.3m以上×東西5m以上×深さ18㎝　**主軸方位**：Ｎ－60°－Ｅ　**重複関係**：柱穴列1を切る　**特記事項**：近世遺物片を包含する浅い落ち込み，近世の池か？　※土層断面は図3・4参照

柱穴列1（図6）

位　置：Ｘ－75 568～－75 575　Ｙ－23 517～－23 520　**規　模**：南北3間（柱間距離約1.96m）柱穴底面高 16.63m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**主軸方位**：Ｎ－18°－Ｅ　**重複関係**：土坑3に切られる。南端の1穴は近世土坑により消失し、礎石のみ残る。　**出土遺物**：P.3土師器皿Ｒ種皿小型（1）　**特記事項**：柱間距離に安定性を欠くが、4穴が1列に並んでいるので抽出した。

柱穴列2（図6）

位　置：Ｘ－75 567～－75 572　Ｙ－23 518～－23 520　**規　模**：南北2間（柱間距離1.90m）柱穴底面高16.8m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**主軸方位**：Ｎ－21°－Ｅ　**重複関係**：柱穴列4･5を切る。**出土遺物**：図化しうるものなし　**特記事項**：柱穴らしいほぼ同規模の小穴が並ぶ。

柱穴列3（図6）

位　置：Ｘ－75 571～－75 576　Ｙ－23 517～－23 520　**規　模**：南北２間（柱間距離約1.96m）　柱穴底面高16.89m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**主軸方位**：（Ｎ－17°－Ｅ）　**重複関係**：土坑２に切られる　**出土遺物**：図化しうるものなし　**特記事項**：柱間が不安定だが、大きさ、深さとも同程度のものが並んでいる。

柱穴列4（図6）

位　置：Ｘ－75 568～－75 573　Ｙ－23 517～－23 522　**規　模**：南北１間（柱間距離約1.87m）東西２間（柱間距離約2.09m）　柱穴底面高16.73m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：（Ｎ－24°－Ｅ）　**重複関係**：柱穴列５を切り、柱穴列２に切られる　**出土遺物**：図化しうるものなし　**特記事項**：東

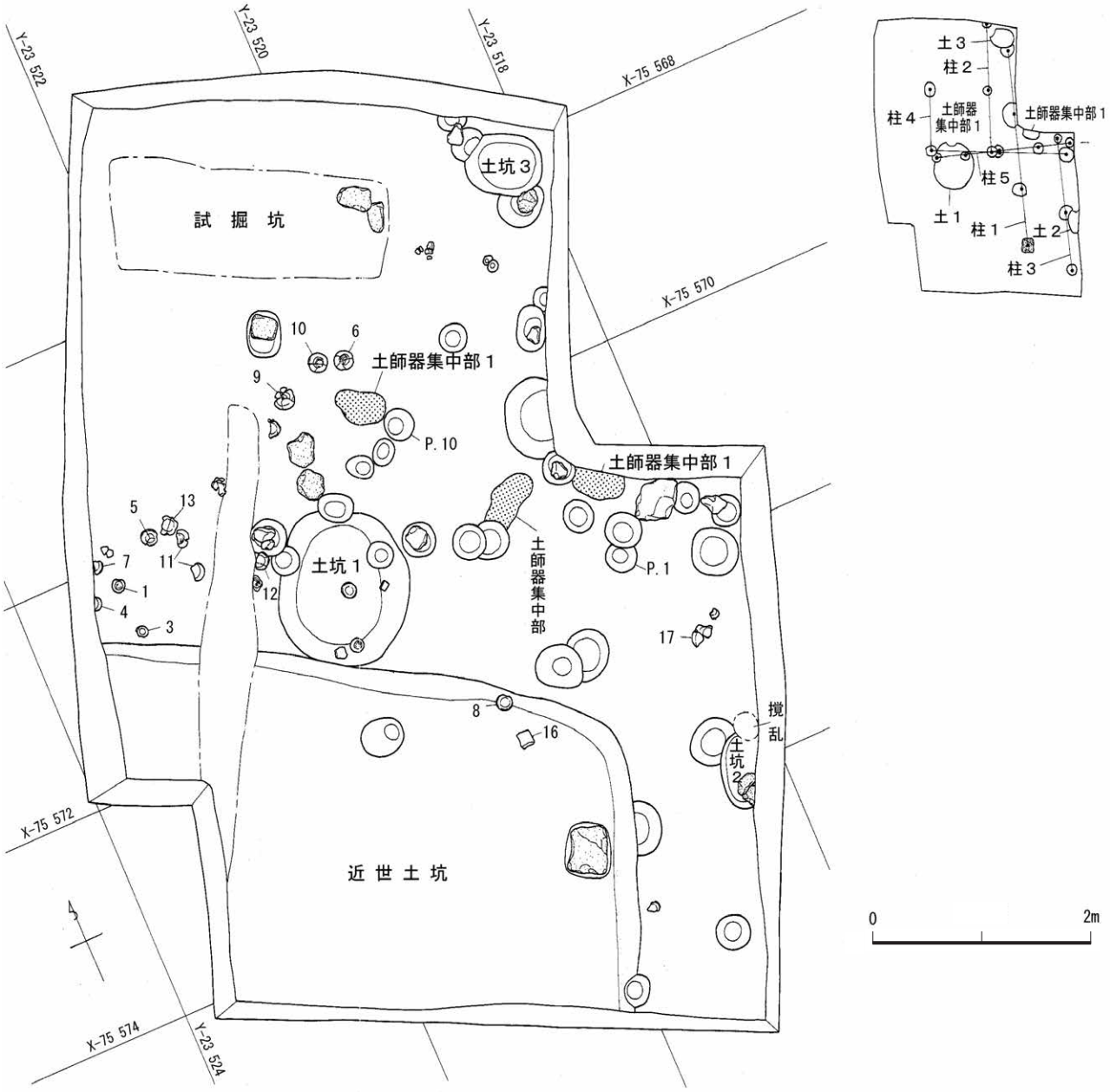


図5　Ⅰ面遺構全図

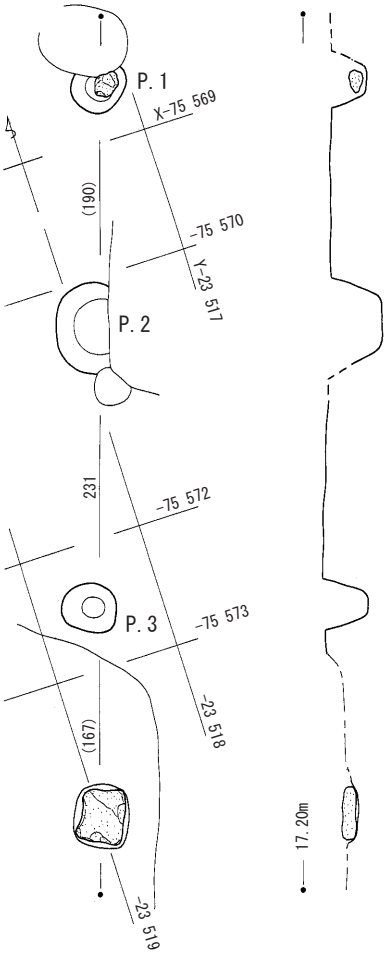
西3穴の並びと、西端に1間直角に北に延びる柱間が見られる。掘立柱建物の一部か。

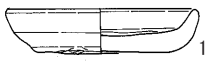
柱穴列5（図6）

位　置：X－75 570～－75 572　Y－23 517～－23 522　**規　模**：東西4間（柱間距離約1.03m）　柱穴底面高16.75m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**主軸方位**：（N－73°　－W）　**重複関係**：土坑1を切り柱穴列2・4に切られる　**出土遺物**：図化しうるものなし　**特記事項**：半間ずつの短い柱間でほぼ1列に並ぶ。この主軸方位が地割区画の方位でもあろう。

土坑1（図7）

位　置：X－75 570～－75 572　Y－23 520～－23 522　**規　模**：東西約120㎝×南北137cm×深さ約24cm（底面高16.79m）　**平面形**：楕円形　**断面形**：深皿形　**主軸方位**：（N－31°　－W）　**充填土**：図に記載　**重複関係**：柱穴列5に切られる　　**出土遺物**：土師器皿R種皿小型（1～4）・同大型（5）・瀬戸天目

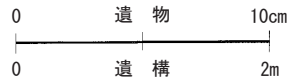


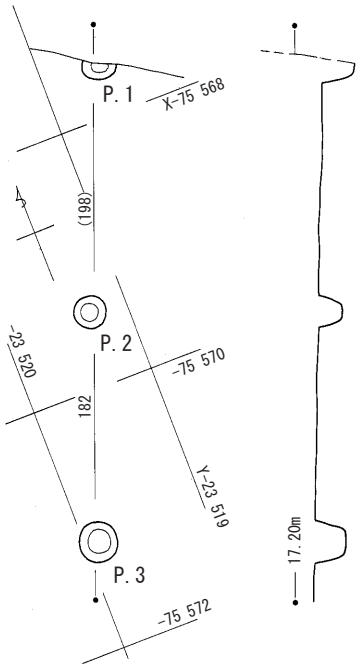


柱穴列１　P.1出土

柱穴列１	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	46×40×29
P.2	73×(−)×33
P.3	43×39×35

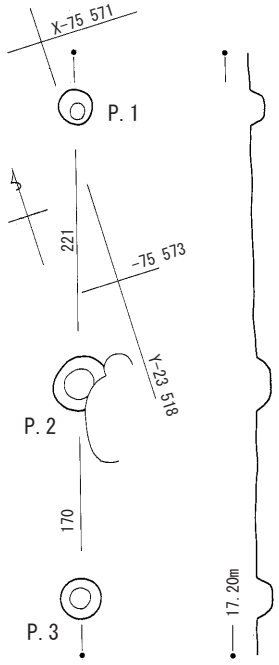
単位 cm





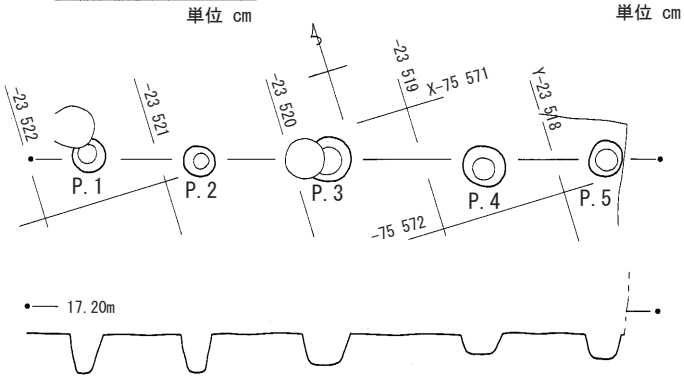
柱穴列２	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	27×(−)×25
P.2	27×25×19
P.3	33×30×24

単位 cm



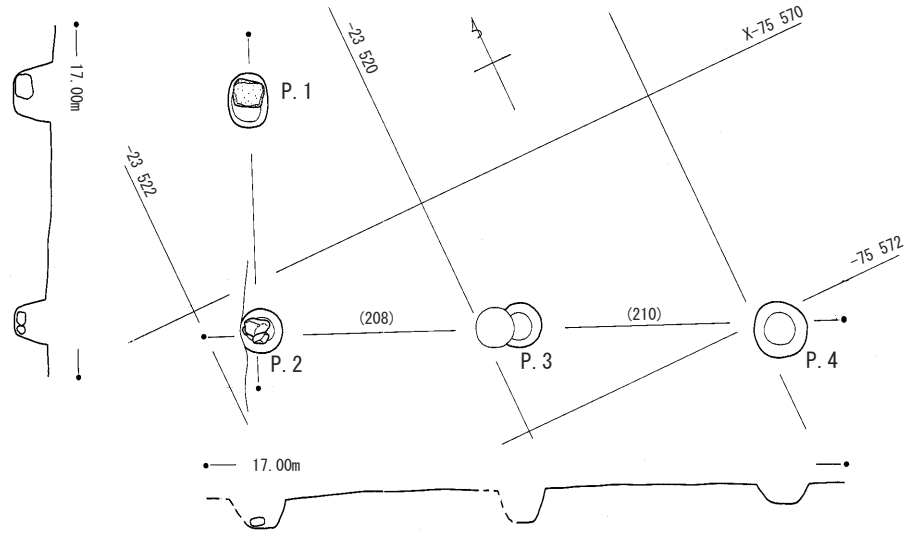
柱穴列３	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	28×27×11
P.2	46×(40)×12
P.3	32×32×13

単位 cm



柱穴列５	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	27×(26)×31
P.2	25×24×31
P.3	35×(35)×24
P.4	35×31×16
P.5	29×25×20

単位 cm



柱穴列４	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	43×31×31
P.2	35×(34)×26
P.3	35×(35)×26
P.4	45×43×16

単位 cm

図6　柱穴列１～５　同出土遺物

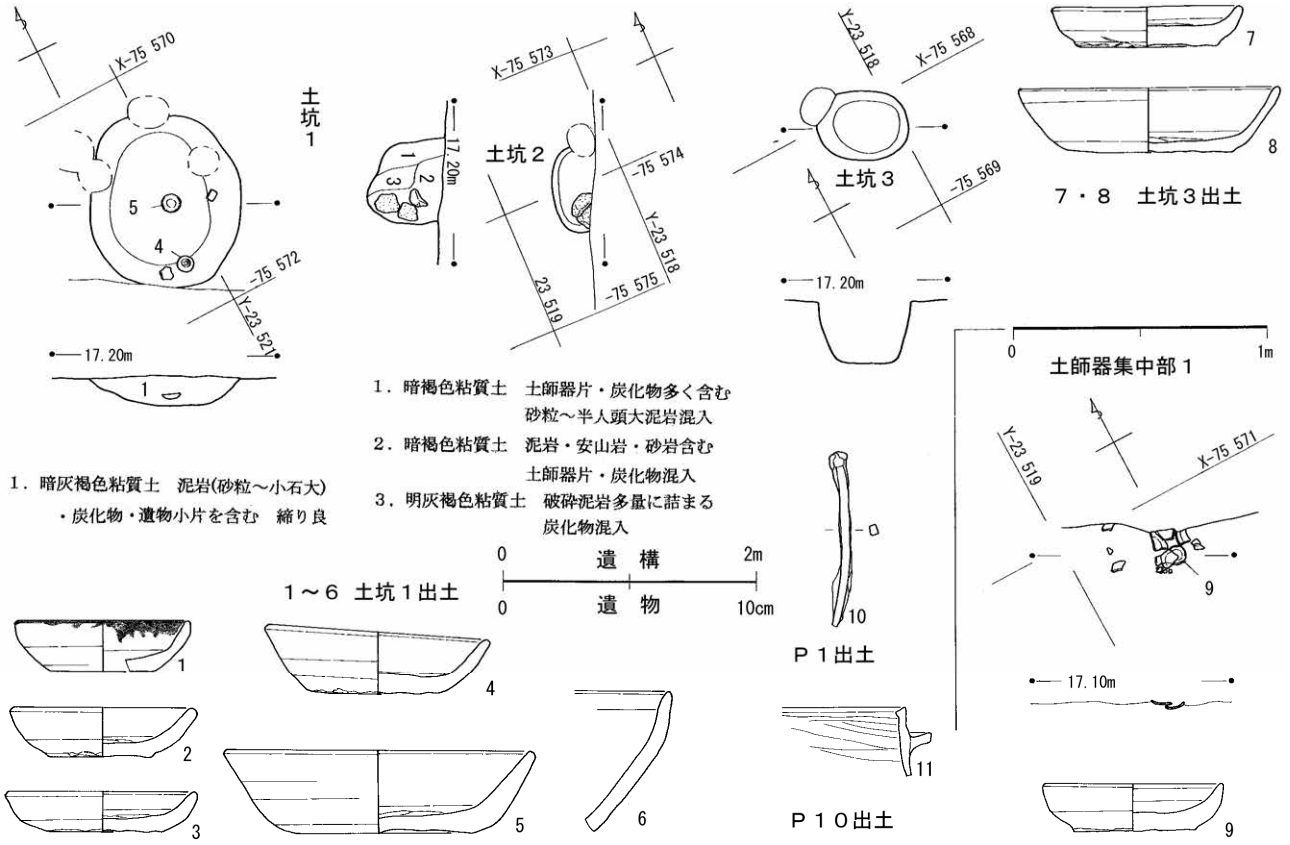


図7　土坑1～3，土師器集中部1，同出土遺物

茶碗（6）　**特記事項**：(1) には油煤付着、灯明皿として使われたか。全体に14世紀後半の様相を持つ。

土坑2（図7）

位　置：X－75 573～－75 575　Y－23 518～－23 519　**規　模**：東西34㎝以上×南北68cm×深さ約59cm（底面高 16.52m）　**平面形**：楕円形　**断面形**：不整碗形　**主軸方位**：(N－9°　－W)　**充填土**：図に記載　**重複関係**：柱穴列3を切る　**出土遺物**：図化しうるものなし　**特記事項**：中に凝灰岩詰まる。柱穴とみるべき。

土坑3（図7）

位　置：X－75 568～－75 569　Y－23 518～－23 519　**規　模**：東西72㎝×南北55cm×深さ約49cm（底面高 16.54m）　**平面形**：楕円形　**断面形**：逆台形　**主軸方位**：(N－62°　－W)　**出土遺物**：土師器皿R種小型（7）・同中型（8）　**特記事項**：これも柱穴か

土師器集中部1（図7）

位　置：X－75 571～－75 572　Y－23 518～－23 519　**出土遺物**：土師器皿R種小型（1）　**特記事項**：検出高16.9m前後，調査区外への広がりの程度は不明

Ⅰ面柱穴出土遺物（図7）

P.1より鉄釘（10）・P.10より鍔鍋（11）

Ⅰ面出土遺物（図8）

土師器皿R種小型（1～4）・同中型（5～7）・同大型（8～14）・南部系山茶碗（15）・常滑甕（16）・瀬戸大平鉢（17）・青白磁梅瓶（18）　特記事項：ほとんどが13世紀後半～14世紀初頭、すなわち鎌倉時代後期～末期の様相を持つが、17のみは15世紀前半か。

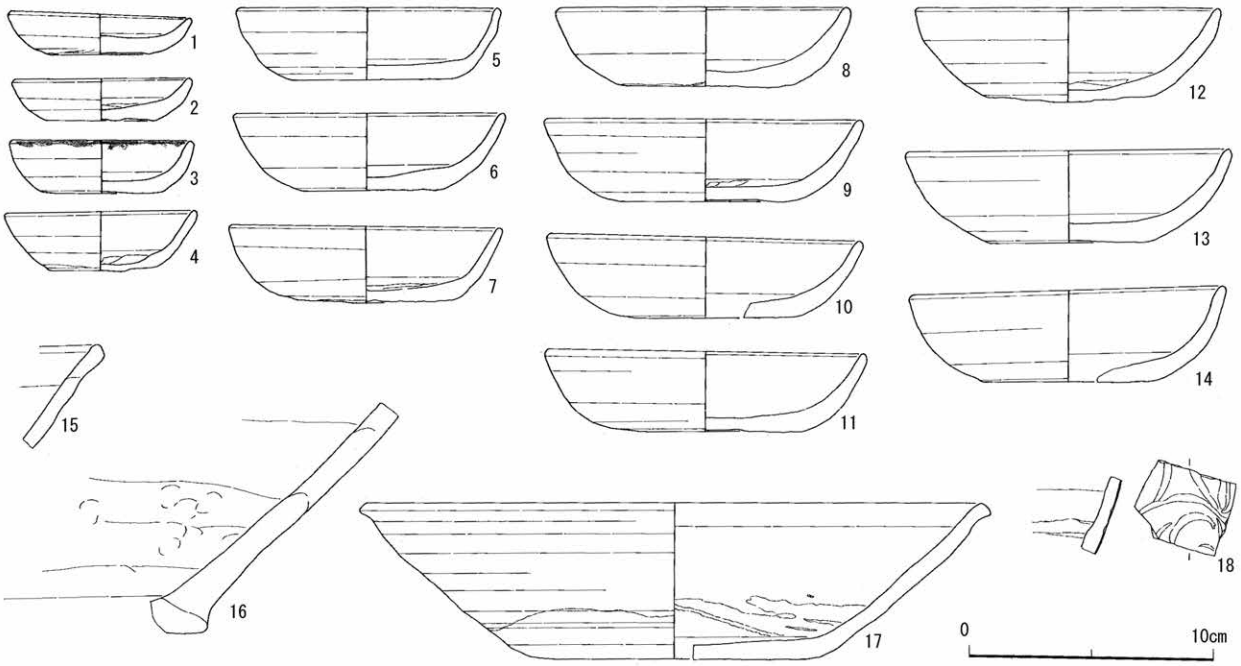


図８　Ⅰ面出土遺物

２．Ⅱ面（図９）

検出高：約 16.9～16.7m　構成土：北側はローム（赤褐色土）に砂岩・泥岩片、炭化物が混入したものが主体　南部分は人頭大の凝灰岩・泥岩による版築層　検出遺構：土坑３基・小穴 51 穴（掘立柱建物１棟・柱穴列５含む）

建物１（図 9）

位　置：X－75 569～－75 573　Y－23 519～－23 523　**規　模**：東西Ⅰ間（柱間距離 1.99m）×南北１間(柱間距離 1.95m)・柱穴底面高 16.69m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－26°－E　**重複関係**：柱穴列 7 に切られる　**出土遺物**：P.4 より刀子（1）　**特記事項**：後述の土坑 4 北側にあり、西側調査区外に広がる可能性が高い。柱間は 2m弱と鎌倉時代後期に特徴的な数値を示す。

柱穴列 6（図 9）

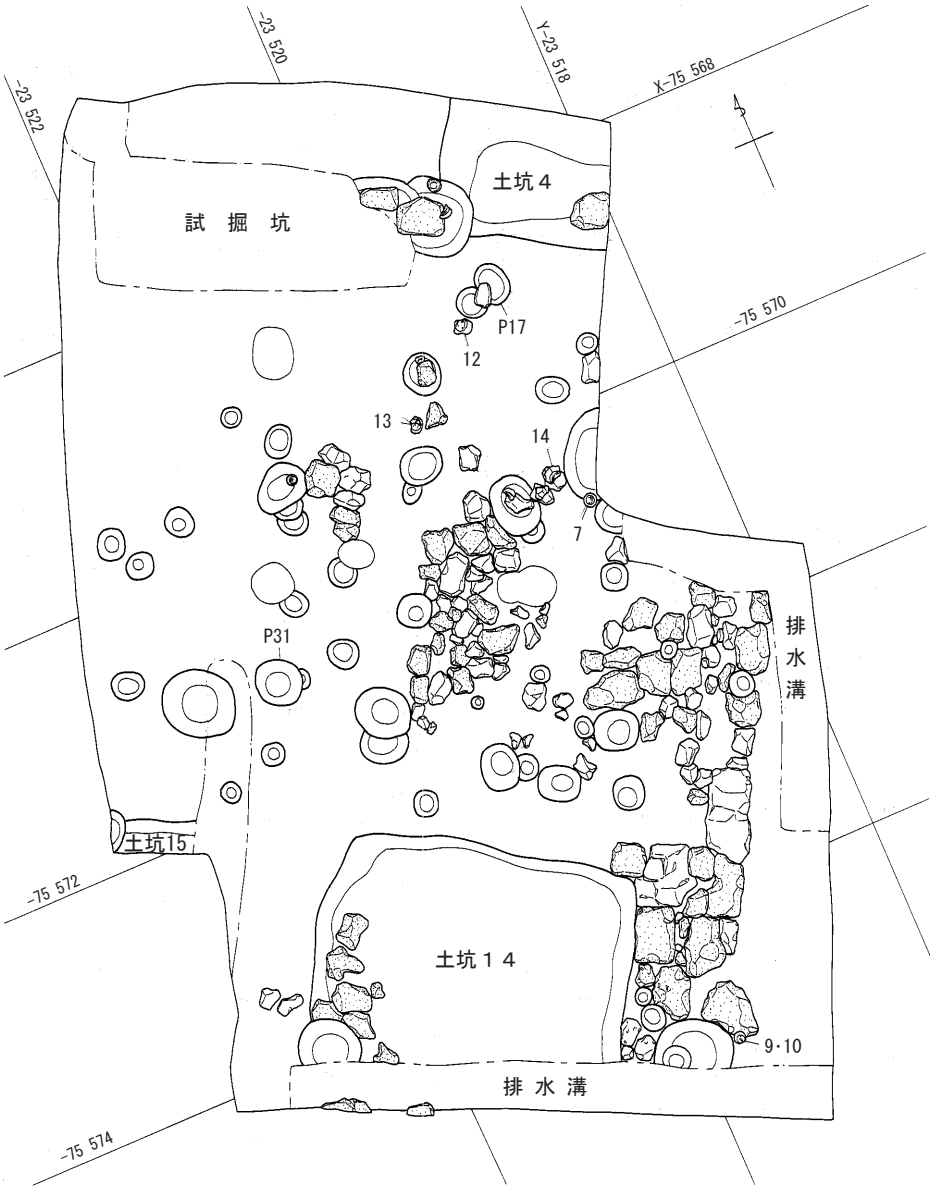
位　置：X－75 568～－75 571　Y－23 519～－23 521　**規　模**：南北３間（柱間距離　1.18m・0.77m の 2 タイプ）柱穴底面高 16.71m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－25°－E　**重複関係**：土坑４を切る　**出土遺物**：P.1 より土師器皿Ｒ種小型（2）・同大型（3）・常滑片口鉢Ⅰ類（4）　**特記事項**：間隔は一定ではないが、同程度の深さのものが直線をなしているのでひとまず抽出しておいた。北側２穴は礎石らしき凝灰岩を伴う。

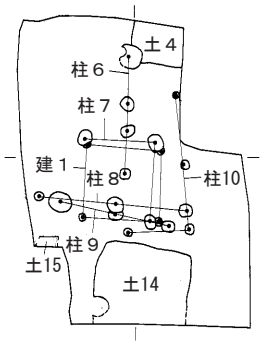
柱穴列 7（図 10）

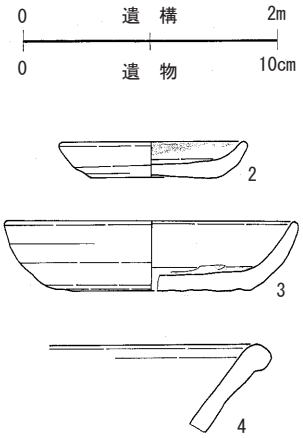
位　置：X－75 569～－75 573　Y－23 519～－23 522　**規　模**：東西１間（柱間距離 1.84m）×南北１間（柱間距離 2.14m）柱穴底面高 16.48m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－26°－E　**重複関係**：建物 1 を切る　**出土遺物**：P.1 より土師器皿Ｒ種小型（1）　**特記事項**：これも西側調査区外に広がる可能性がある。P.2 に半人頭大の泥岩を含む。

柱穴列 8（図 10）

位　置：X－75 570～－75 573　Y－23 518～－23 524　**規　模**：東西２間（柱間距離約 196.5m）柱穴底面高 16.60m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－62°－W　**重複関係**：柱穴列 9 を切る







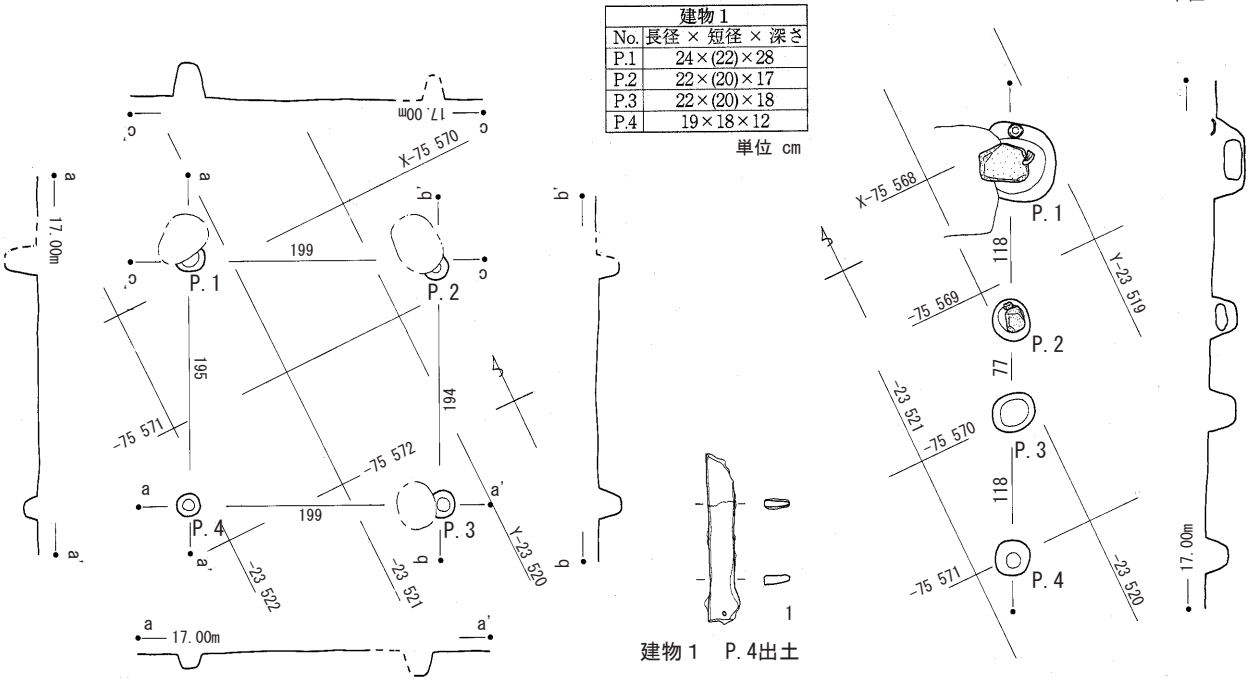
２～３　柱穴列６ P.1出土

柱穴列６	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	53×(−)×24
P.2	33×30×21
P.3	36×30×35
P.4	28×27×19

単位 cm

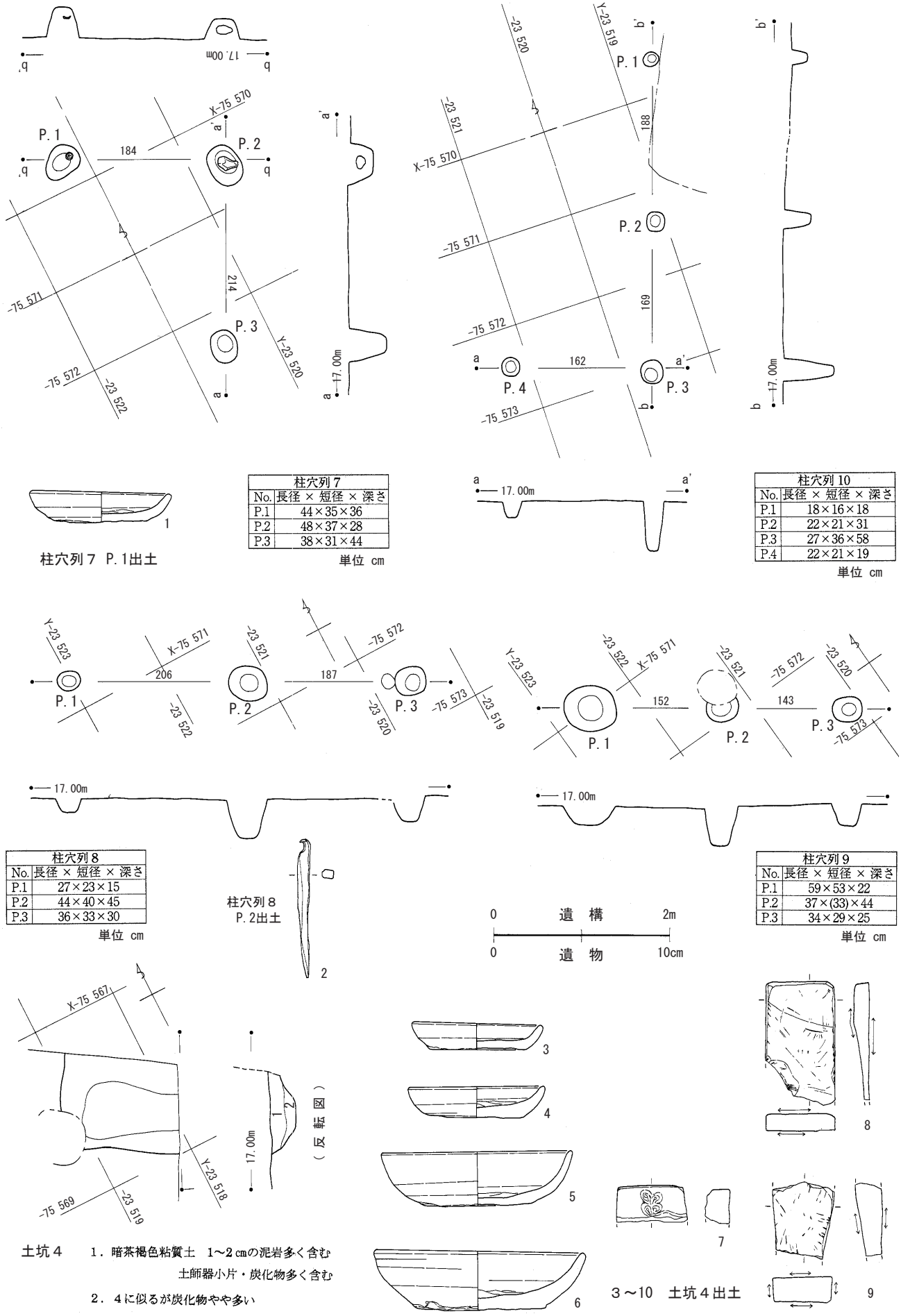
建物１	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	24×(22)×28
P.2	22×(20)×17
P.3	22×(20)×18
P.4	19×18×12

単位 cm



建物１　P.4出土

図9　Ⅱ面遺構全図　建物１・柱穴列６　同出土遺物



柱穴列７			
No.	長径 ×	短径 ×	深さ
P.1	44	35	36
P.2	48	37	28
P.3	38	31	44

単位 cm

柱穴列10			
No.	長径 ×	短径 ×	深さ
P.1	18	16	18
P.2	22	21	31
P.3	27	36	58
P.4	22	21	19

単位 cm

柱穴列８			
No.	長径 ×	短径 ×	深さ
P.1	27	23	15
P.2	44	40	45
P.3	36	33	30

単位 cm

柱穴列９			
No.	長径 ×	短径 ×	深さ
P.1	59	53	22
P.2	37	(33)	44
P.3	34	29	25

単位 cm

図10 柱穴列７～１０・土坑４ 同出土遺物

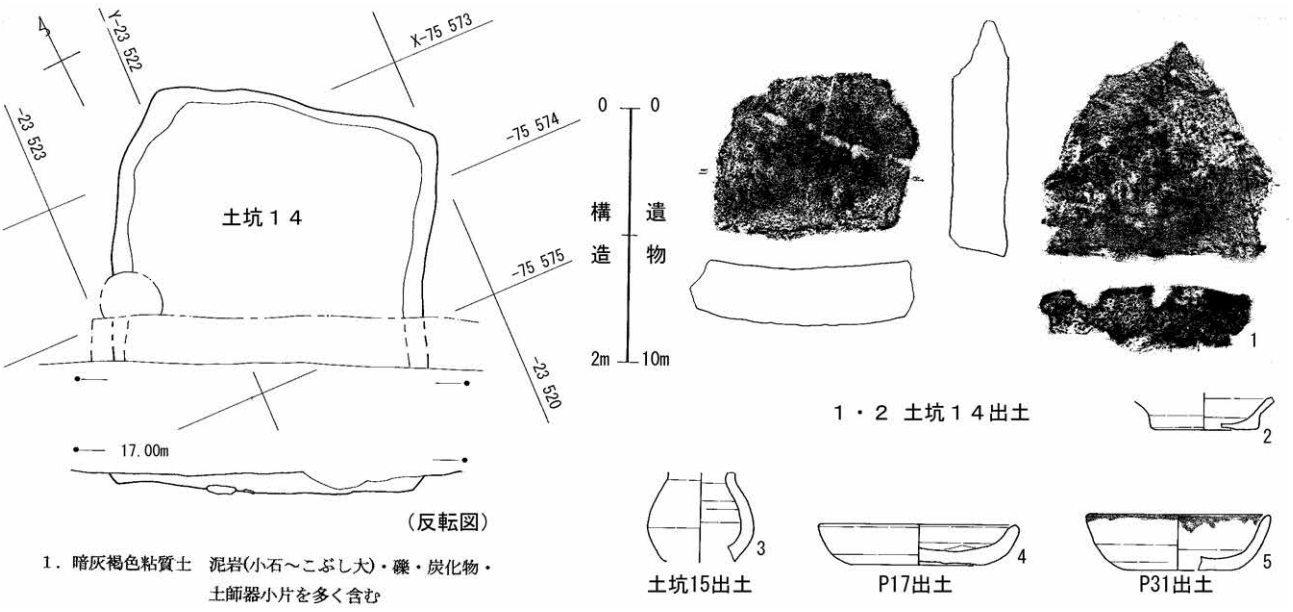


図 11　土坑 14，同出土遺物，土坑 15・Ⅱ面柱穴出土遺物

出土遺物：P.2 より鉄釘（2）　**特記事項**：平均するとちょうど鎌倉後期に一般的な柱間距離の並びとなったので、列として図化しておく。

柱穴列 9（図 10）

位　置：X－75 570～－75 573　Y－23 520～－23 523　**規　模**：東西 2 間（柱間距離約 147.5m）柱穴底面高 16.60m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－54°－W　**重複関係**：柱穴列 8 に切られる　**出土遺物**：図化しうるものなし　**特記事項**：3 穴が直線的に並んでいるので、ひとまず列として呈示しておく。

柱穴列 10（図 10）

位　置：X－75 569～－75 574　Y－23 518～－23 522　**規　模**：東西 1 間（柱間距離 1.62m）×南北 2 間（柱間距離約 1.79m）柱穴底面高 16.55m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－19°－E　**重複関係**：なし　**出土遺物**：図化しうるものなし　**特記事項**：細めの同規模の穴が組をなしているように見える。西側調査区外に広がるのであろう。Ⅱ面では本址のみ、主軸方位がⅠ面建物群に共通する。

土坑 4（図 10）

位　置：X－75 567～－75 569　Y－23 517～－23 520　**規　模**：東西 140cm 以上×南北 110cm 以上×深さ約 32cm（底面高 16.49m）　**平面形**：隅丸長方形か　**断面形**：逆台形　**主軸方位**：（N－61°－W）　**充填土**：図に記載　**重複関係**：柱穴列 6 に切られる　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（3・4）・同中型（5）　同大型（6）・滑石印判（7）・砥石仕上砥（8）・同中砥（9）　**特記事項**：土坑 14 出土の青白磁合子（図 11－2）に接合する破片が出土

土坑 14（図 11）

位　置：X－75 572～－75 575　Y－23 520～－23 523　**規　模**：東西 250 ㎝×南北 220cm 以上×深さ約 17cm（底面高 16.70m）　**平面形**：（隅丸方形）**断面形**：浅皿形　**主軸方位**：（N－32°－E）　**充填土**：図に記載　**重複関係**　**出土遺物**：平瓦（1）・青白磁合子（2）　**特記事項**：浅い方形土坑。性格不明だが、多くの柱穴列が本址以北にあるので、共時性は否定できない。（2）の青白磁合子は土坑 4 出土の破片と接合した。

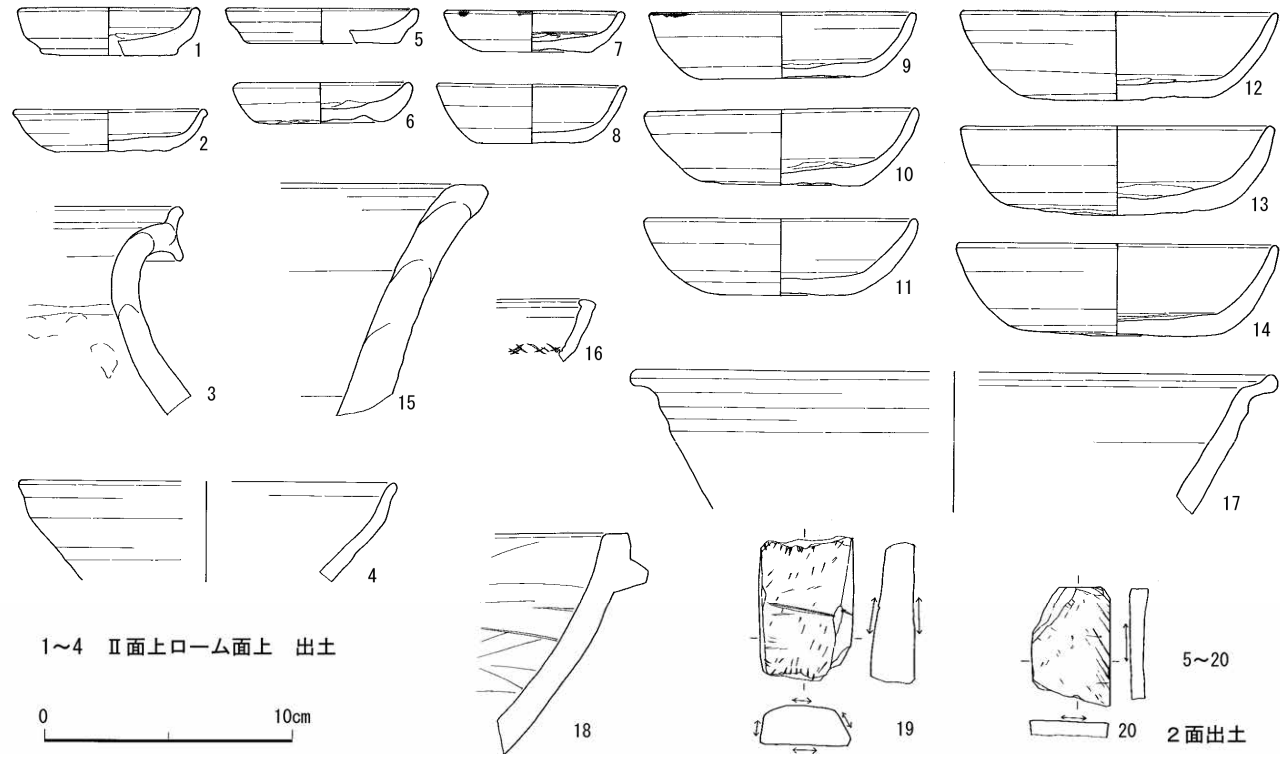


図 12　Ⅱ面出土遺物

土坑 15(個別図省略，図 9)

位　置：X－75 571～－75 573　Y－23 523～－23 524　**規　模**：東西 80 以上㎝×南北 25cm 以上×深さ約 12cm 以上（底面高 16.74m 以下）　**平面形・断面形**：大半が調査区外にあり、東辺は撹乱に切られ不明　**主軸方位**：不明　**重複関係**：なし　**出土遺物**：瀬戸黄褐釉小壺（3）　**特記事項**：全形は不明ながら、北辺は東側の土坑 14 と横並びにあり、位置的からいっても共時性が認められる。

Ⅱ面柱穴出土遺物（図 11）

P.17 より土師器皿Ｒ種小型（4）　P.31 より土師器皿Ｒ種小型（5）　**特記事項**：（5）の口縁部には油煤が付着しており、灯明皿として使われたことがわかる。

Ⅱ面出土遺物（図 12）

Ⅱ面ローム面上出土：土師器皿Ｒ種小型（1・2）・常滑甕（3）・瀬戸平碗（4）　**Ⅱ面出土**：土師器皿Ｒ種小型（5～8）・同中型（9・10）・同大型（11～14）・瀬戸卸皿（15）・瀬戸折縁鉢（16）・滑石鍋（17）・砥石中砥（18）・砥石仕上砥（19）　**特記事項**：おおむね 13 世紀後半～14 世紀初頭、すなわち鎌倉時代後期の年代を示すが、(4) のみ 14 世紀後半～15 世紀前半に属する

3．Ⅲ面（図 13）

検出高：約 16.8m～16.7m　構成土：明茶褐色粘質土に小石～半人頭大泥岩多量に含む　検出遺構：溝 1 条　土坑 3 基・小穴 9 穴（柱穴列 1 含む）・土師器集中部 1 箇所・土師器細片集中部 2 箇所

溝 1（図 14）

位　置：X－75 571～－75576　Y－23 517～－23 520　**規　模**：幅 80 ㎝以上×深さ約 28cm　**断面形**：箱形　**主軸方位**：(N－29°－E)　**充填土**：東壁・南壁土層図（図 3）参照　**流下方向**：北→南　**重複関係**：なし　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（1～3）・同中型（4）・同大型（5～9）・常滑甕（10）　**特記事項**：後

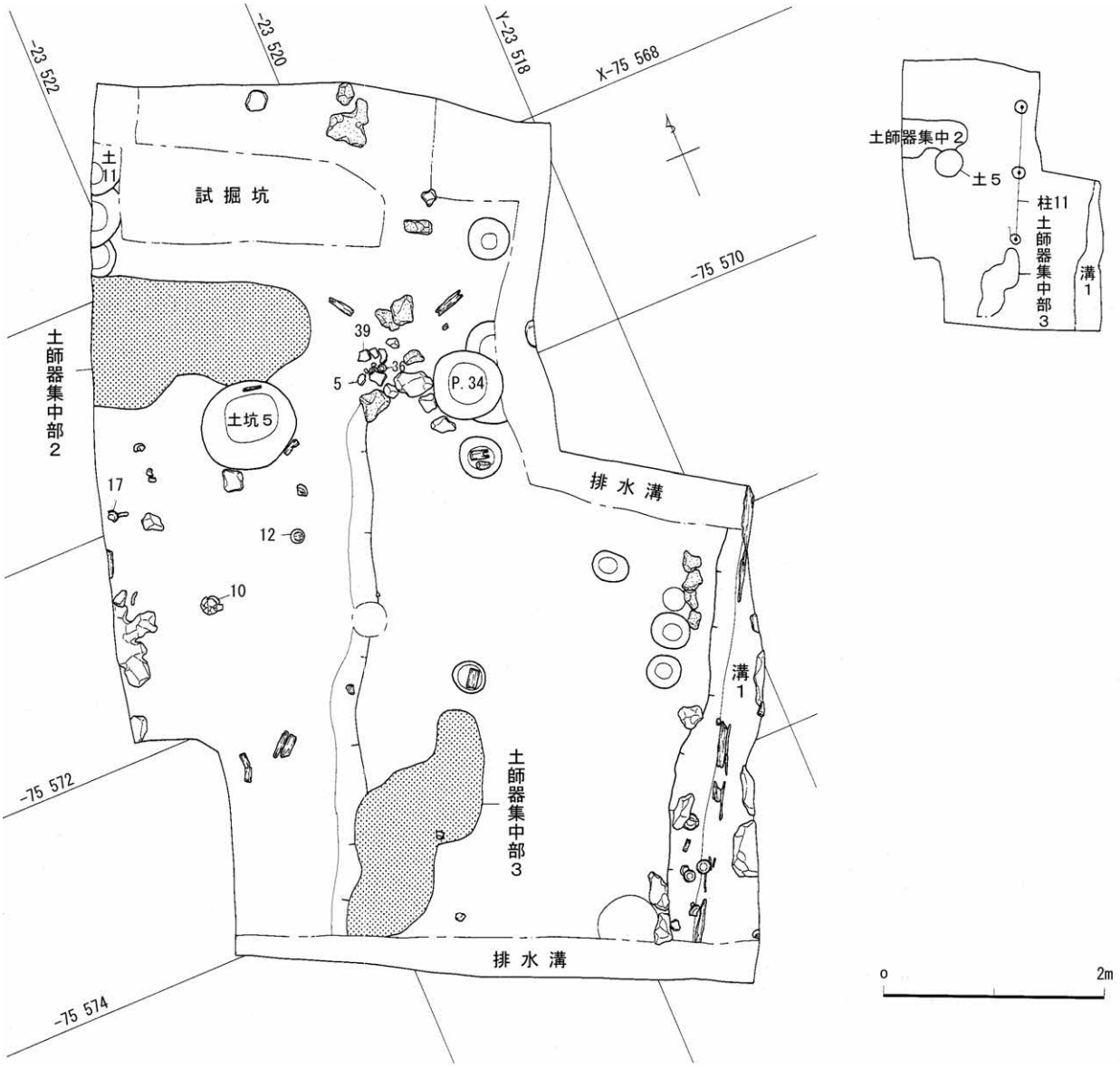


図 13　Ⅲ面遺構全図

述のⅤ面時に早くも現われる区画で、Ⅱ面の石敷の東端とも場所が一致する。鎌倉時代後半を通じて存続していたとみてよい。出土遺物の年代は、土器でいえば 13 世紀第 3 四半期を中心とし、常滑は 14 世紀初頭前後のもの（図 14－10，赤羽／中野編年「第 6b 形式」）を含む。

柱穴列 11（図 14）

位　置：X－75569～－75 573　Y－23 518～－23 521　**規　模**：南北 2 間（柱間距離約 200m）柱穴底面高 16.37m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－26°－E　**重複関係**：なし　**出土遺物**：P.3 より内折れ土師器皿Ｒ種極小型(11)　**特記事項**：同規模の柱穴様の穴が直線状に並ぶので抽出しておいた。P.2・P.3 に礎板残る。

土坑 5（図 14）

位　置：X－75569～－75 570　Y－23 521～－23 522　**規　模**：東西 87 ㎝×南北 80cm×深さ 41cm（底面高 16.19m）　**平面形**：円形　**断面形**：逆台形　**重複関係**：土師器皿集中部 2 を切る　**出土遺物**：常滑片口鉢Ⅰ類（12）　**特記事項**：調査区中央部を南北に走る浅い落ちの西側にあり、土師器集中部 2 にも近い

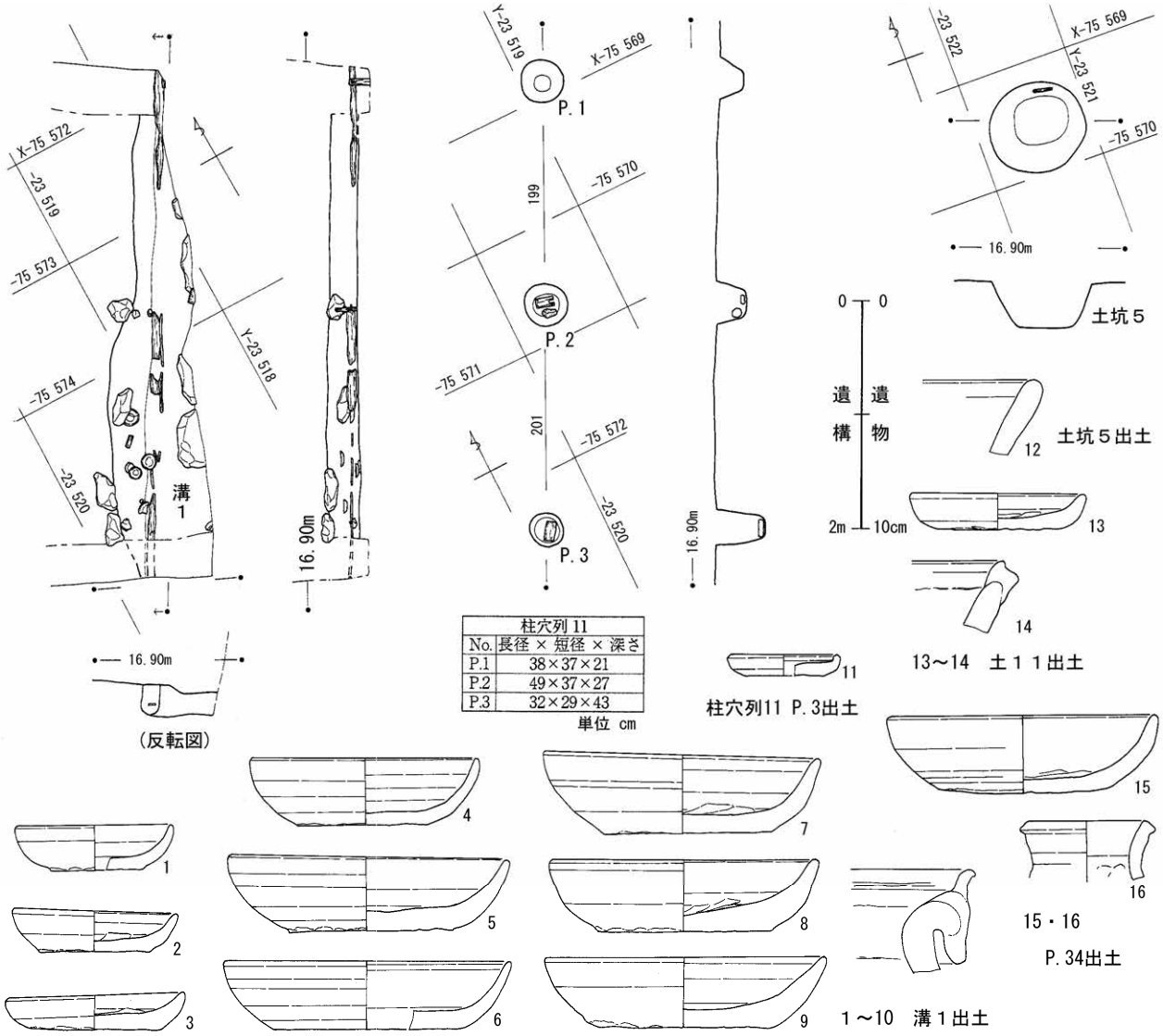


図 14　溝 1・柱穴列 11・土坑 5，同出土遺物・土坑 11・P.34 出土遺物

土坑 11（図 13・14）

出土遺物：土師器皿Ｒ種小型(13)・常滑片口鉢Ⅱ類(14)　　**特記事項**：年代は 13 世紀後半か

P.34

出土遺物（図 11・12）：土師器皿Ｒ種大型(15)・常滑小壺(16)　　**特記事項**：年代は 13 世紀後半

土師器集中部 2（図 13・15）

位　置：Ｘ－75 567～－75 570　Ｙ－23 520～－23523　**検出高**：16.6m前後　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（1～19）　同中型（20～23）　同大型（24～35）　**特記事項**：大きくみて 13 世紀後半か

土師器集中部 3（図 13）

位　置：Ｘ－75 572～－75 575　Ｙ－23 523～－23520　**検出高**：16.6m～16.7m　**出土遺物**：土師器皿の小片のみで図示しうるものなし　**特記事項**：集中部 2 とは異なり、細片ばかりで構成される

Ⅲ面出土遺物（図 16）

Ⅲ面出土：土師器皿Ｒ種小型（1～9）・同大型（10～18）・内折土師器皿Ｒ種極小型（19・20）・円

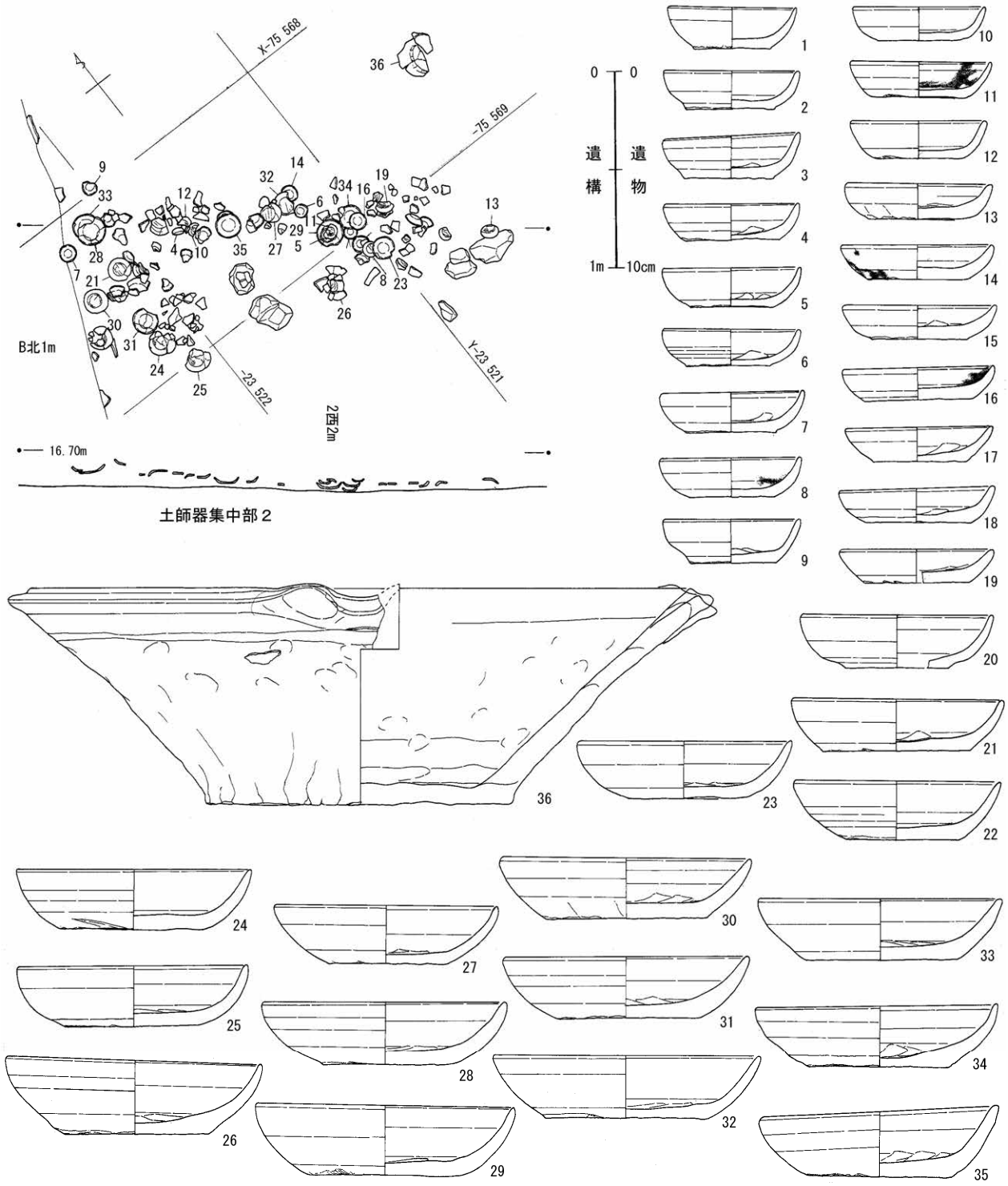


図 15　土師器集中部（2）

板状土製品（21）・手焙り（22）・瓦器香炉（23）・常滑片口鉢Ⅰ類（24～27）・常滑甕（28～34）　瀬戸入子（35・36）・瀬戸折縁鉢（37）・白磁口はげ皿（38）・平瓦（39）・元祐通宝（40）・砥石仕上砥（41）・**Ⅲ面構成土出土**：鍔鍋（42）・常滑甕（43）・元宝通宝（44・45）・皇宋通宝（46）・熙寧元宝（47）・紹定通宝（48）　**特記事項**：（34）の常滑片には漆を含んだ布状の物質が付着している。年代は総体的にみて 13 世紀第 4 四半期ごろか。

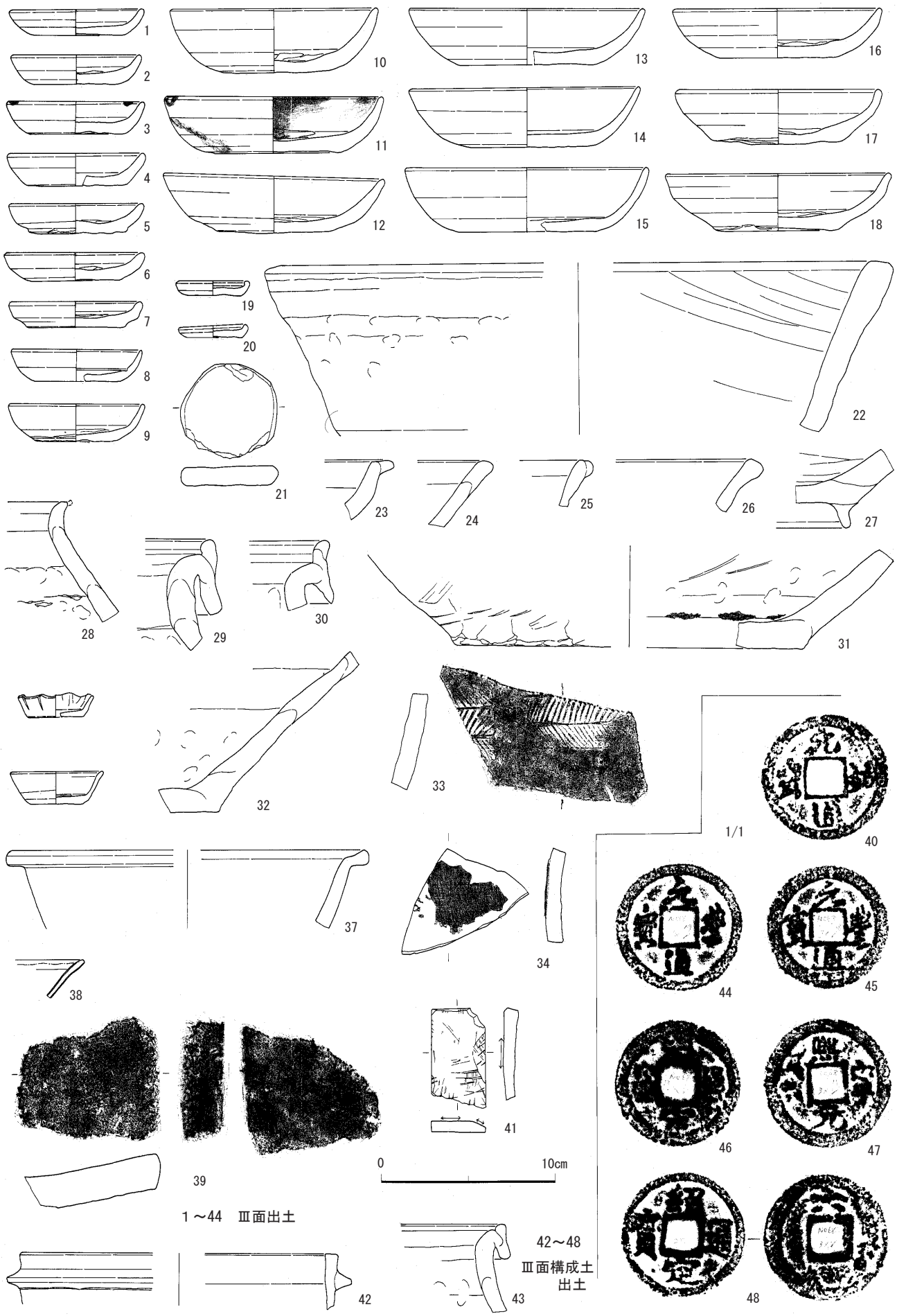


図16　Ⅲ面・Ⅲ面構成土出土遺物

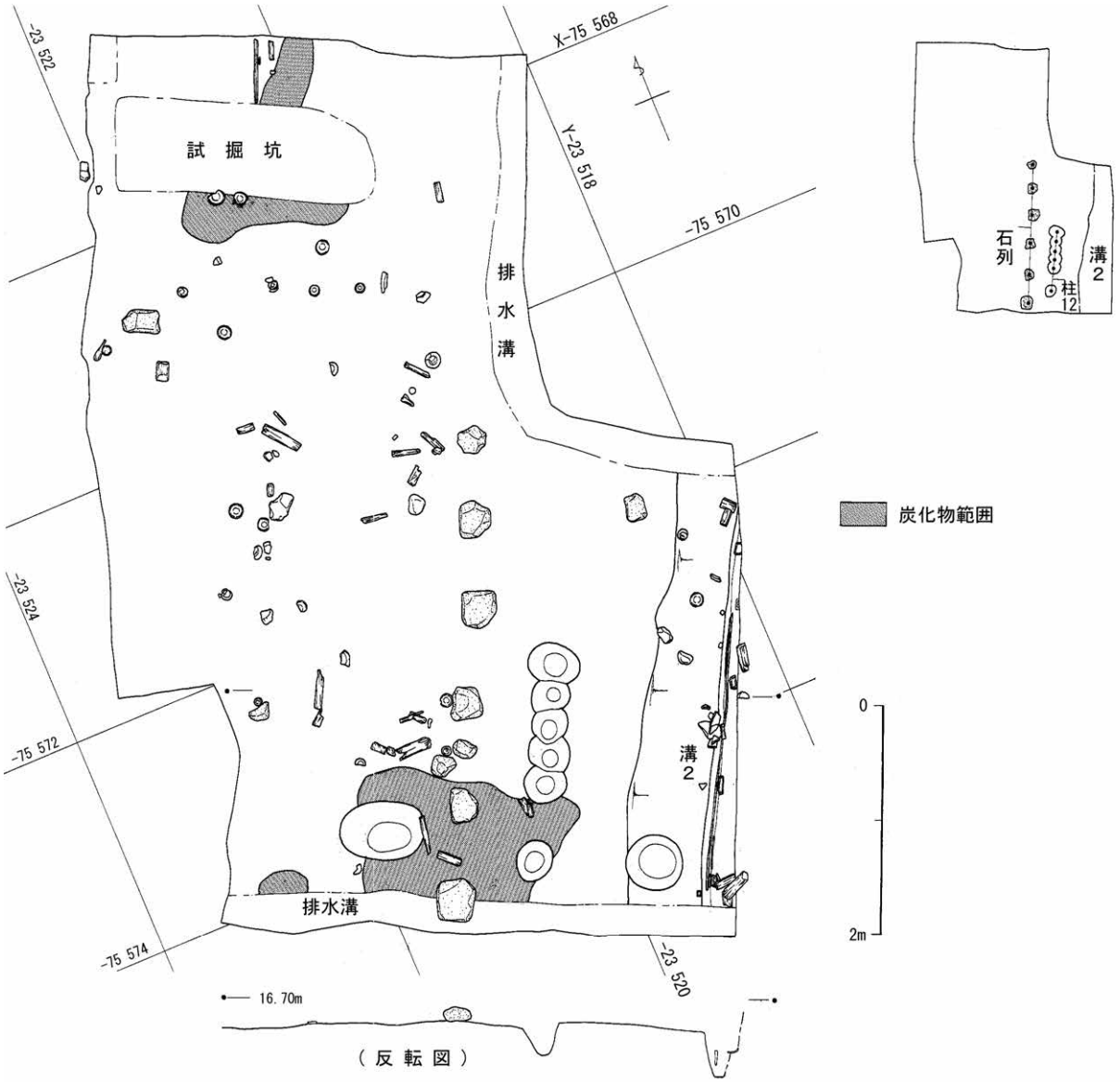


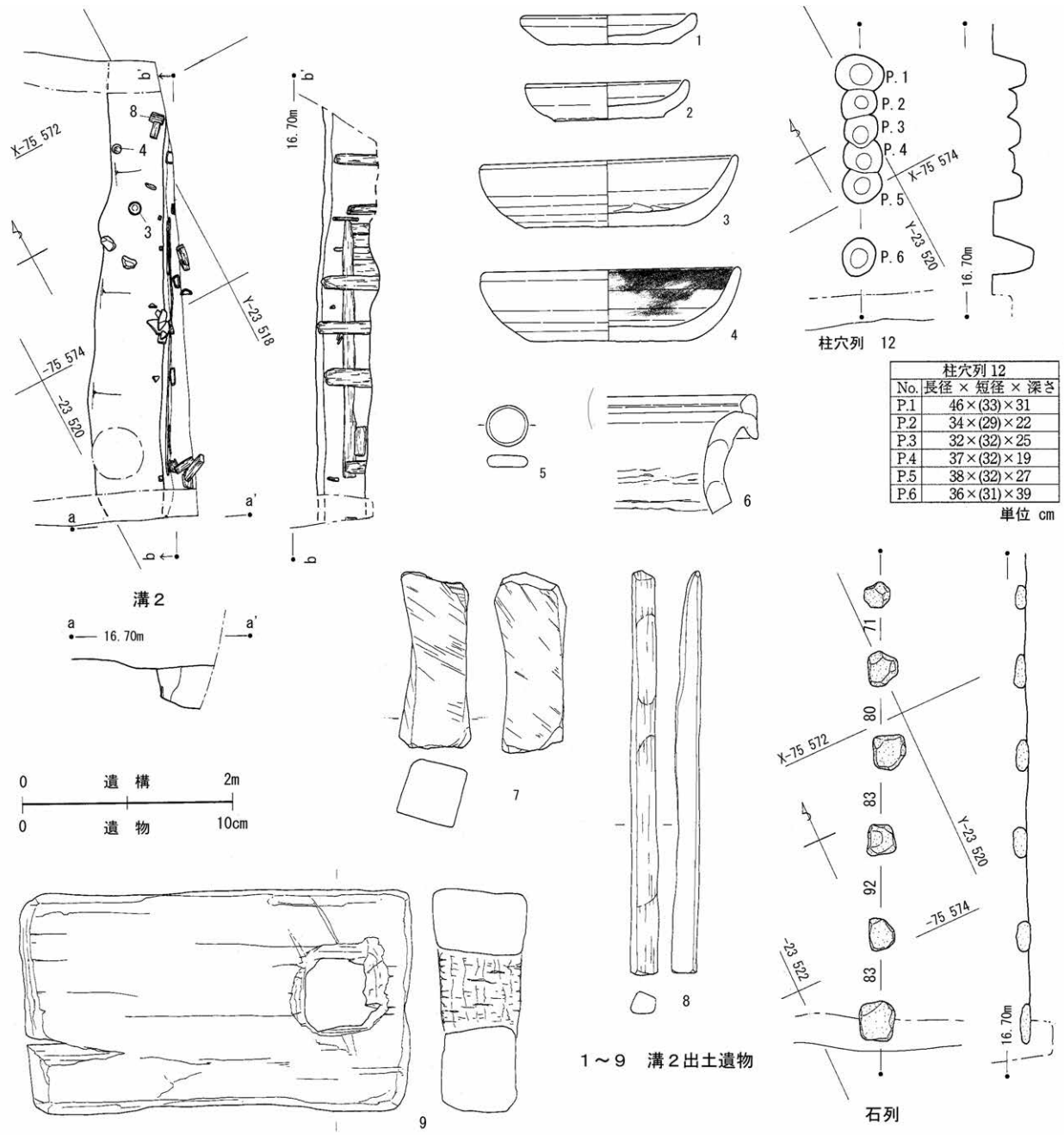
図 17　Ⅳ面上層面遺構全図

4. Ⅳ面上層面（図 17）

検出高：約 16.3m～16.5m　構成土：小石大～拳大の泥岩を含む粘質土。色調は暗褐色から明黄褐色・明灰色、さらには青灰色と場所により異なる　　検出遺構：溝１条・小穴３穴・石列１列

溝 2（図 18）

位　置：X－75 571～－75576　Y－23 517～－23 520　**規　模**：深さ 75 ㎝以上　**断面形**：箱型か？東岸の一部のみの検出で多くは調査区外にあるため不明確　**主軸方位**：（N－28°　－E）　**充填土**：東壁・南壁土層図（図 3）参照　**流下方向**：北→南　**重複関係**：なし　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（1・2）・同大型（3・4）・骨角製双六駒（5）・常滑甕（6）・砥石中砥（7）・串状木製品（8）・不明部材（9）　**特記事項**：既述のⅢ面溝 1 と重なる位置にあり、断絶なく続く。掘り方から 70 ㎝前後離れた位置に木製の溝枠が設けられる。溝枠の構造は、一番外側に縦板を横に連ねて立て、その内側に横板を張ってさらにそれを縦の杭で止めて内側への倒壊を防ぐ、というもの。（9）は礎板様の板の片側に径 3～3.5 ㎝の穴があけ



柱穴列 12	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	46×(33)×31
P.2	34×(29)×22
P.3	32×(32)×25
P.4	37×(32)×19
P.5	38×(32)×27
P.6	36×(31)×39

図 18　溝 2・柱穴列 12・石列，同出土遺物

あけられている。出土遺物の年代は 13 世紀第 3 四半期か。

柱穴列 12（図 18）

位　置：X－75 572～－75 575　Y－23 519～－23 521　**規　模**：柱穴底面高 16.17m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－28°－E　**重複関係**：なし　**出土遺物**：図示しうるものなし　**特記事項**：本址西側に平行して存在する次述の石列との関連を考えざるを得ないが、柱穴列ではなく、石を引き抜いた跡とすれば、踏み石のようなものを想定してもよいかもしれない。

石列（図 18）

位　置：X－75 570～－75 575　Y－23 519～－23 522　**規　模**：南北 5 間，全長 4m38 ㎝（石間距離

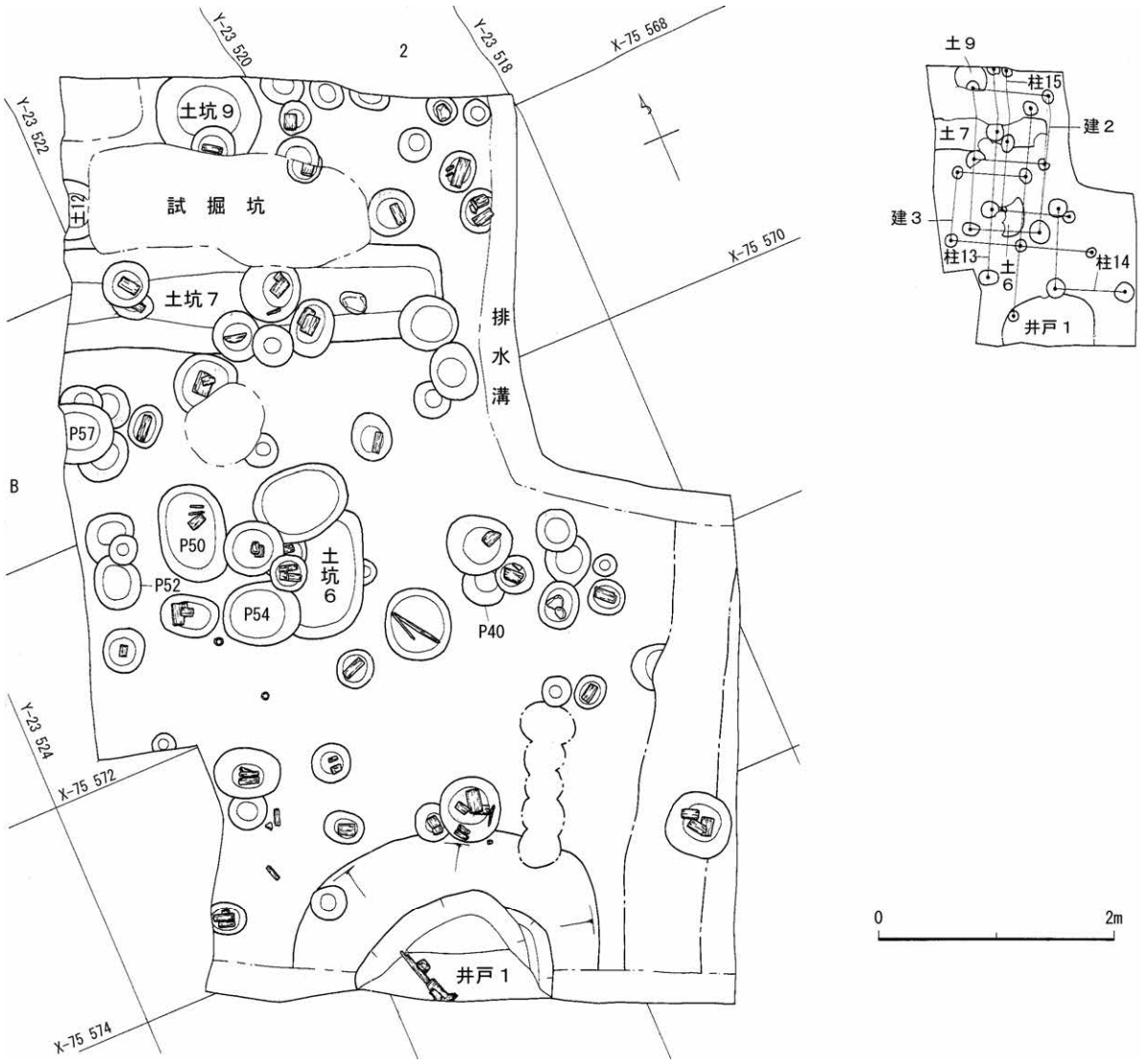


図 19　Ⅳ面下層面遺構全図

約 82 ㎝）石上面高 16.63m（平均）　**南北軸方位**：N－24･5°　－E　**重複関係**：なし　**出土遺物**：図示しうるものなし　**特記事項**：ほぼ半間ごとに同規模の凝灰岩が並ぶ。建物の根太の下に敷かれたものか、あるいは縁束の可能性もあろう。位置的に見て前述の柱穴列 12 との関連は明らかであり、本址を縁束とすれば、柱穴列 12 は縁の前に据えられた踏み石の痕跡とみることもできよう。

5. Ⅳ面下層面（図 19）

検出高：約 16.4m～16.5m　構成土：暗茶褐色粘質土・泥岩地形　検出遺構：小穴 69 穴（建物 2 棟・柱穴列 3 含む）土坑 3 基　井戸 1 基

建物 2（図 20）

位　置：X－75 567～－75 572　Y－23 518～－23 523　**規　模**：東西 1 間（柱間距離 2.00m）×南北 2 間(柱間距離 2.02m)・柱穴底面高 16.23m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－27°　－E　**重複関係**：土坑 9 を切る　**出土遺物**：P.2 より土師器皿Ｒ種小型（1）　**特記事項**：南東隅の P.4 は他よりも際立って浅く、直径も大きい感があるが、6 穴の柱穴が等間隔で 2 列に並んでいるので、掘立柱建物と

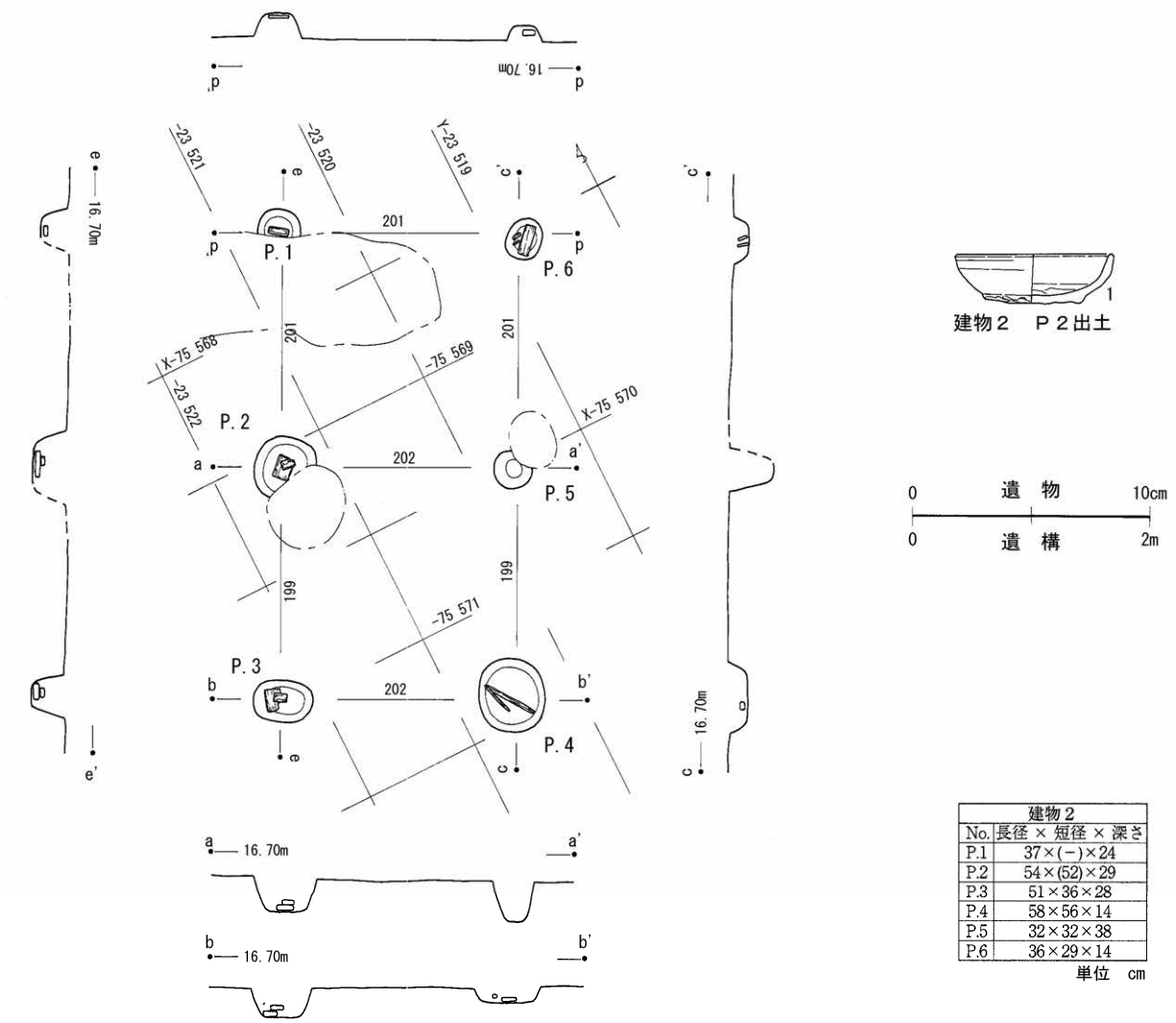


図 20　建物 2，同出土遺物

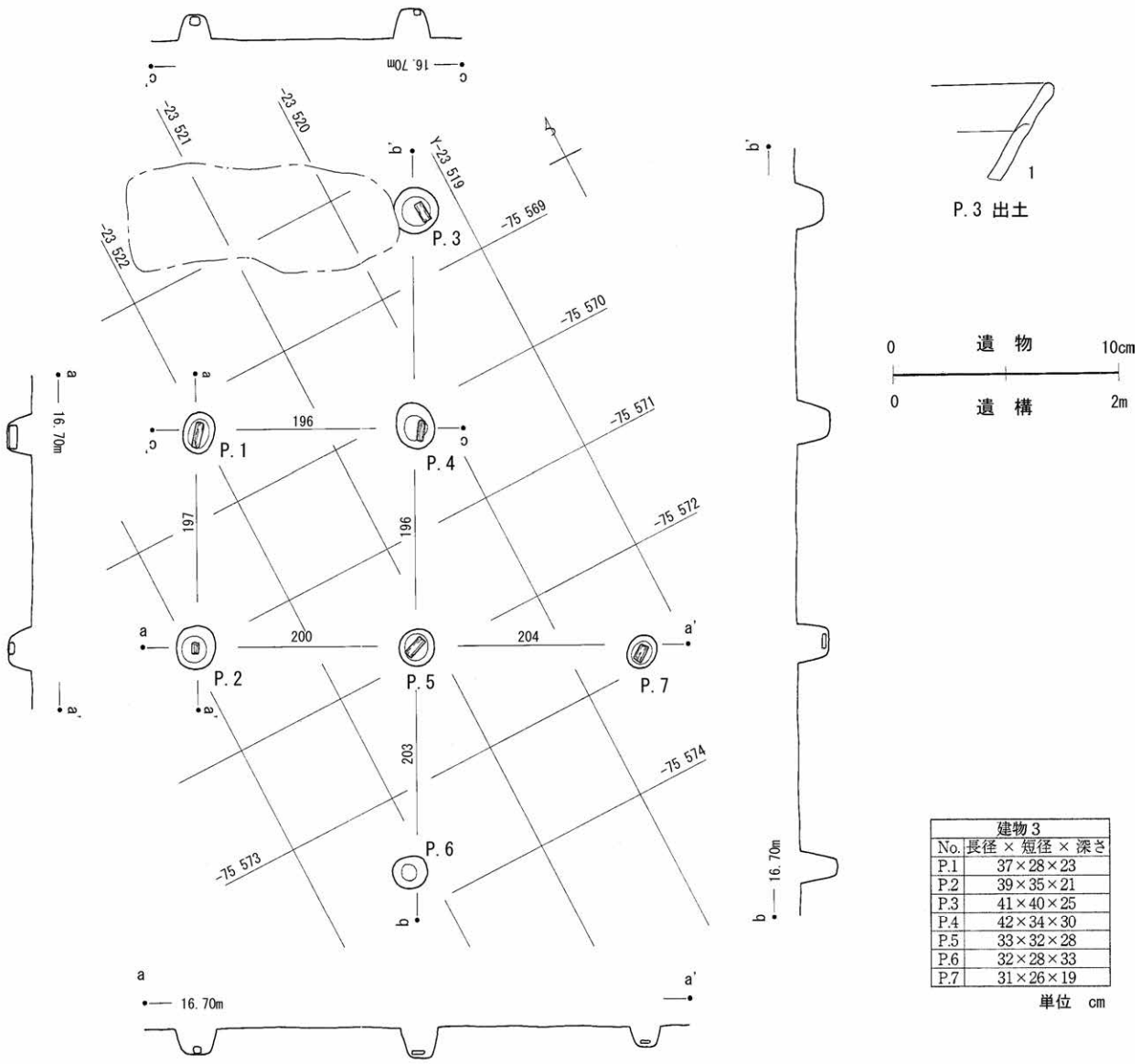
して呈示する。建物だとすれば北と西の調査区外に広がる可能性が高い。P.2 出土の土師器皿は 13 世紀第 4 四半期～14 世紀初頭ごろか。

建物 3（図 21）

位　置：X－75 568～－75 574　Y－23 519～－23 523　**規　模**：東西 2 間（柱間距離 2.00m）×南北 3 間（柱間距離 1.98m）・柱穴底面高 16.21m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－27°　－E　**重複関係**：井戸 1 を切る　**出土遺物**：P.3 より常滑片口鉢 I 類（1）　**特記事項**：北方の調査区外に広がる建物で、調査区内では上層遺構に削り取られたりなどして多くは残らないが、柱間は 2m 弱という鎌倉時代中期以降通有の数値を持つ。

柱穴列 13（図 22）

位　置：X－75 567～－75 573　Y－23 519～－23 523　**規　模**：南北 3 間（柱間距離約 1.94m）柱穴底面高 15.94m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－27°　－E　**重複関係**：土坑 6･7 を切る　**出土遺物**：P.1 より串状木製品（1）・ P.2 より瀬戸入れ子（2）・砥石中砥（3）・P.4 より土師器皿 R 種小型（4）　**特記事項**：柱間が少し違うので次述の柱穴列 14 とは分けて呈示するが、あるいは連結す



建物3	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	37×28×23
P.2	39×35×21
P.3	41×40×25
P.4	42×34×30
P.5	33×32×28
P.6	32×28×33
P.7	31×26×19

図 21　建物 3，同出土遺物

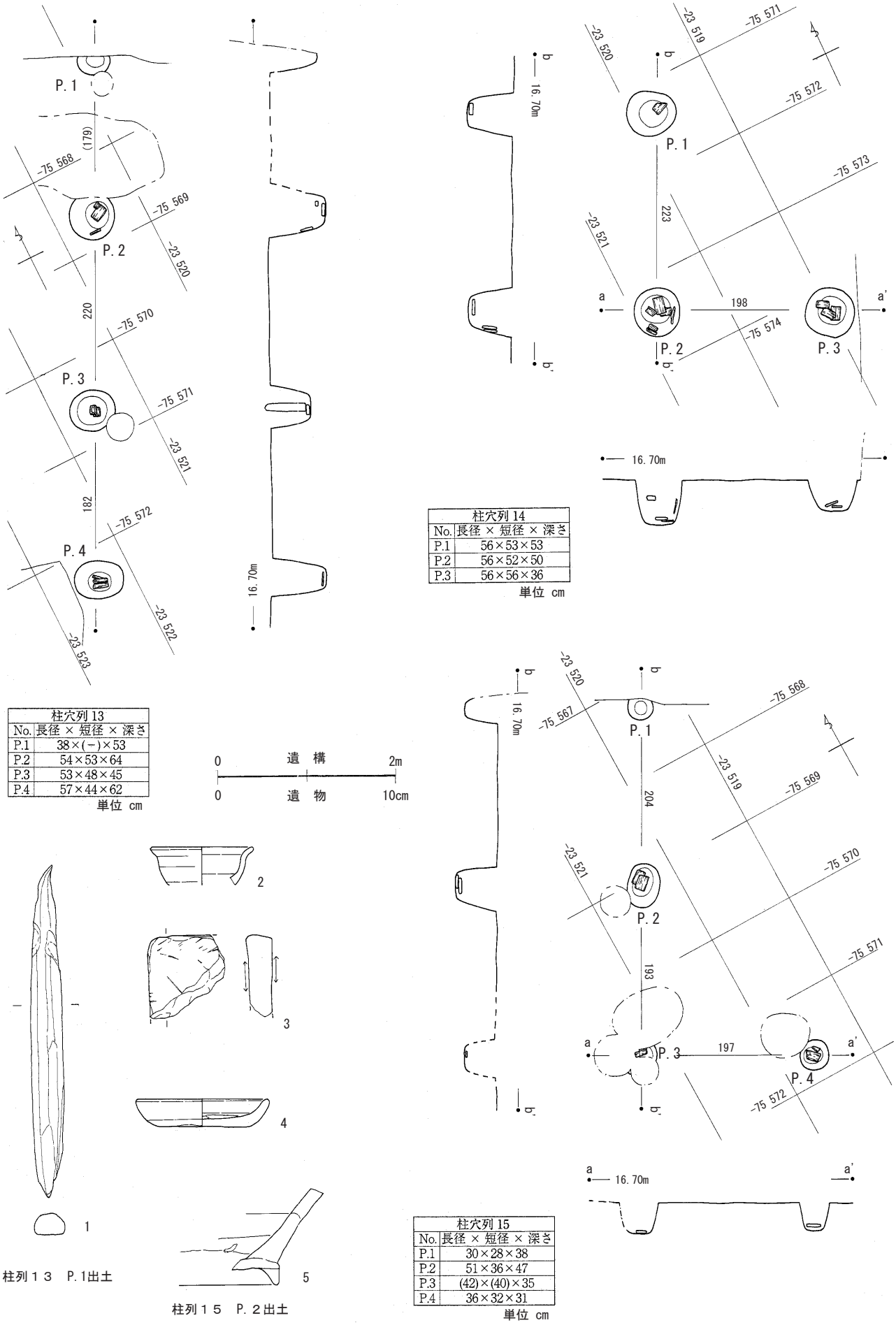
る可能性もある。北・東・西の調査区外に広がる可能性が高い。柱間はほぼ鎌倉時代後期に一般的な数値を示している。

柱穴列 14(図 22)

位　置：X－75 571～－75 575　Y－23 518～－23 521　**規　模**：東西 1 間（柱間距離 1.98m）×南北 1 間（柱間距離約 2.23m）柱穴底面高 15.97m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－27°－E　**重複関係**：柱穴列 15・井戸 1 を切る　**出土遺物**：図化しうるものなし　**特記事項**：同規模の深めの穴が直線をなしているのでひとまず列としたが、前述のように、柱穴列 13 とつながる可能性もある。おそらく掘立柱建物の一部であり、東側調査区外に延びる可能性が高い。年代の指標となる遺物を欠くものの、柱間の平均は 1.98m と、鎌倉時代後期の典型的な数値を持つ。

柱穴列 15(図 22)

位　置：X－75 567～－75 572　Y－23 519～－23 522　**規　模**：東西 1 間（柱間距離 1.97m）×南北 2



柱穴列 13	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	38×(−)×53
P.2	54×53×64
P.3	53×48×45
P.4	57×44×62

単位 cm

柱穴列 14	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	56×53×53
P.2	56×52×50
P.3	56×56×36

単位 cm

柱穴列 15	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	30×28×38
P.2	51×36×47
P.3	(42)×(40)×35
P.4	36×32×31

単位 cm

柱列１３　P.1出土

柱列１５　P.２出土

図22　柱穴列１３～１５　同出土遺物

間（柱間距離約 1.99m）柱穴底面高 16.06m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－28.5°－E　**重複関係**：土坑 6･7 を切る　柱穴列 13･14 に切られる　**出土遺物**：P.2 より常滑片口鉢Ⅱ類（5）　**特記事項**：調査区内の 4 穴で構成されるが、北方調査区外に広がる可能性が高く、掘立柱建物の一部とみられる。（5）の常滑片口鉢Ⅱ類は同一個体と思われる破片がⅣ面面上と土坑 7 から出土している。

井戸 1（図 23・24）

位　置：X－75 573～－75 576　Y－23 523～－23 520　**規　模**：**平面形**：掘方は円形に近い隅丸方形か、木枠は方形か　**断面形**：筒形　**主軸方位**：不明　**充填土**：図に記載　**重複関係**：建物 3・柱穴列 14 に切られる　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（1～4）・土師器皿 R 種大型（5～10）・瓦器火鉢（11）・常滑甕（12・13）・　常滑片口鉢Ⅱ類（14）・青磁蓮弁文鉢（15）・曲物（16）・折敷（17～19）・箸状木製品（20～22）・木製馬形（23）・草履芯（24）・漆器碗（25・26）・加工角（27）・嘉祐通宝（28）　**特記事項**：位置的にみて、建物 2・柱穴列 13・同 14 などがこの井戸と組み合わせになる可能性がある。安全面への配慮から、掘削は底面まで及んでいないが、井戸枠の一部とおぼしい板と角材が見られるので、鎌倉時代中期以後一般的な、隅柱と縦板で組まれた方形枠を持つ井戸であろう。（4）の土師器皿には底裏に円盤状の高台部が貼り付けられている。漆器椀の文様は（25）・（26）いずれも手描きによる。

土坑 6（図 26）

位　置：X－75 570～－75 572　Y－23 520～－23 522　**規　模**：東西 55 ㎝以上×南北 110cm 以上×深さ約 25cm（底面高 15.51m）　**平面形**：（長円形）　**断面形**：皿形　**主軸方位**：（N－21°－E）　**重複関係**：柱穴列 13・15 に切られる　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（22）・磨耗陶片（23）・漆器皿（24）　**特記事項**：建物・柱穴列のどれかと関係する可能性があるが、詳細不明。出土遺物の年代は 13 世紀後半。

土坑 7（図 25・26）

位　置：X－75 567～－75 570　Y－23 519～－23 523　**規　模**：東西 320 ㎝以上×南北 87cm×深さ約 32cm（底面高 16.13m）　**平面形**：（推定隅丸長方形）**断面形**：逆台形　**主軸方位**：（N－67.5°－W）　**充填土**：図に記載　**重複関係**：柱穴列 13・15 に切られる　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（1～3）・土師器皿Ｒ種中型（4）・土師器皿Ｒ種大小型（5～7）・瓦器火鉢（8・9）・常滑片口鉢Ⅱ類（10）・常滑甕（11）・白磁口兀皿（12）・砥石仕上砥（13）・砥石中砥（14）・漆器皿（15・16）・円板状木製品（17～19）・棒状木製品（20・21）　**特記事項**：東の調査区外に抜ける溝。大半の柱穴列・掘立柱建物の範囲の中にあり、関係が不明。遺物は多く、年代は 13 世紀後半としてよい。

土坑 9（図 26）

位　置：X－75 566～－75 568　Y－23 520～－23 521　**規　模**：東西 90 ㎝×南北（90）cm×深さ約 43cm（底面高 16.01m）　**平面形**：円形　**断面形**：逆台形　**主軸方位**：不明　**充填土**：繊維質を多く含む茶褐色粘質土　**重複関係**：建物 2 に切られる　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（25）・白磁口兀皿（26）　**特記事項**：これも遺物年代は 13 世紀後半

土坑 12

出土遺物（図 19・26）：南部系山茶碗（27）

P.40

出土遺物（図 19・26）：竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗（28）

P.50

出土遺物（図 19・26）：土師器皿Ｒ種小型（29）・土師器皿Ｒ種大型（30・31）・瓦器火鉢（32）・常滑片口鉢Ⅰ類（33）・白色系土師器皿（34）

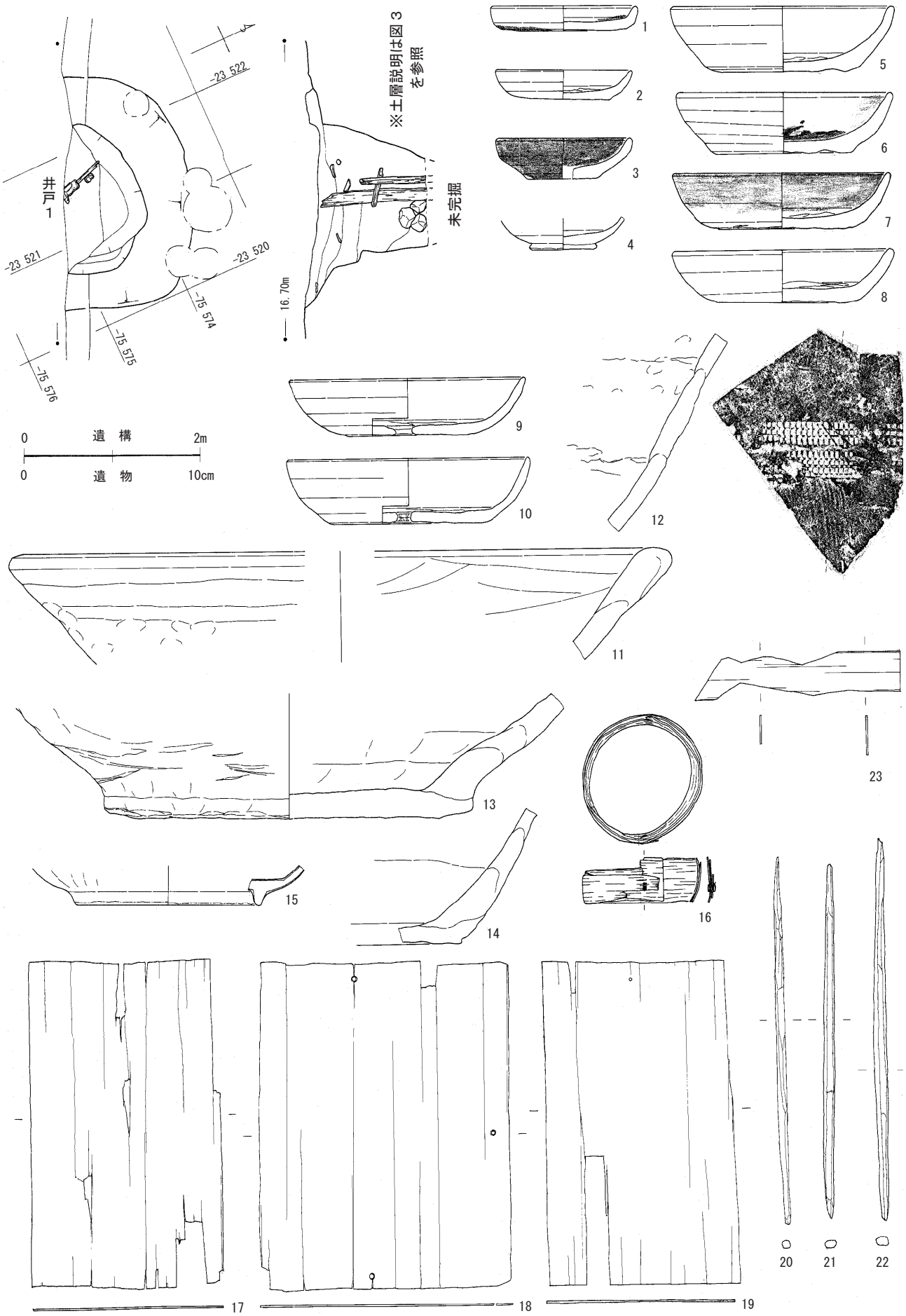


図23　井戸１　同出土遺物（１）

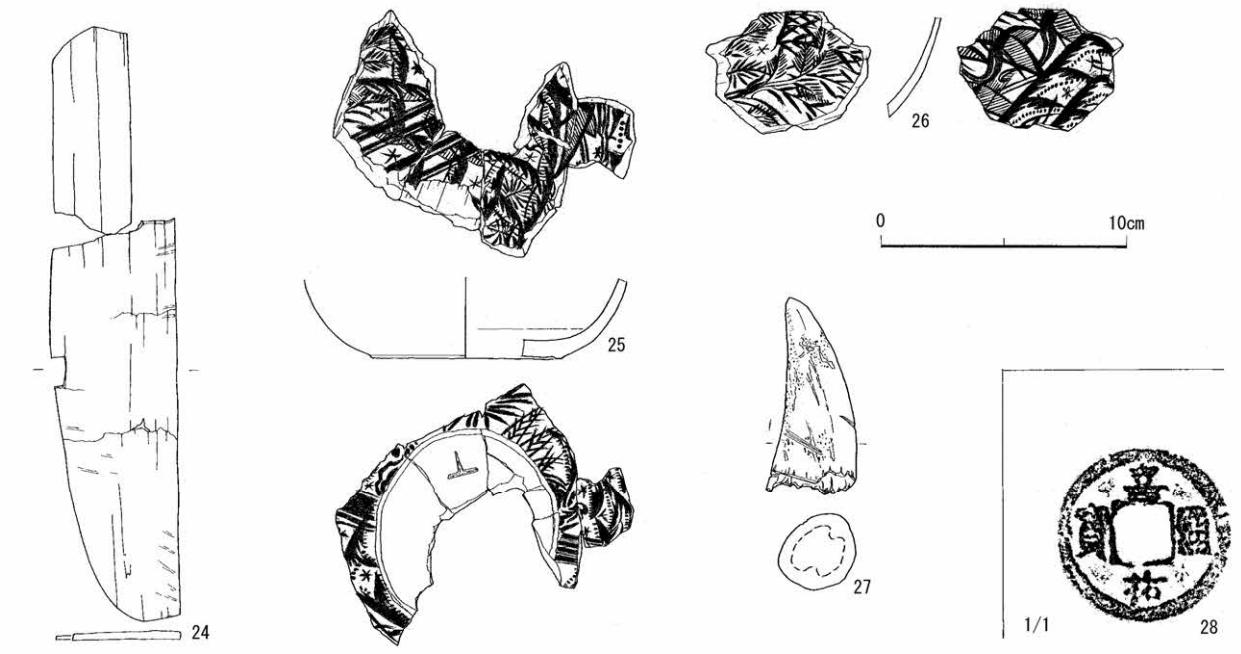


図 24　井戸 1 出土遺物（2）

P.52（図 19・26）

出土遺物：連歯下駄(35)

P.54（図 19・26）

出土遺物：常滑片口鉢Ⅰ類（36）・土師器皿Ｒ種大型（37）

P.57（図 19・26）

出土遺物：土師器皿Ｒ種小型（38）・箸状木製品（39）

Ⅳ面出土遺物（図 27）

土師器皿Ｔ種小型（1）・土師器皿Ｒ種小型（2～13）・土師器皿Ｒ種中型（14）・土師器皿Ｒ種大型（15～23）・火鉢（24）・常滑甕（25）・常滑片口鉢Ⅱ類（26）・南部系山茶碗（27）・常滑片口鉢Ⅰ類（28・29）・磨耗陶片（30）・白磁口兀型押盤（31）・白磁口兀皿（32）・白磁稜花鉢（33）・竜泉窯青磁蓮弁文碗（34・35）・竜泉窯青磁折縁鉢（36）・高麗青磁鉢（37）・青白磁梅瓶（38）・咸平元宝（39）・天禧通宝（40）・皇宋通宝（41）・熙寧元宝（42）・元豊通宝（43・44）・元祐通宝（45～47）・政和通宝（48）・紹聖元宝（49）・砥石中砥（50）・漆器皿（51）　**特記事項**：上層と下層を分けていないが、年代は 13 世紀後半で大過ない。

5. Ⅴ面（図 28）

検出高：約 16.3m～16.2m　構成土：人頭大泥岩・砂岩の間に破砕泥岩が詰まる地形　検出遺構：溝 2 条　土坑 1 基・小穴 21 穴(内建物 1 含む)　土師器皿・土師器皿細片集中部 2 箇所

Ⅴ面上出土遺物（図 28）

出土遺物：円盤状土製品（1）・白磁皿（2）・竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗（3）・不明木製品（4）・箸状木製品（5）・棒状木製品（6）

建物 4（図 29）

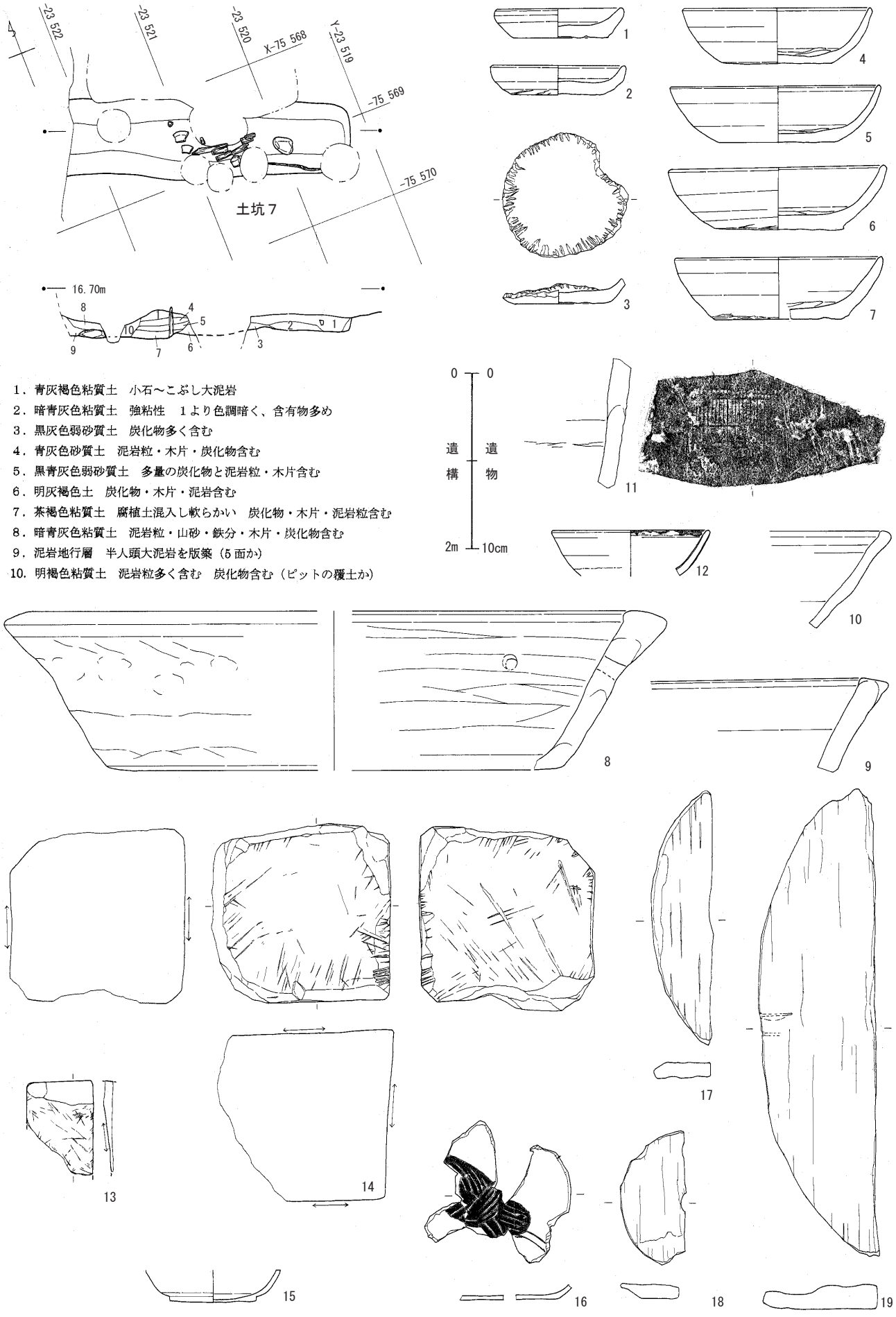


図25　土坑７　同出土遺物

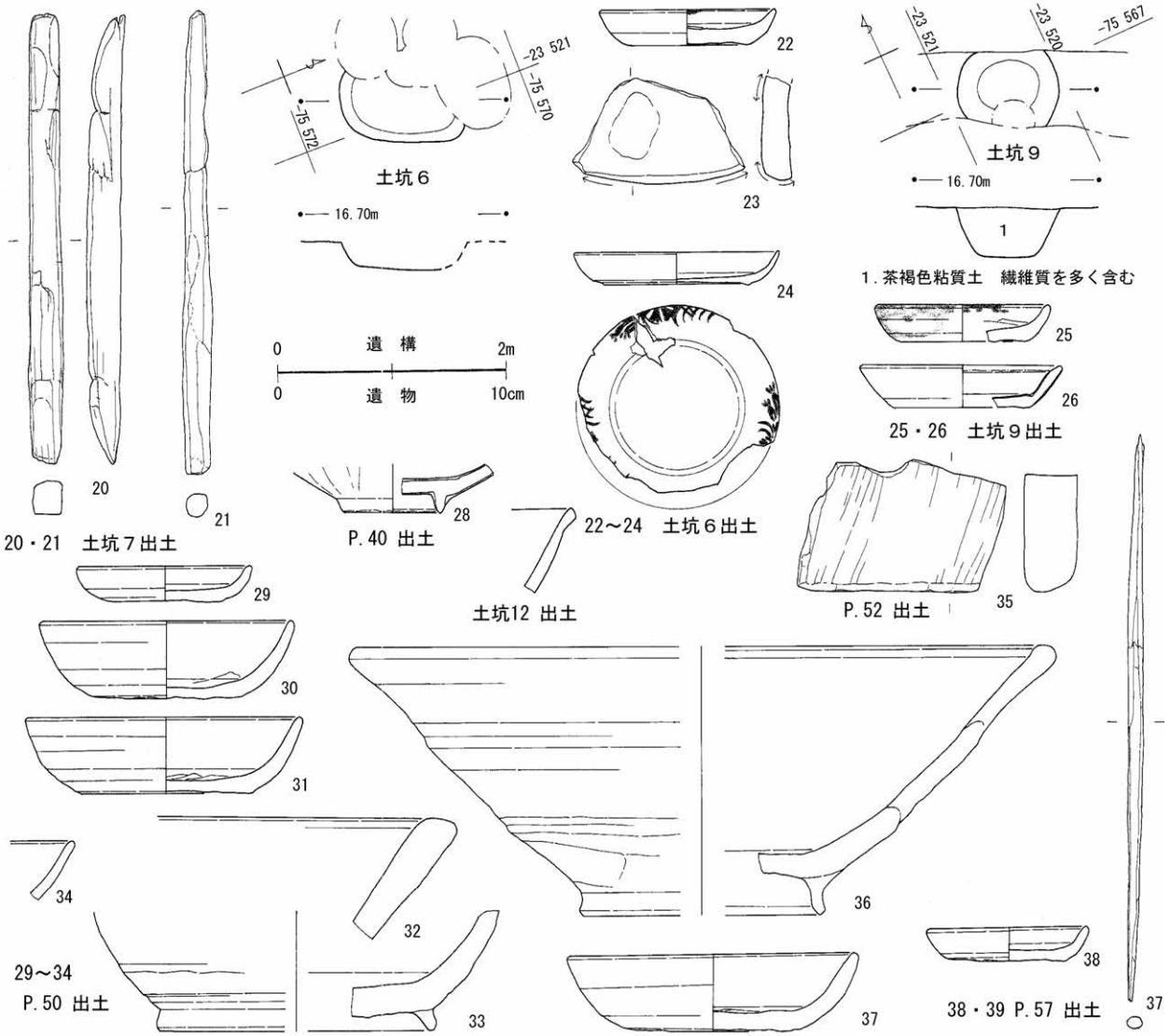


図 26　土坑 6・7・9・12，同出土遺物・Ⅳ面柱穴出土遺物

位　置：X－75 570～－75 574　Y－23 519～－23 523　**規　模**：東西Ⅰ間（柱間距離 1.70m）×南北 2 間（柱間距離 1.93m）・柱穴底面高 15.88m（平均）※各柱穴規模は図に記載　**南北軸方位**：N－27°－E　**重複関係**：なし　**出土遺物**：P.1 より砥石中砥（1）　**特記事項**：溝により北・東の境界が示されている中におさまっているとみてよい。柱穴は同規模で、いずれも礎板を持つ。

土坑 13（図 29）

位　置：X－75 570～－75 572　Y－23 519～－23 521　**規　模**：東西 87 ㎝×南北 98cm×深さ約 54cm（底面高 15.67m）　**平面形**：円形　**断面形**：碗形　**充填土**：茶褐色粘質土　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（2・3）・丸瓦（4）　**特記事項**：土師器の年代は 13 世紀中葉～後半か。図 29 - 4 丸瓦端縁のケズリには鎌倉時代でも古い様相があり、13 世紀の前葉にまで遡る可能性がある。

P.73（図 28・29）

出土遺物：元符通宝(5)

溝 3（図 28・30）

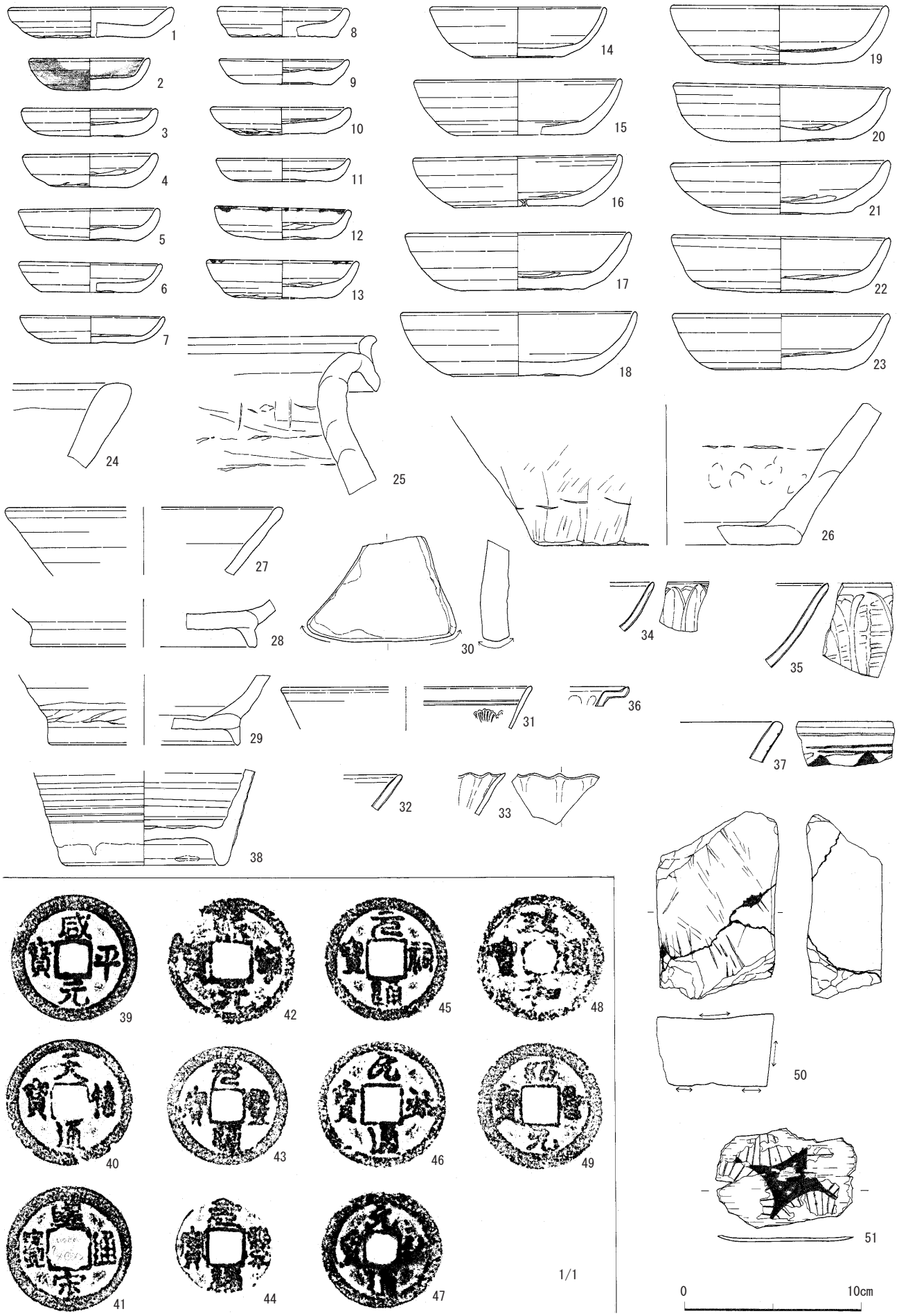


図27　Ⅳ面出土遺物

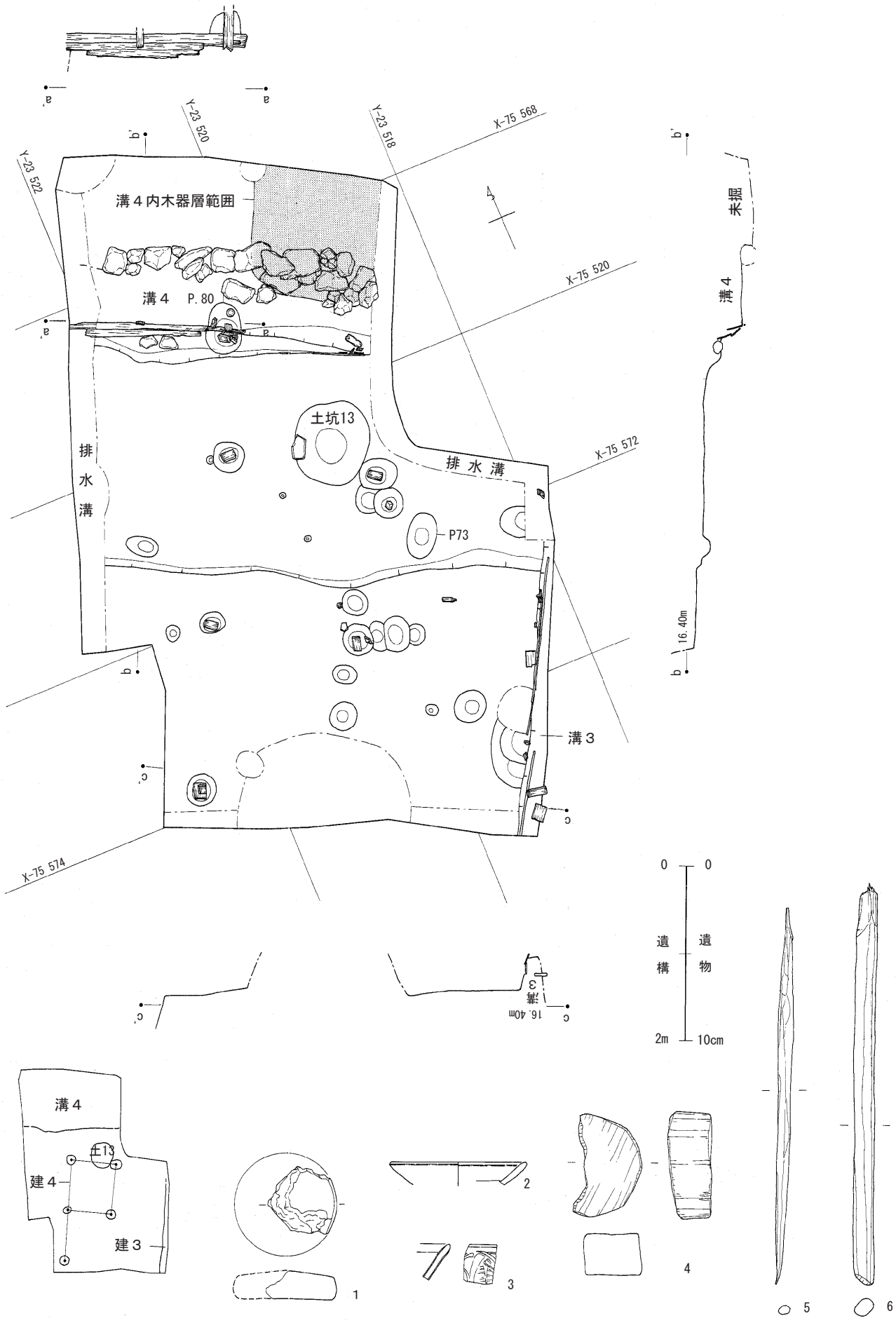
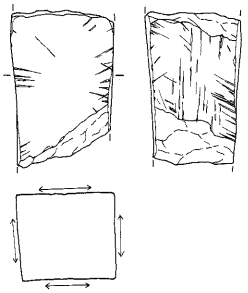
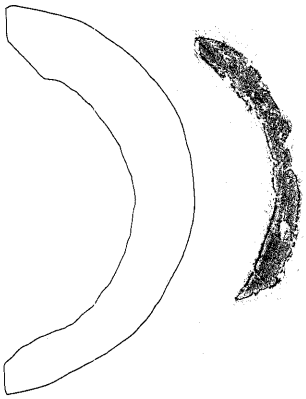
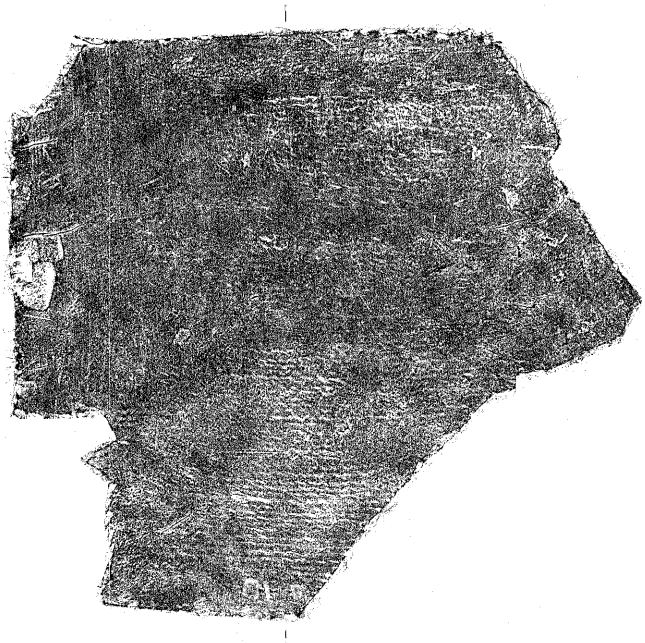


図28　Ⅴ面遺構全図　Ⅴ面上出土遺物

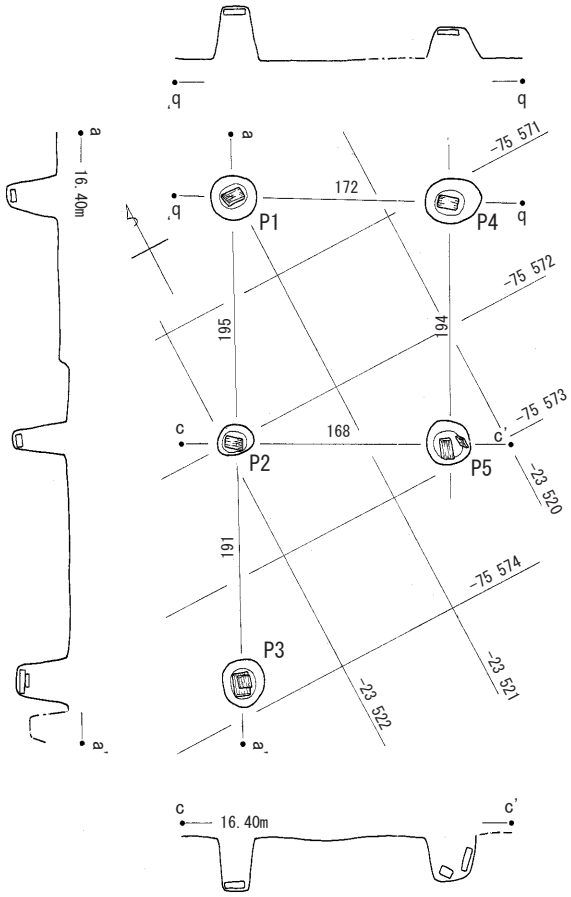


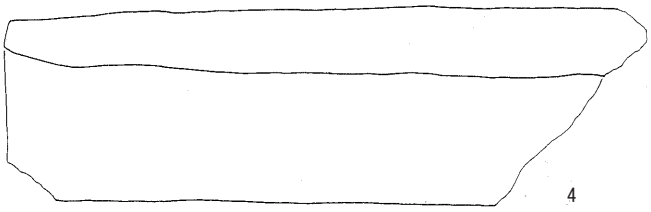
建物４　P.１ 出土



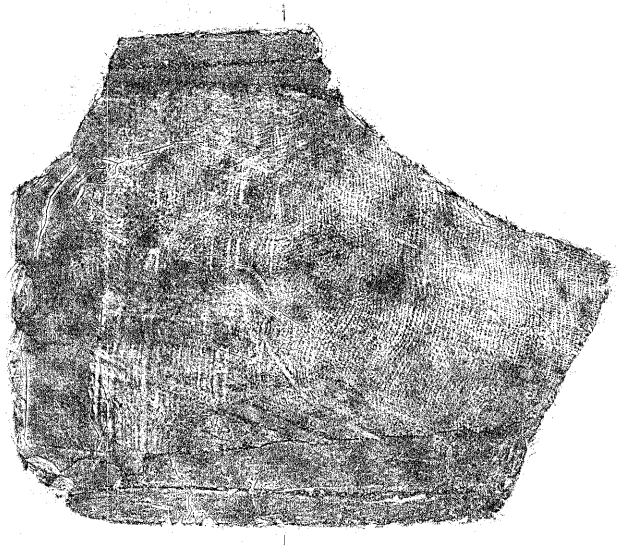


0　遺物　10cm
0　遺構　2m



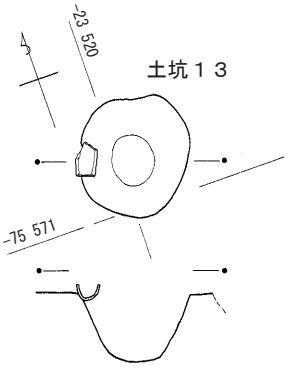


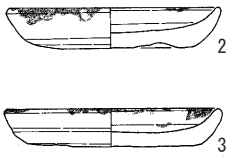
4



建物４	
No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	36×36×42
P.2	29×25×42
P.3	38×33×41
P.4	44×36×23
P.5	37×36×37

単位 cm





２～４　土坑１３出土

5

1/1

Ｐ７３出土

図29　建物４・土坑１３・Ｐ７３　同出土遺物

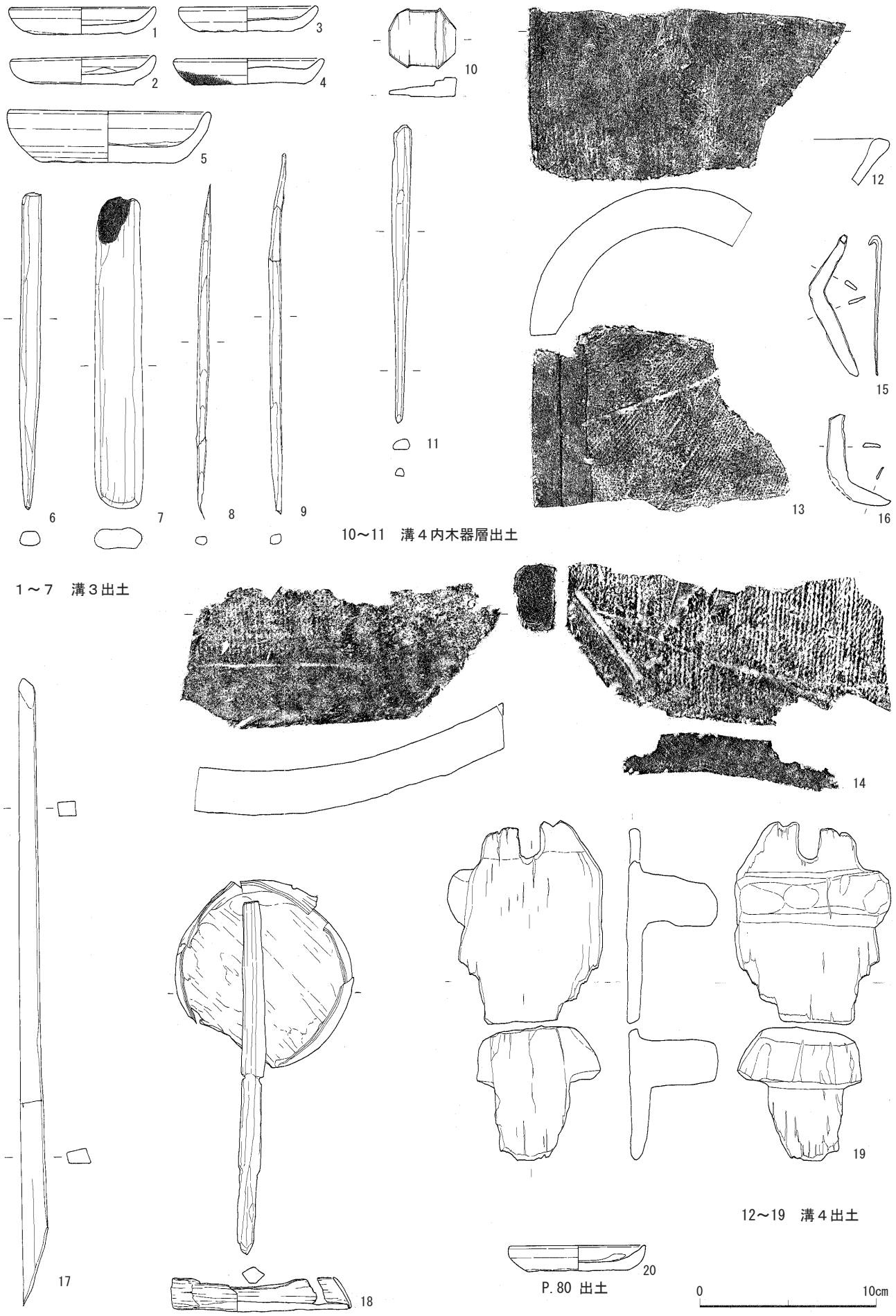


図30　溝３・４　P.80　出土遺物

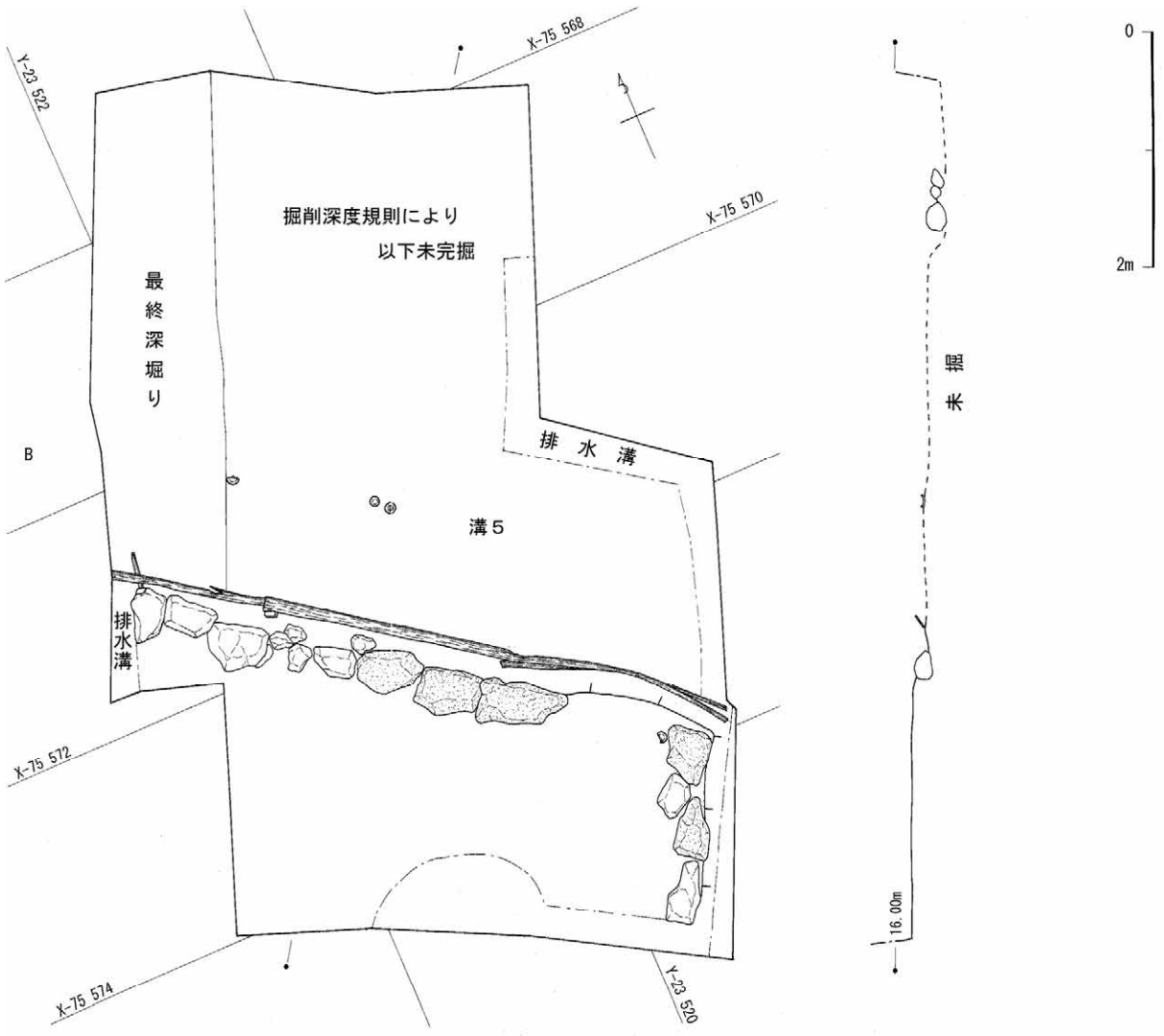


図 31　Ⅵ面遺構全図

位　置：X－75 573～－75 576　Y－23 518～－23 520　**規　模**：26 ㎝以上　**断面形**：逆台形か　**主軸方位**：(N－27°　－E)　**充填土**：東壁・南壁土層図（図 3）参照　**流下方向**：？　**重複関係**：なし　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（1～4）・同大型（5）・串状木製品（6）・棒状木製品（7）・箸状木製品（8・9）　**特記事項**：土師器はおおむね 13 世紀中葉～第 3 四半期であろう。

溝 4 内木器層（図 28・30）

出土遺物：不明木製品（10）・串状木製品（11）　**特記事項**：溝 4 堆積土上面に薄く広がる茶褐色繊維質の層から出土したもの。土師器の年代は 13 世紀中葉前後か。

溝 4（図 28・30）

位　置：X－75 566～－75 576　Y－23 518～－23 523　**規　模・断面形**：ともに深度規制により未完掘のため不明　**主軸方位**：(N－65°　－W)　**充填土**：土層図（図 3・4）参照　**流下方向**：東→西　**重複関係**：溝 5 を切る　**出土遺物**：常滑片口鉢Ⅰ類（12）・丸瓦（13）・平瓦（14）・不明金属製品（15・16）・串状木製品（17）・柄杓（18）・下駄（19）　**特記事項**：木器層の下に凝灰岩を敷いて構築された面があり、

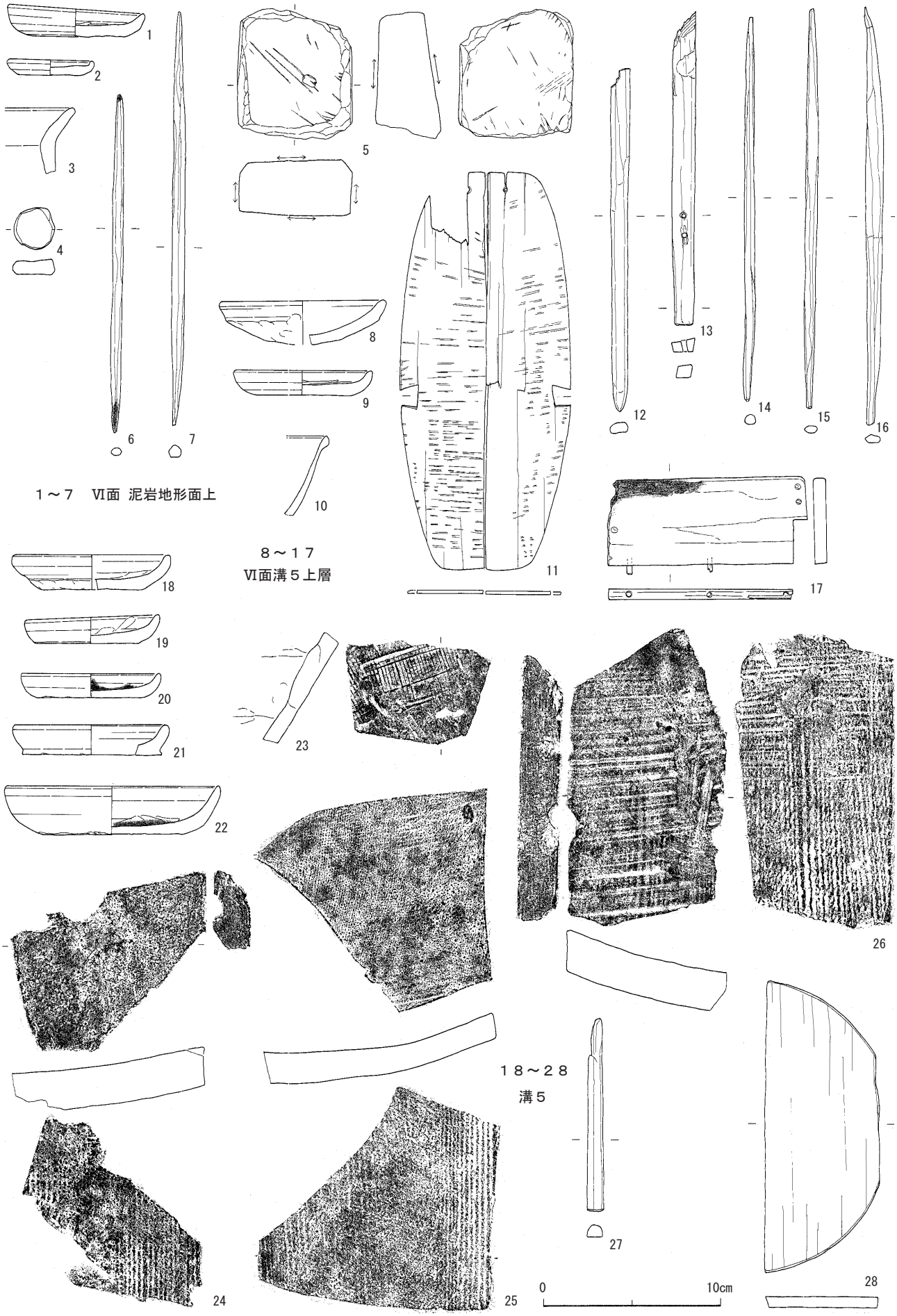


図32　Ⅵ面上　溝５　出土遺物

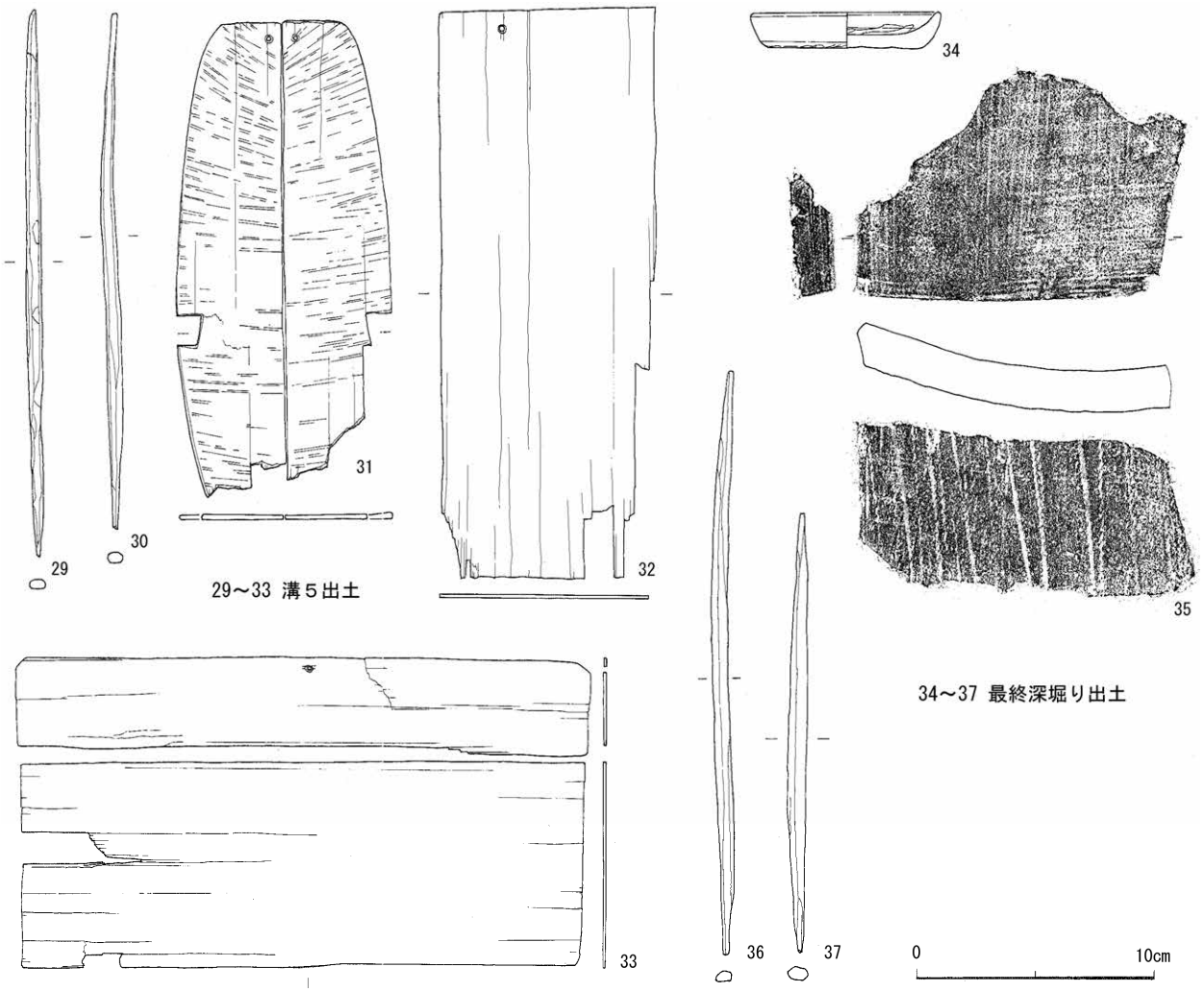


図 33　溝 5，深掘り出土遺物

これが一時期の溝底部をなす。さらにその下に一時期古い溝が見える。深掘りの断面観察ではさらに下に落ちていくことが確認できたが（「4 - B・C」図 4 土層番号 129）、底部には達しなかった。出土遺物からみると、図 30 - 13・14 の瓦はともに図 29 - 4 と共通する要素を持ち、13 世紀前半まで遡ることができよう。図 30 - 1～5 の土師器には 13 世紀第 1 四半期までの多様性を脱して浅い皿形に統一された様相が認められ、同第 2 四半期に位置付けられる。

P. 80（図 28・30）

出土遺物：土師器皿Ｒ種小型（20）

６．Ⅵ面（図 31）

検出高：約 16.0m～15.8m　構成土：大型泥岩・砂岩地形　検出遺構：溝 1 条

溝 5（図 31・32・33）

位　置：Ｘ－75 574 以北　Ｙ－？　**規　模・断面形**：初期は箱形、改修後は深度規制により未完掘のため不明　**主軸方位**：（N－56°－W）　**充填土**：土層図（図 3・4）参照　**流下方向**：不明　**重複関係**：溝 4 に切られる　**出土遺物**：土師器皿Ｔ種小型（18）・土師器皿Ｒ種小型（19～21）・土師器皿Ｒ種大型（22）・常滑甕（23）・平瓦（24～26）・棒状木製品（27）・円板状木製品（28）・箸状木製品（29・30）・草履芯

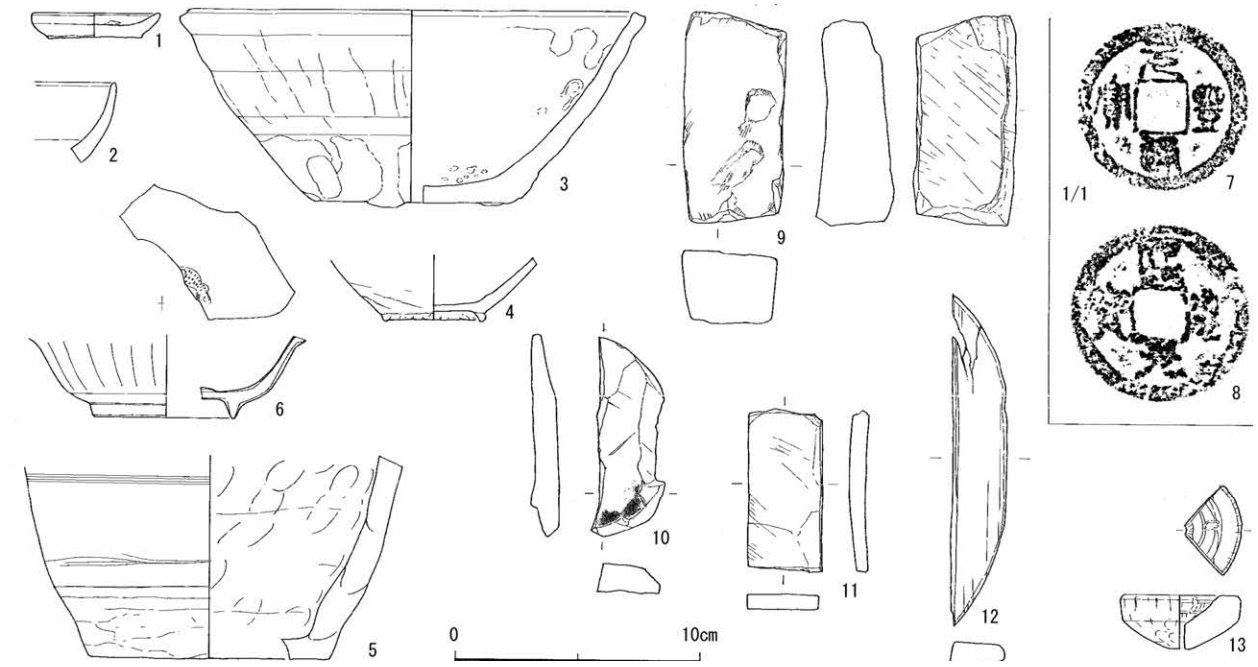


図 34　遺構外採集遺物

（31）・折敷（32・33）　**特記事項**：南半部の凝灰岩・泥岩を敷いたような面が板壁を境に北に向かって落ちる。ひとまず「溝」とは称したものの北側の対岸が調査区内で見つかっていないので、性格については確実でない。池のようなものである可能性もあろう。断面から、一度改修を受け、北側に岸が移行していることがわかるが、これも広がりや深さ等については不明である。年代は図 32 - 24～26 の瓦類に鎌倉時代でも早い時期の様相があり、また同 18～22 の土師器は 13 世紀前半のうちに収まる。

Ⅵ面地形面上出土遺物（図 32）

出土遺物：土師器皿Ｒ種小型（1）・土師器皿Ｒ種超小型（2）・土師器甕（3）・円盤状土製品（4）・砥石中砥（5）・箸状木製品（6・7）　**特記事項**：図 32 - 1 の土師器は器形が T 種のように低く、13 世紀前半。同 - 3 の土師器は 7 世紀後半と思われ、下層もしくは近辺に古代遺構のあることを示唆している。

Ⅵ面溝 5 上層出土遺物（図 32）

出土遺物：土師器皿 T 種小型（8）・土師器皿Ｒ種小型（9）・北部系山茶碗（10）・板草履芯（11）・ヘラ状木製品（12・13）・箸状木製品（14～16）・箱型製品部材（17）　**特記事項**：8・9 の土師器は 13 世紀前半のもの。17 は木釘によってとめる。

深掘り　（図 31・33）

出土遺物：土師器皿Ｒ種小型（34）・平瓦（35）・箸状木製品（36・37）　**特記事項**：土層断面により溝 5 底部、溝 4B・C 等を確認したが、後者はなお底に達しなかった。34 の土師器、35 の平瓦などはこの深掘りが 13 世紀前半であることを示している。

７．遺構外採集遺物（図 34）

土師器皿Ｒ種超小型（1）・白色系土師器皿（2）・古瀬戸鉢（3）・北部系山茶碗（4）・ 渥美壺（5）・竜泉窯青磁蓮弁双魚文折縁鉢（6）・元豊通宝（7）・熙寧元宝（8）・砥石中砥（9）・風字硯（10）・砥石仕上砥（11）・円板状木製品（12）・木製独楽（13）　**特記事項**：攪乱坑や表採品などを一括した。

（松原・馬淵－補綴）

出土遺物観察表（1）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図3－1	調査区 東壁	土師器皿R種 小型	口径(8.1)cm　底径6.6cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底面糸切り、薄く板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・黒雲母を含む
2	調査区 東壁	土師器皿R種 大型	口径(12.8)cm　底径8.2cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底面糸切り、薄く板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡赤橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒を含む
3	調査区 東壁	常滑片口鉢Ⅰ 類	口縁部片　胎土は灰色　ロクロ成形　長石・石英粒含む
4	調査区 南壁	瓦器火鉢	口縁～体部片　胎土は暗灰色、砂質　長石・石英粒含む　器表は被熱により剥離　口縁下に孔貫通
5	調査区 南壁	常滑片口鉢Ⅱ 類	底径(15.2)cm　輪積み成形　胎土は橙灰色、長石・石英・砂粒・礫含む　内底面は使用により滑らかに磨耗、灰色を帯びる
6	調査区 南壁	土師器皿R種 大型	口径(12.8)cm　底径7.7cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
図4－7	調査区 西壁	土師器皿R種 小型	口径7.5cm　底径5.2cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒を含む
8	調査区 西壁	土師器皿R種 小型	口径7.3cm　底径5.2cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒・砂を含む
9	調査区 西壁	土師器皿R種 大型	口径(11.1)cm　底径5.9cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底面糸切り、はっきりした板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は淡い橙肌色、赤色粒子・微砂を含む精良土
10	調査区 西壁	土師器皿R種 大型	口径(12.8)cm　底径(9.3)cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡褐色、海綿骨芯・微砂を含む精良土
11	調査区 西壁	常滑　甕	底径(21.0)cm　輪積み成形　胎土は淡灰色、長石・石英含む　器表は肺褐色
図6－1	柱穴列1 P.3	土師器皿R種 小型	口径7.4cm　底径5.4cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り、薄く板状圧痕　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
図7－1	土坑1	土師器皿R種 小型	口径(6.3)cm　底径(4.15)cm　器高2.05cm　回転ロクロ　底面糸切り　胎土は肌色、砂粒・赤色粒子を含む　口縁部に油煤付着
2	土坑1	土師器皿R種 小型	口径7.1cm　底径4.1cm　器高1.95cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒を含む
3	土坑1	土師器皿R種 小型	口径7.8cm　底径4.6cm　器高1.55cm　右回転ロクロ　底面糸切り、微かに板状圧痕　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒を含む
4	土坑1	土師器皿R種 小型	口径8.6cm　底径5.2cm　器高2.5cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は淡赤橙色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒を含む
5	土坑1	土師器皿R種 大型	口径12.0cm　底径7.2cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒・泥岩粒を含む
6	土坑1	瀬戸　天目茶 碗	口縁～体部片　黒褐釉　胎土は淡灰褐色
7	土坑3	土師器皿R種 小型	口径(7.3)cm　底径(5.6)cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は赤橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む砂質土
8	土坑3	土師器皿R種 中型	口径10.25cm　底径6.4cm　器高2.55cm　右回転ロクロ　底面糸切り、薄く板状圧痕　内底部ナデ　胎土は肌色、砂粒・赤色粒子を含む砂質土　口縁部を平に削る
9	土師器集 中部1	土師器皿R種 小型	口径7.6cm　底径5.3cm　器高1.75cm　右回転ロクロ　底面糸切り、薄く板状圧痕　内底部ナデ　胎土は肌色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒を含む
10	P.1	鉄釘	残存長(6.9)cm　幅0.5cm　厚み0.3cm
11	P.10	鍔鍋	口縁部片　器表黄灰白色　胎芯暗灰色
図8-1	1面	土師器皿R種 小型	口径7.4cm　底径4.4cm　器高1.65cm　右回転ロクロ　底面糸切り、薄く板状圧痕　内底部ナデ　胎土は肌色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒を含む　口縁の一部に油煤付着
2	Ⅰ面	土師器皿R種 小型	口径7.25cm　底径4.6cm　器高1.75cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は肌色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む
3	Ⅰ面	土師器皿R種 小型	口径(7.4)cm　底径5.3cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む　口縁部油煤付着
4	Ⅰ面	土師器皿R種 小型	口径7.8cm　底径4.7cm　器高2.4cm　回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・砂粒を含む
5	Ⅰ面	土師器皿R種 中型	口径10.6cm　底径3.05cm　器高6.8cm　回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡褐色、白色粒子・赤色粒子を含む
6	Ⅰ面	土師器皿R種 中型	口径(11.0)cm　底径6.1cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子・白色粒子を含む
7	Ⅰ面	土師器皿R種 中型	口径11.0cm　底径7.2cm　器高3.15cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡赤橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
8	Ⅰ面	土師器皿R種 大型	口径11.9cm　底径7.0cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡黄褐色、白色粒子・赤色粒子・多量の砂粒・泥岩粒を含む砂質土
9	Ⅰ面	土師器皿R種 大型	口径12.8cm　底径7.5cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕　内底部ナデ　胎土は赤橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
10	Ⅰ面	土師器皿R種 大型	口径12.7cm　底径7.4cm　器高3.35cm　右回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色、白色粒子・赤色粒子・砂粒・海綿骨芯を含む
11	Ⅰ面	土師器皿R種 大型	口径12.9cm　底径8.0cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
12	Ⅰ面	土師器皿R種 大型	口径(12.3)cm　底径7.1cm　器高3.9cm　右回転ロクロ　底面糸切り、薄く板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡橙色、白色粒子・赤色粒子を含む
13	Ⅰ面	土師器皿R種 大型	口径(13.2)cm　底径(7.0)cm　器高3.8cm　回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
14	Ⅰ面	土師器皿R種 大型	口径12.7cm　底径7.4cm　器高3.8cm　回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡橙色、白色粒子・赤色粒子を含む
15	Ⅰ面	南部系 山茶碗	口縁部～体部片　胎土は淡灰褐色
16	Ⅰ面	常滑甕	底部～体部片　胎土は灰色、白色粒・礫を含む　器表灰褐色
17	Ⅰ面	瀬戸大平鉢	口径(25.3)cm　底径(11.8)cm　器高6.45cm　胎土は肌色～灰色、灰釉ハケ塗り後漬け掛け
18	Ⅰ面	青白磁　梅瓶	胴部片　素地灰白色　釉は水色、被熱によりざらつく
図9-1	建物1　P.4	刀子	残存長(6.7)cm　最大幅(1.3)cm　小孔あり　柄部と思われる
2	柱穴列6 P.1	土師器皿R種 小型	口径7.15cm　底径5.2cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は肌色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒を含む　口縁下内側に薄く煤付着

出土遺物観察表（2）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
3	柱穴列6 P.1	土師器皿R種 大型	口径(11.35)cm 底径(7.4)cm 器高2.75cm 回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・白色粒子を含む
4	柱穴列6 P.1	常滑片口鉢Ⅰ類型	口縁部片 胎土は灰色、白色粒含む
図10-1	柱穴列7 P.1	土師器皿R種 小型	口径7.85cm 底径5.4cm 器高1.8cm 回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
2	柱穴列8 P.2	鉄釘	長さ7.9cm 幅0.55cm 厚み0.7cm
3	土坑4	土師器皿R種 小型	口径7.2cm 底径5.4cm 器高1.4cm 回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡褐色赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
4	土坑4	土師器皿R種 小型	口径7.6cm 底径5.3cm 器高1.75cm 回転ロクロ 底面糸切り 胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
5	土坑4	土師器皿R種 中型	口径10.8cm 底径6.2cm 器高3.1cm 回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり 胎土は淡赤橙色、白色粒子・赤色粒子・砂粒多めに含む砂質土
6	土坑4	土師器皿R種 大型	口径11.8cm 底径7.3cm 器高3.4cm 回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は淡赤橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
7	土坑4	滑石印判	遺存長(2.1)cm 幅4.1cm 厚み1.4cm 表面に陽刻の文様、裏面は煤付着 滑石鍋転用品
8	土坑4	砥石 仕上砥	遺存長(7.1)cm 幅4.0cm 厚さ1.0cm 砥面2面 淡黄褐色 鳴滝産
9	土坑4	砥石 中砥	遺存長(4.2)cm 幅3.5cm 厚さ1.5cm 砥面4面 橙色が混じる淡緑灰色
図11－1	土坑14	平瓦	厚さ2.3cm 胎土は淡灰色、白色粒子・砂粒・礫を含む 凸面に薄く格子叩き目
2	土坑14	青白磁 合子	身の底部 底径4.1cm 素地灰白色 内側は水色半透明釉 土坑4出土の破片と接合した
3	土坑15	瀬戸 小壺	胴部片 ロクロ成形 胎土は淡灰褐色、堅緻 黄褐釉
4	P.17	土師器皿R種 小型	口径(7.7)cm 底径(5.5)cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・微砂を含む 口縁部の一部平に磨耗
5	P.31	土師器皿R種 小型	口径(7.15)cm 底径(4.8)cm 器高2.2cm 回転ロクロ 底面糸切り 口縁部に油煤付着 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
図12－1	Ⅱ面上ローム面上	土師器皿R種 小型	口径(7.0)cm 底径(5.4)cm 器高1.95cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む
2	Ⅱ面上ローム面上	土師器皿R種 小型	口径7.55cm 底径4.7cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・・砂粒・白色粒子を含む砂質土
3	Ⅱ面上ローム面上	常滑 甕	口縁部片 胎土は灰色、白色粒子少し含む 器表は茶色
4	Ⅱ面上ローム面上	瀬戸 平碗	口縁部片 口径(14.9)cm 灰釉 胎土は淡黄色褐色
5	Ⅱ面	土師器皿R種 小型	口径(7.4)cm 底径(6.2)cm 器高1.4cm 回転ロクロ 底面糸切り 胎土は淡褐色、赤色粒子・泥岩粒・砂粒を含む
6	Ⅱ面	土師器皿R種 小型	口径6.7cm 底径5.3cm 器高1.65cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底ブナデ 胎土は肌色 赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
7	Ⅱ面	土師器皿R種 小型	口径7.0cm 底径4.6cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、白色粒子・赤色粒子・微砂粒を含む 口縁部2箇所油煤付着
8	Ⅱ面	土師器皿R種 小型	口径(7.35)cm 底径(4.6)cm 器高2.35cm 右回転ロクロ 底面糸切り、外底部に薄く板状圧痕 胎土は淡橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
9	Ⅱ面	土師器皿R種 中型	口径10.4cm 底径6.9cm 器高2.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子を含む砂質土 口縁部2箇所に油煤付着
10	Ⅱ面	土師器皿R種 中型	口径10.7cm 底径6.55cm 器高3.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
11	Ⅱ面	土師器皿R種 中型	口径(10.1)cm 底径5.8cm 器高3.05cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・砂粒・白色粒子を含む砂質土
12	Ⅱ面	土師器皿R種 大型	口径12.45cm 底径7.1cm 器高3.45cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・砂粒・白色粒子を含む
13	Ⅱ面	土師器皿R種 大型	口径(12.25)cm 底径(8.8)cm 器高3.55cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
14	Ⅱ面	土師器皿R種 大型	口径12.7cm 底径7.55cm 器高3.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
15	Ⅱ面	瓦器 火鉢	口縁部から胴部片 胎土は明灰色、礫・多量の砂粒含む
16	Ⅱ面	瀬戸 卸皿	口縁部から胴部片 胎土は明灰褐色、堅緻 灰釉漬け掛け
17	Ⅱ面	瀬戸 折縁深	口径(25.35)cm 胎土は淡黄灰色 灰釉ハケ塗り
18	Ⅱ面	滑石鍋	口縁から胴部片 銀灰色
19	Ⅱ面	砥石 中砥	遺存長(5.7)cm 幅3.8cm 厚さ1.8cm 砥面4面 橙色が混じる乳白色 天草産
20	Ⅱ面	砥石 仕上砥	遺存長(4.8)cm 幅3.15cm 厚さ0.7cm 砥面1面 淡灰橙色 鳴滝産
図14-1	溝1	土師器皿R種 小型	口径(6.8)cm 底径(4.2)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
2	溝1	土師器皿R種 小型	口径7.2cm 底径4.9cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
3	溝1	土師器皿R種 小型	口径7.6cm 底径5.5cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・白色粒子・泥岩粒を含む
4	溝1	土師器皿R種 中型	口径9.8cm 底径5.7cm 器高2.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・微砂粒を含む精良土
5	溝1	土師器皿R種 大型	口径12.2cm 底径7.3cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
6	溝1	土師器皿R種 大型	口径(12.6)cm 底径(8.4)cm 器高3.0cm 回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・砂粒・白色粒子を含む砂質土
7	溝1	土師器皿R種 大型	口径12.0cm 底径7.4cm 器高3.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
8	溝1	土師器皿R種 大型	口径(11.6)cm 底径(7.8)cm 器高3.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡赤橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・白色粒子を含む砂質土
9	溝1	土師器皿R種 大型	口径12.3cm 底径7.5cm 器高3.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・白色粒子・泥岩粒を含む砂質土

出土遺物観察表（3）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
10	溝1	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　　胎土は灰色、長石を含み、粘性強い　器表灰黒色
11	柱穴列11 P.3	土師器皿R種 極小型	口径(4.6)cm　底径(3.6)cm　器高0.95cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒を含む
12	土坑5	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　胎土は灰色、長石・石英粒含む
13	土坑11	土師器皿R種 小型	口径(7.5)cm　底径(5.3)cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒・白色粒子を含む
14	土坑11	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　ロクロ成形　胎土暗灰色、長石含む　器表は暗紫色
15	P.34	土師器皿R種 大型	口径(11.8)cm　底径(7.5)cm　器高3.45cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む砂質土
16	P.34	常滑　小壺	口縁部片　口径(5.0)cm　ロクロ成形　　胎土は灰褐色　器表は暗灰色
図15－1	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径(6.4)cm　底径4.0cm　器高2. 15cm　右回転ロクロ　底面糸切り　　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む
2	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径6.9cm　底径4.4cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底面糸切り　　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む
3	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径6.8cm　底径4.5cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む砂質土
4	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径6.7cm　底径4.9cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む砂質土
5	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径(7.0)cm　底径(4.4)cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む砂質土
6	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径6.9cm　底径4.3cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・砂粒を含む
7	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径7.1cm　底径4.5cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子・砂粒を含む砂質土
8	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径7.1cm　底径4.5cm　器高2.0cm　回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子・砂粒・白色粒を含む
9	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径6.9cm　底径4.4cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は肌色～赤橙色、赤色粒子・白色粒・砂粒を含む
10	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径(6.5)cm　底径(4.2)cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・白色粒・砂粒を含む
11	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径7.2cm　底径4.9cm　器高1.8cm　回転ロクロ　底面糸切り　外底部に薄く板状圧痕　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む
12	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径(6.7)cm　底径(4.5)cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部に薄く板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡赤橙色、赤色粒子・砂粒を含む　口縁部に油煤少量付着
13	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径7.2cm　底径5.4cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り　　内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
14	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径7.5cm　底径5.2cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り　　内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒・白色粒子を含む
15	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径7.7cm　底径4.8cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り　　内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む　一部に薄く煤付着
16	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径7.6cm　底径5.4cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部に薄く板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む砂質土
17	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径8.3cm　底径4.8cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部に薄く板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡赤橙色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
18	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径7.8cm　底径5.3cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底面糸切り　　内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
19	土師器集中部2	土師器皿R種 小型	口径(7.6)cm　底径(5.2)cm　器高1.7cm　回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
20	土師器集中部2	土師器皿R種 中型	口径(9.4)cm　底径(5.3)cm　器高2.7cm　回転ロクロ　底面糸切り　　胎土は淡橙色、赤色粒子・微砂粒を含む精良土
21	土師器集中部2	土師器皿R種 中型	口径10.5cm　底径7.6cm　器高2.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
22	土師器集中部2	土師器皿R種 中型	口径10.2cm　底径5.8cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む
23	土師器集中部2	土師器皿R種 中型	口径10.6cm　底径6.3cm　器高2.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
24	土師器集中部2	土師器皿R種 大型	口径12.0cm　底径5.4cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
25	土師器集中部2	土師器皿R種 大型	口径(11.6)cm　底径(6.8)cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底面糸切り　　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む
26	土師器集中部2	土師器皿R種 大型	口径12.9cm　底径7.3cm　器高3.7cm　回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・白色粒子・砂粒・泥岩粒を含む
27	土師器集中部2	土師器皿R種 大型	口径(11.2)cm　底径6.2cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は赤橙色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む
28	土師器集中部2	土師器皿R種 大型	口径12.2cm　底径6.8cm　器高3.3cm　回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡褐色色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
29	土師器集中部2	土師器皿R種 大型	口径13.0cm　底径8.0cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む砂質土
30	土師器集中部2	土師器皿R種 大型	口径12.5cm　底径8.5cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
31	土師器集中部2	土師器皿R種 大型	口径12.3cm　底径7.4cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡黄褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む砂質土
32	土師器集中部2	土師器皿R種 大型	口径(13.4)cm　底径8.4cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子・微砂粒・白色粒子を含む
33	土師器集中部2	土師器皿R種 大型	口径12.1cm　底径7.7cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒・白色粒子を含む

出土遺物観察表（4）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
34	土師器集中部2	土師器皿R種大型	口径12.4cm 底径7.2cm 器高3.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡黄褐色、赤色粒子・砂粒白色粒子・泥岩粒含む
35	土師器集中部2	土師器皿R種大型	口径11.9cm 底径7.5cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒・泥岩粒・白色粒子を含む
36	土師器集中部2	常滑片口鉢Ⅱ類	口径(33.8)cm 底径15.5cm 器高11.1cm 輪済み成形 胎土は長石・大きめの石英粒を含む灰色土 器表は内側灰色、外側茶褐色 体部中位から下は使用により磨耗
図16－1	Ⅲ面	土師器皿R種小型	口径7.4cm 底径5.35cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
2	Ⅲ面	土師器皿R種小型	口径(7.15)cm 底径(4.85)cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む
3	Ⅲ面	土師器皿R種小型	口径(7.6)cm 底径5.7cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む 口縁部に油煤付着
4	Ⅲ面	土師器皿R種小型	口径(7.6)cm 底径(5.8)cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む
5	Ⅲ面	土師器皿R種小型	口径7.5cm 底径5.5cm 器高1.75cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・微砂粒・泥岩粒を含む
6	Ⅲ面	土師器皿R種小型	口径7.7cm 底径5.4cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒・泥岩粒・海綿骨芯を含む
7	Ⅲ面	土師器皿R種小型	口径(7.3)cm 底径(5.4)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む精良土
8	Ⅲ面	土師器皿R種小型	口径(7･85)cm 底径(5.0)cm 器高1.85cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 見込み周辺に沈線 胎土は淡橙色、赤色粒子・微砂粒を含む
9	Ⅲ面	土師器皿R種小型	口径(7.6)cm 底径(4.8)cm 器高2.15cm 回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・微砂粒を含む精良土
10	Ⅲ面	土師器皿R種大型	口径(11.65)cm 底径(6.6)cm 器高3.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む砂質土
11	Ⅲ面	土師器皿R種大型	口径12.25cm 底径8.2cm 器高3.25cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む 薄く煤付着
12	Ⅲ面	土師器皿R種大型	口径12.35cm 底径6.5cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒・白色粒子を含む
13	Ⅲ面	土師器皿R種大型	口径(13.25)cm 底径(7.6)cm 器高3.25cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・砂粒を含む砂質土
14	Ⅲ面	土師器皿R種大型	口径13.0cm 底径7.9cm 器高3.45cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・砂粒を含む
15	Ⅲ面	土師器皿R種大型	口径(13.7)cm 底径(7.8)cm 器高3.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
16	Ⅲ面	土師器皿R種大型	口径(11.7)cm 底径(6.6)cm 器高2.85cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒・泥岩粒を含む砂質土
17	Ⅲ面	土師器皿R種大型	口径(11.35)cm 底径(7.3)cm 器高3.15cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む
18	Ⅲ面	土師器皿R種大型	口径(12.55)cm 底径(7.1)cm 器高3.3cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む
19	Ⅲ面	土師器皿R種極小型	口径3.9cm 底径3.3cm 器高0.85cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・微砂粒を含む
20	Ⅲ面	土師器皿R種極小型	口径3.75cm 底径3.3cm 器高0.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・微砂粒を含む
21	Ⅲ面	土師器皿転用品	直径5.2～5.5cm 厚さ1.1cm 土師器皿R種の底部を使用した円盤
22	Ⅲ面	瓦器 火鉢	口縁～体部片 口径(34.0)cm 胎土・器表とも灰色、白色粒・砂粒を含む
23	Ⅲ面	瓦器 香炉	口縁～体部片 胎土・器表とも明灰色～灰橙色、微砂粒を含み肌理は細かめ
24	Ⅲ面	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒・微砂粒含む
25	Ⅲ面	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形 胎土は明灰色、白色粒・微砂粒含む
26	Ⅲ面	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形 胎土は淡灰色、白色粒・微砂粒含む
27	Ⅲ面	常滑片口鉢Ⅰ類	底部部片 輪積み成形 胎土は淡灰色、長石・石英粒・砂粒含む 内底部は使用により磨耗
28	Ⅲ面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 4型式 胎土は明灰褐色、長石粒・黒色粒含む 器表は褐色～茶色
29	Ⅲ面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石粒・石英粒含む 器表は暗茶色
30	Ⅲ面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒・黒色粒少量含む 器表は茶褐色
31	Ⅲ面	常滑 甕	底部片 底径(20.0)cm 輪積み成形 胎土・器表とも明茶褐色、長石・石英・橙色粒・砂粒を含む 内底部の周辺に沿って茶色の瘡蓋状付着物あり
32	Ⅲ面	常滑 甕	底部片 輪積み成形 胎土は灰色と淡橙色が層状に混じり、長石・石英・砂粒を含む 器表は灰褐色
33	Ⅲ面	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石・石英粒少し含む 器表は茶色 外面は叩き目痕が残る
34	Ⅲ面	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石・石英粒・頃色粒含む 器表は外側茶褐色、内側暗灰色 外面に漆を含んでいると思われる暗灰色の布片(約4×3cm)が付着している
35	Ⅲ面	瀬戸 輪花入子	口径(4.2)cm 底径(3.1)cm 器高1.3cm ロクロ成形後ヘラにより刻みを入れ輪花を作る 胎土は明灰褐色緻密土 内側に降灰
36	Ⅲ面	瀬戸 入子	口径5.2cm 底径3.1cm 器高1.9cm ロクロ成形、回転糸きり 胎土は明黄灰色、緻密土
37	Ⅲ面	瀬戸 灰釉 折れ縁鉢	口径(20.1)cm m ロクロ成形 胎土は明黄灰色、微砂粒を含み緻密
38	Ⅲ面	白磁 口兀皿	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰白色 釉は青みがかった半透明
39	Ⅲ面	平瓦	厚さ2.0cm 胎土は白色粒・砂粒を多く含む灰橙色土、表面は灰色 永福寺Ⅲ期
40	Ⅲ面	元祐通宝	初鋳1086年 北宋 行書
41	Ⅲ面	砥石 仕上砥	遺存長(5.7)cm 幅3.1cm 厚さ0.85m 砥面1面 淡橙色～淡黄灰色 鳴滝産
42	Ⅲ面構成	土器鍔鍋	口縁部片 復元口径(18.0)cm 胎土は明灰色、微砂粒含む 口縁上面から外側にかけて暗灰色
43	Ⅲ面構成	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は赤みがかった灰褐色、石英粒・砂粒含む 器表は茶色
44	Ⅲ面構成	元豊通宝	初鋳1078年 北宋 行書

出土遺物観察表(5)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
45	Ⅲ面構成	元豊通宝	初鋳1078年　北宋　行書
46	Ⅲ面構成	皇宋通宝	初鋳1038年　北宋　篆書
47	Ⅲ面構成	熙寧元宝	初鋳1068年　北宋　楷書
48	Ⅲ面構成	紹定通宝	初鋳1228年　南宋　楷書　背文，六
図18－1	溝2	土師器皿R種小型	口径8.0cm　底径5.9cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡褐色、海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
2	溝2	土師器皿R種小型	口径7.5cm　底径5.2cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡褐色、海綿骨芯・砂粒を含む
3	溝2	土師器皿R種大型	口径12.0cm　底径7.7cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は赤橙色、海綿骨芯・砂粒・白色粒を含む砂質土
4	溝2	土師器皿R種大型	口径12.2cm　底径7.8cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・白色粒を含む　内側に薄く煤付着
5	溝2	双六駒	直径1.9cm　厚さ0．55cm　骨角製　側面は丁寧に面取りし、両面は滑らかに磨かれている
6	溝2	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　胎土は灰褐色、白色粒少し含む　器表は茶色
7	溝2	砥石　中砥	遺存長(8.2)cm　幅3.2cm　厚さ3.1m　砥面4面　淡灰褐色～灰橙色　伊予産
8	溝2	串状木製品	長さ19.1cm　幅1.2cm　厚さ1.0cm　一端が斜めに削りが施されていろ
9	溝2	礎板	長さ18.6cm　幅10.6cm　厚さ4.4cm　粗い削りで径4cm弱の孔が貫通
図20－1	建物2	土師器皿R種小型	口径6.55cm　底径4.2cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は肌色、白色粒子・微砂粒・赤色粒子を含む精良土
図21－1	建物3	南部系山茶碗	口縁部片　胎土は灰褐色、砂質、白色粒含む
図22－1	柱穴列13 P.1	ヘラ状木製品	長さ18.6cm　幅1.8cm　厚さ1.2cm　両端が削られて尖っている　断面はかまぼこ型を呈す
2	柱穴列13 P.2	瀬戸　入子	口径(5.7)cm　胎土は淡灰色、緻密土
3	柱穴列13 P.2	砥石　中砥	遺存長(4.6)cm　遺存幅(4.3)cm　厚さ1.5m　砥面2面　黄灰白色　伊予産
4	柱穴列13 P.4	土師器皿R種小型	口径7.3cm　底径5.3cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
5	柱穴列15 P.2	常滑片口鉢Ⅱ類	底部片　輪積み成形、高台貼り付け　胎芯は暗灰色、長石・石英粒・黒色粒含む　器表は橙褐色　内底部は使用により摩滅　図25－10、図27－29と同一個体と思われる
図23－1	井戸1	土師器皿R種小型	口径(8.2)cm　底径(6.9)cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む　外底部黒く炭化
2	井戸1	土師器皿R種小型	口径7.65cm　底径5.4cm　器高1.65cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡褐色、白色粒子・微砂粒を少し含む精良土
3	井戸1	土師器皿R種小型	口径(7.45)cm　底径(3.9)cm　器高2.3cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒を含む　内・外面とも黒く炭化している部分あり
4	井戸1	土師器皿R種小型	底径3.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り　高台部分貼り付け　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色、精良土
5	井戸1	土師器皿R種大型	口径(12.4)cm　底径8.3cm　器高3.75cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・礫・で胃がん粒を含む
6	井戸1	土師器皿R種大型	口径12.0cm　底径8.0cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は赤橙色、海綿骨芯・礫を含む　内底面に油煤
7	井戸1	土師器皿R種大型	口径(12.15)cm　底径(7.5)cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む　内・外面とも薄く油煤付着
8	井戸1	土師器皿R種大型	口径12.3cm　底径8.1cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡茶色、赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒・砂粒を含む　内側の一部に薄く油煤付着
9	井戸1	土師器皿R種大型	口径(13.3)cm　底径(7.6)cm　器高3.25cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡橙色、白色粒子・微砂粒を少し含む精良土　内定部中央に径0.85cmの穿孔あり
10	井戸1	土師器皿R種大型	口径(13.7)cm　底径(8.8)cm　器高3.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色、白色粒子・微砂粒を少し含む精良土　器表は褐色　内底部中央に径0.8cmの穿孔あり
11	井戸1	瓦器　火鉢	口縁～体部片　輪積み成形　口径(36.4)cm　胎土・器表とも赤橙色、白色粒多く含む砂質土
12	井戸1	常滑　甕	胴部片　胎土は灰色、白色粒・砂粒含む　器表は灰褐色　叩き目(格子に斜線)あり
13	井戸1	常滑　甕	底部片　胎土は淡灰褐色、少量の白色粒と砂粒含む　器表は灰褐色　内底面に降灰
14	井戸1	常滑片口鉢Ⅱ類	底部片　胎土は淡灰色、長石粒・石英粒・礫・砂粒含む　器表は淡灰褐色　内底面は使用により摩耗
15	井戸1	竜泉窯青磁蓮弁文鉢	底部片　底径(10.5)cm　ロクロ成形、削り出し高台、畳付きのみ露胎　素地は明灰色～赤橙色　釉は水色、不透明　細かい貫入あり　細かい内底面に擦過傷
16	井戸1	曲物　側板	外径6.8～7.4cm　遺存高(2.6)cm　柄杓の部分または小型容器の胴部か
17	井戸1	折敷	長18.5cm　遺存幅(10.9)cm　厚0.1cm　柾目材
18	井戸1	折敷	長18.7cm　遺存幅(14.3)cm　厚0.1cm　柾目材　3辺のほぼ中央に小孔貫通
19	井戸1	折敷	長18．5cm　遺存幅(10.9)cm　厚0.09cm　柾目材　小孔貫通一箇所
20	井戸1	箸状木製品	長20.9cm　幅0.5cm　厚0.4cm　両口
21	井戸1	箸状木製品	長20.1cm　幅0.7cm　厚0.45cm　両口
22	井戸1	箸状木製品	長21.8cm　幅0.75cm　厚0.5cm　両口
23	井戸1	木製　馬形	長11.7cm　幅2.3cm　厚0.08cm　柾目材
図24－	井戸1	草履芯	長24.2cm　幅展開推測値(10.4)cm　厚0.25cm
25	井戸1	漆器　椀	底径(7.6)cm　輪高台　全体黒漆塗り　内面・外面とも朱漆手描きで植物・鶴・星型などが組み合わさった構成文　外底面に丁字形の線刻あり
26	井戸1	漆器　椀	胴部片　接合は出来なかったが図22－25と同一個体と思われる
27	井戸1	加工　角	長8.2cm　最大径3.1～3.7cm　根元の一部に切断痕　表面に複数の切り傷あり
28	井戸1	嘉祐通報	初鋳1056年　北宋　楷書
図25－1	土坑7	土師器皿R種小型	口径7.0cm　底径5.5cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部に薄く板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
2	土坑7	土師器皿R種小型	口径(7.35)cm　底径(5.3)cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部に薄く板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
3	土坑7	土師器皿R種小型	底径5.5cm　遺存器高(1.4)cm　円盤状に周囲を打ち欠く　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
4	土坑7	土師器皿R種中型	口径10.6cm　底径6.1cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は肌色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む精良土

出土遺物観察表（6）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
5	土坑7	土師器皿R種大型	口径11・9cm 底径7.0cm 器高3.25cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
6	土坑7	土師器皿R種大型	口径12.1cm 底径7.3cm 器高3.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・白色粒・泥岩粒を含む
7	土坑7	土師器皿R種大型	口径(11.8)cm 底径(7.3)cm 器高3.55cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・砂粒を含む
8	土坑7	瓦器 火鉢	口径(34.6)cm 底径(26.1)cm 器高9.1cm 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒・多量の砂粒を含む 胴部の上から三分の一くらいの位置に径約1.1cmの孔貫通
9	土坑7	瓦器 火鉢	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒・多量の砂粒を含む
10	土坑7	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形 胎土・器表とも橙褐色、長石・石英粒・黒色粒含む 内側下位は使用により摩滅 図22－5、図27－29と同一個体か
11	土坑7	常滑 甕	胴部片 胎土は灰色、白色粒含む 器表は灰褐色 叩き目(格子)あり
12	土坑7	白磁 口兀皿	口径(8.9)cm ロクロ成形 胎土は灰白色、微砂粒を含み緻密 釉は緑色を帯びた灰色、半透明 口縁部の内側と断面の一部に漆状黒色物質付着
13	土坑7	砥石 仕上砥	遺存長(5.4)cm 幅3.8cm 遺存厚(0.6)cm 緑色を帯びた明灰色 砥面1面 鳴滝(奥殿)産
14	土坑7	砥石 中砥	縦10.0cm 横(10.0)cm 厚9.7cm 灰色から乳白色 砥面3面
15	土坑7	漆器 皿	底径(4.9)cm 平高台 外底面も含め全体黒漆塗り 無文
16	土坑7	漆器 皿	底部片 無高台の皿の底部と思われる 全体黒漆塗り 内底面に朱漆手描きで、掻き出し線で不明文様
17	土坑7	円板状木製品	遺存長(14.5)cm 遺存幅(3.4)cm 厚0.9cm
18	土坑7	円板状木製品	復元径(8.0)cm 厚0.8cm 中央に丸い孔 紡輪か
19	土坑7	円板状木製品	遺存長(26.6)cm 遺存幅(6.5)cm 厚1.4cm 側面に木釘2本残る 桶などの底板か
図26－20	土坑7	棒状木製品	長19.6cm 幅1.3cm 厚1.45cm 一面は平ら、反対面は面取りし両端を尖らせ括れを施す
21	土坑7	棒状木製品	長20.3cm 幅0.9cm 厚1.0cm 断面は円形、一端を尖らせる
22	土坑6	土師器皿R種小型	口径(7.55)cm 底径(5.1)cm 器高1.55cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土 口縁部に油煤少量付着
23	土坑6	磨耗陶片	常滑甕または片口鉢胴部片使用 長4.6cm 幅7.6cm 厚1.3cm 胎土は橙褐色、石英粒・長石粒含む 断面の2辺と表面使用
24	土坑6	漆器 皿	口径(8.8)cm 底径6.4cm 器高1.4cm 輪高台 外側は底面も含め黒漆塗り、口縁部下に3箇所朱漆で撫子文を手描き 内面は黒漆の上に朱漆を重ね、無文
25	土坑9	土師器皿R種小型	口径(7.4)cm 底径(5.6)cm 器高1.65cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡赤橙色、赤色粒子・砂粒を含む 内・外面一部煤付着
26	土坑9	白磁 口兀皿	口径(8.6)cm 底径(5.8)cm 器高1.85cm 回転ロクロ 素地は灰白色、黒色微粒子含む 釉は淡灰緑色半透明 口縁部に煤付着
27	土坑12	南部系山茶碗	口縁部片 胎土は明灰色、砂粒・少量の白色粒含む
28	P.40	竜泉窯青磁蓮弁文碗	底部片 底径(4.2)cm ロクロ成形、削り出し高台、畳付きのみ露胎 素地は淡橙褐色 釉はオリーブ色、半透明 細かい貫入あり
29	P.50	土師器皿R種小型	口径7.55cm 底径5.2cm 器高1.55cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
30	P.50	土師器皿R種大型	口径(10.9)cm 底径(6.6)cm 器高3.4cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・白色粒子を含む精良土
31	P.50	土師器皿R種大型	口径11.9cm 底径7.8cm 器高3.35cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・白色粒子を含む
32	P.50	瓦器 火鉢	口縁部片 輪積み成形 胎土は赤灰色、白色粒・多量の砂粒を含む
33	P.50	常滑片口鉢Ⅰ類	底部片 底径(12.1)cm 輪積み成形、高台貼り付け 胎土は灰色、石英粒・長石・砂粒含む 内底面使用により磨耗
34	P.50	白色系土師器皿T種大型	口縁部片 胎土は赤色粒子を僅かに含む黄白色粉質精良土
35	P.52	下駄 歯	遺存長(5.8)cm 遺存幅(7.9)cm 最大厚2.3cm
36	P.54	常滑片口鉢Ⅰ類	口径(30.2)cm 底径(10.3)cm 器高11.8cm 輪積み成形 胎土は灰色、礫・砂粒、大粒の石英・長石多く含む 内面の中位以下は使用のため磨耗
37	P.54	土師器皿R種大型	口径12.4cm 底径7.6cm 器高3.4cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒を含む
38	P.57	土師器皿R種小型	口径6.8cm 底径5.2cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
39	P.57	箸状木製品	長24.7cm 幅0.65cm 厚0.55cm 両口
図27－1	Ⅳ面	土師器皿T種小型	口径(9.15)cm 器高1.7cm 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯を僅かに含む精良土
2	Ⅳ面	土師器皿R種小型	口径(6.7)cm 底径(4.0)cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、海綿骨芯・砂粒を少し含む 内・外面とも煤付着
3	Ⅳ面	土師器皿R種小型	口径7.55cm 底径5.4cm 器高1.65cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡黄褐色、赤色粒子・白色粒子・多量の砂粒・泥岩粒を含む砂質土
4	Ⅳ面	土師器皿R種小型	口径7.35cm 底径4.85cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
5	Ⅳ面	土師器皿R種小型	口径7.85cm 底径6.15cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
6	Ⅳ面	土師器皿R種小型	口径(8.0)cm 底径(5.6)cm 器高1.7cm 回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、少量の微砂粒を含む精良土
7	Ⅳ面	土師器皿R種小型	口径8.1cm 底径5.0cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む
8	Ⅳ面	土師器皿R種小型	口径(7.1)cm 底径(6.0)cm 器高1.7cm 回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・砂粒を含む

出土遺物観察表(7)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
9	Ⅳ面	土師器皿R種小型	口径7.15cm 底径5.2cm 器高1,4cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯を少し含む精良土
10	Ⅳ面	土師器皿R種小型	口径7.6cm 底径5.1cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・白色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む
11	Ⅳ面	土師器皿R種小型	口径(7.5)cm 底径(4.8)cm 器高1.3cm 回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
12	Ⅳ面	土師器皿R種小型	口径7.55cm 底径5.5cm 器高1.85cm 回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む砂質土 口縁部に油煤付着
13	Ⅳ面	土師器皿R種小型	口径(8.4)cm 底径(5.7)cm 器高2.2cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・砂粒・海綿骨針・泥岩粒を含む 口縁部に2箇所油煤付着
14	Ⅳ面	土師器皿R種中型	口径9.9cm 底径5.45cm 器高2.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・微砂粒・白色粒子を含む
15	Ⅳ面	土師器皿R種大型	口径(11.6)cm 底径(7.0)cm 器高3.2cm 回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・白色粒子少しを含む精良土
16	Ⅳ面	土師器皿R種大型	口径(11.7)cm 底径(7.2)cm 器高2.9cm 回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・微砂粒を少し含む精良土 内底部中央付近に径約2.5mmの穿孔1箇所あり
17	Ⅳ面	土師器皿R種大型	口径(12.6)cm 底径7.4cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色、赤色粒子・白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
18	Ⅳ面	土師器皿R種大型	口径(13.3)cm 底径(8.4)cm 器高3.65cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡赤橙色、白色粒子・泥岩粒・微砂粒・やや多めの赤色粒子を含む
19	Ⅳ面	土師器皿R種大型	口径(12.15)cm 底径(8.55)cm 器高3.4cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・白色粒子を含む砂質土 内底部に黒灰色の物質付着
20	Ⅳ面	土師器皿R種大型	口径12.15cm 底径7.9cm 器高3.25cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒・大願粒を含む砂質土
21	Ⅳ面	土師器皿R種大型	口径12.25cm 底径7.6cm 器高2.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は赤橙色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒・泥岩粒を含む
22	Ⅳ面	土師器皿R種大型	口径12.3cm 底径8.4cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部僅かに板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・白色粒子を含む砂質土
23	Ⅳ面	土師器皿R種大型	口径(12.05)cm 底径(8.0)cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
24	Ⅳ面	瓦器 火鉢	口縁部片 輪積み成形 胎土は赤灰色、白色粒・多量の砂粒を含む
25	Ⅳ面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒少し含む 器表は茶色
26	Ⅳ面	常滑片口鉢Ⅱ類	底部片 底径(15.0)cm 輪積み成形 胎土は橙灰色、長石・石英粒を多く含む 器表は明茶色 内側中位以下は使用により磨耗する
27	Ⅳ面	南部系山茶碗	口縁部片 胎土は淡灰褐色色、白色粒含む
28	Ⅳ面	常滑片口鉢Ⅰ類	底部片 底径(12.7)cm 輪積み成形、高台貼り付け 胎土は灰色、長石・石英粒・砂色粒多く含む 内底部は使用により摩耗 図23－10、図25－29と同一個体と思われる
29	Ⅳ面	常滑片口鉢Ⅱ類	底部片 底径ア(10.7)cm 輪積み成形、高台貼り付け 胎芯は暗灰色、長石・石英粒・黒色粒含む 器表は橙褐色 内底部は使用により摩滅 図22－5、図25－10と同一個体と思われる
30	Ⅳ面	磨耗陶片	常滑甕片使用 長6.0㎝ 幅8.6cm 厚1.5cm 胎土は灰色、石英粒・長石粒少し含む 断面の2辺使用
31	Ⅳ面	白磁口はげ盤	口径(14.3)cm ロクロ成形 素地は灰白色 釉は水色を帯びた灰色、透明 口縁部は釉拭う 内側は口縁部下に2本の線と花弁らしき文様型押し
32	Ⅳ面	白磁 口はげ	口縁片 ロクロ成形 素地は明灰色 釉は淡灰色、不透明 口縁部は釉拭う
33	Ⅳ面	白磁稜花鉢	口縁片 素地は白色 釉は緑色を帯びた水色、透明 口縁部は釉拭う
34	Ⅳ面	竜泉窯青磁蓮弁文碗	口縁片 素地は明灰色、黒色微粒子含む 釉は水色、不透明で厚く掛かる
35	Ⅳ面	竜泉窯青磁蓮弁文碗	口縁～胴部片 素地は淡灰色 釉は緑灰色、半透明 外側に大き目の貫入あり
36	Ⅳ面	竜泉窯青磁折縁鉢	口縁部片 素地は淡灰色 釉は水色、不透明で厚く掛かる 内側に蓮弁状の陰刻を配す
37	Ⅳ面	高麗青磁 花盆	口縁部片 鉢型か 素地は灰色で緻密 釉は水色、不透明で薄く掛かり、表面はつやがない 貫入あり 外尾の下に側に象嵌を施す 口縁下に白土の条線1本、その下に白・黒交互の条線2本、その下は白土部分を背景に黒土で蓮弁状の文様が連なる
38	Ⅳ面	青白磁 梅瓶	底径9.0cm ロクロ成形 素地は明灰色、黒色微粒子含む 釉は水色、不透明 外側は高台上まで釉が厚く掛かり、胴部下位に複数の沈線が巡る 内側は薄く塗られる
39	Ⅳ面	咸平元寶	初鋳998年 北宋 楷書
40	Ⅳ面	天禧通寶	初鋳1017 北宋 楷書
41	Ⅳ面	皇宋通寶	初鋳1017 北宋 楷書
42	Ⅳ面	熙寧元宝	初鋳1068年 北宋 楷書
43	Ⅳ面	元豊通宝	初鋳1078年 北宋 篆書
44	Ⅳ面	元豊通宝か	初鋳1078年 北宋 篆書 周縁部を削った加工銭
45	Ⅳ面	元祐通宝	初鋳1086年 北宋 篆書
46	Ⅳ面	元祐通宝	初鋳1086年 北宋 行書
47	Ⅳ面	元祐通宝か	初鋳1086年 北宋 行書
48	Ⅳ面	政和通宝	初鋳1111年 北宋 楷書
49	Ⅳ面	紹聖元寶	初鋳1094年 北宋 行書
50	Ⅳ面	砥石 中砥	遺存長(10.7)cm 横6.8cm 厚4.3cm 黄灰色から赤灰色 砥面3面 3片に割れた個体を漆で接着したものと思われる
51	Ⅳ面	漆器 皿	無高台 外側は底面も含め黒漆塗り、内面は黒漆に朱漆で、手描き文(車輪または扇の意匠化か)
図28－1	Ⅴ面上	円盤状土製品	径(6.0)㎝ 最大厚1.7cm 胎土は橙褐色、微砂粒・少し海綿骨芯・泥岩粒を含む
2	Ⅴ面上	白磁 口兀皿	口縁片 ロクロ成形 素地は明灰色 釉は緑色を帯びた淡灰色、不透明 口縁部は釉拭う
3	Ⅴ面上	竜泉窯青磁蓮弁文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰白色 釉は水色、半透明
4	Ⅴ面上	不明木製品	径5.8cm 最大厚2.4cmの円筒状
5	Ⅴ面上	箸状木製品	長21.5cm 幅0.8cm 厚0.6cm 両口
6	Ⅴ面上	棒状木製品	長22.7cm 幅1.2cm 厚1.0cm 一端は斜めに切断、他端はやや薄く細く削られている
図29－1	建物4 P.1	砥石 中砥	遺存長(6.2)cm 横4.1cm 厚3.8cm 黄灰白色 砥面4面

出土遺物観察表（8）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
2	土坑13	土師器皿R種小型	口径8.35cm 底径6.8cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む 口縁部に油煤付着
3	土坑13	土師器皿R種小型	口径8.3cm 底径6.45cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡茶褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む 口縁部に油煤付着
4	土坑13	丸瓦	遺存長(25.0)cm 幅15.6cm 厚2.8cm 胎土は白色粒を少し含む肌理の細かい灰色土 凸面は縄目、凹面は布目 永福寺Ⅰ期
5	P.73	元符通宝か	初鋳1098年 北宋 篆書
図30－1	溝3	土師器皿R種小型	口径8.0cm 底径5.1cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡赤橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
2	溝3	土師器皿R種小型	口径8.0cm 底径6.0cm 器高1.3cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
3	溝3	土師器皿R種小型	口径7.7cm 底径5.4cm 器高1.4cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・やや多い砂粒を含む
4	溝3	土師器皿R種小型	口径8.3cm 底径6.4cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む 器表の一部と胎芯は黒灰色
5	溝3	土師器皿R種大型	口径(11.3)cm 底径(7.8)cm 器高3.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
6	溝3	串状木製品	遺存長(18.1)cm 幅1.2cm 厚0.8cm
7	溝3	棒状木製品	長17.7cm 幅2.8cm 厚1.1cm 一端が炭化している 縁を丸く面取り
8	溝3	箸状木製品	長19.2cm 幅0.6cm 厚0.45cm 両口
9	溝3	箸状木製品	長20.5cm 幅0.6cm 厚0.5cm 両口
10	溝4内木器層	不明木製品	長3.3cm 幅3.8cm 厚1.1cm
11	溝4内木器層	串状木製品	長17.1cm 幅1.0cm 厚0.6cm 一端は削りにより細く尖り、他端は丸く削る
12	溝4	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒・砂粒含む
13	溝4	丸瓦	遺存長(10.4)cm 遺存幅(12.4)cm 厚2.4cm 胎土は肌理の細かい灰色土で白色粒・砂粒・礫少し含む 凸面は縄目のちナデ消し、線状の傷あり 凹面は布目 永福寺Ⅰ期
14	溝4	平瓦	遺存長(9.0)cm 遺存幅(18.5)cm 厚2.6cm 胎土は肌理の細かい明灰色土で白色粒・砂粒を少し含む 凸面は縄目 凹面は縄目後ナデ消し 永福寺Ⅰ期
15	溝4	不明金属製品	長8.0cm 最大幅1.0cm 厚0.3cm くの字型に曲がっている 一端は釘の頭状に折れ曲げ、他端は刃状にやや薄くなっている
16	溝4	不明金属製品	遺存長(6.8)cm 最大幅1.1cm 厚0.3cm 図28－15と同字製品の中間部分と思われる
17	溝4	串状木製品	長35.7cm 幅1.5cm 厚0.8cm
18	溝4	柄杓	底板 直径10.0cm 厚さは一様ではなく中央で0.6cm周縁部は薄め 側板は二重 遺存最大幅2.0cm 柄は長20.0cm 幅1.4cm 厚0.9cm
19	溝4	連歯下駄	遺存幅(8.8)cm 高さ5.2cm
20	P.80	土師器皿R種小型	口径7.6cm 底径5.8cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
図32－1	Ⅵ面泥岩面上	土師器皿R種小型	口径7.65cm 底径5.8cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色、白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む 器表の一部炭化
2	Ⅵ面泥岩面上	土師器皿R種極小型	口径(4.7)cm 底径(3.7)cm 器高0.9cm 回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色、白色粒子・砂粒を含む
3	Ⅵ面泥岩面上	土師器 甕	口頸部片 胎土は淡赤橙色、赤色粒子・白色粒子・多量の砂粒含む砂質土
4	Ⅵ面泥岩面上	土製 円盤	土師器皿R種の底部を転用 直径2.4cm 厚0.9cm 胎土は淡橙色、赤色粒子・砂粒を含む
5	Ⅵ面泥岩面上	砥石 中砥	遺存長(7.2)cm 横6.5cm 厚3.7cm 黄灰白色 砥面4面 伊予産
6	Ⅵ面泥岩面上	箸状木製品	長19.3cm 幅0.55cm 厚0.4cm 両口 両端炭化
7	Ⅵ面泥岩面上	箸状木製品	長23.5cm 幅0.75cm 厚0.9cm 両口
8	Ⅵ面泥岩面上	土師器皿T種小型	口径(9.2)cm 器高(2.55)cm 手ずくね後口縁部・内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒を含む
9	Ⅵ面泥岩面上	土師器皿R種小型	口径(7.65)cm 底径(5.5)cm 器高1.4cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
10	Ⅵ面泥岩面上	北部系山茶碗	口縁～胴部片 胎土は明灰褐色、堅緻
11	Ⅵ面泥岩面上	板草履芯	長22.7cm 幅展開推測値9.7cm 厚0.25cm 植物圧痕残る
12	Ⅵ面溝5上	ヘラ状木製品	遺存長(19.5)cm 幅1.1cm 厚0.7cm
13	Ⅵ面溝5上	不明木製品	長17.8cm 幅1.3cm 厚0.8cm 角棒状で一端は斜めに削られる 小孔2箇所貫通
14	Ⅵ面溝5上	箸状木製品	長22.0cm 幅0.6cm 厚0.55cm 両口
15	Ⅵ面溝5上	箸状木製品	長22.9cm 幅0.75cm 厚0.45cm 両口
16	Ⅵ面溝5上	箸状木製品	長23.8cm 幅0.9cm 厚0.5cm 両口
17	Ⅵ面溝5上	箱部材？	遺存長(11.8)cm 幅5.0cm 厚0.85cm 板目材 箱状のものの一部か 木釘5本残存 本体のない釘孔1箇
18	溝5	土師器皿T種小型	口径(8.8)cm 器高2.0cm 手づくね後口縁部、内底部ナデ 胎土は淡黄褐色、白色粒子・砂粒を含む
19	溝5	土師器皿R種小型	口径7.5cm 底径5.9cm 器高1.4cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
20	溝5	土師器皿R種小型	口径7.8cm 底径5.0cm 器高1.3cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡赤橙色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む 内・外面の一部に油煤付着
21	溝5	土師器皿R種小型	口径(8.7)cm 底径(8.1)cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り 胎土は淡橙色、赤色粒子・白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む

出土遺物観察表（9）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
22	溝5	土師器皿R種大型	口径(12.1)cm　底径(8.0)cm　器高2.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡赤橙色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む　内底面に油煤付着
23	溝5	常滑　甕	胴部片　胎土は灰色、白色粒含む　器表は暗紫色　叩き目(格子)あり
24	溝5	平瓦	遺存長(9.5)cm　遺存幅(11.2)cm　厚2.25cm　胎土は肌理の細かい明灰色土で白色粒・砂粒を少し含む　凸面は縄目　永福寺Ⅰ期
25	溝5	平瓦	遺存長(12.8)cm　遺存幅(13.0)cm　厚1.8cm　胎土は肌理の細かい灰色土で白色粒を少し含む　凸面は縄目後ナデ消し　凹面は布目、糸きり痕　永福寺Ⅰ期
26	溝5	平瓦	遺存長(17.2)cm　遺存幅(9.6)cm　厚2.3cm　胎土は肌理の細かい灰色土で白色粒を少し含む　凸面は縄目　凹面は糸きり痕　永福寺Ⅰ期
27	溝5	棒串状木製品	遺存長(11.0)cm　幅0.9cm　厚0.65cm
28	溝5	円板状木製品	復元径(16.8)cm　厚0.6cm　柾目材
図33－29	溝5	箸状木製品	長23.3cm　幅0.7cm　厚0.4cm　両口
30	溝5	箸状木製品	長21.9cm　幅0.6cm　厚0.5cm　両口
31	溝5	草履芯	遺存長(20.1)cm　幅9.1cm　厚0.3cm　植物圧痕残る
32	溝5	折敷	長24.3cm　遺存幅(8.9)cm　厚0.1cm　小孔1箇所
33	溝5	折敷	長24.5cm　遺存幅(12.4)cm　厚0.1cm　小孔1箇所
34	最終深堀	土師器皿R種小型	口径7.8cm　底径6.8cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒・泥岩粒を含む
35	最終深堀	平瓦	遺存長(9.9)cm　遺存幅(13.7)cm　厚1.8cm　胎土は肌理の細かい灰色土で白色粒を含む　凸面は縄目　凹面は糸きり痕　永福寺Ⅰ期
36	最終深堀	箸状木製品	長24,75cm　幅0.6cm　厚0.4cm　両口
37	最終深堀	箸状木製品	長18.6cm　幅0.8cm　厚0.4cm　両口
図34－1	遺構外	土師器皿R種極小型	口径5.2cm　底径2.7cm　器高1.0cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・白色粒子・やや多目の砂粒を含む
2	遺構外	白色系土師器皿R種大型	口縁部片　胎土は黄灰白色
3	遺構外	瀬戸　鉢	口径(18.3)cm　底径(8.0)cm　器高8.0cm　ロクロ成形　底面糸切り　胎土は淡黄灰色、白色粒子・砂粒を含む　内面は使用により磨耗　口縁部から外側下位にかけて灰釉漬け掛け　体部外側下部に目跡あり
4	遺構外	北部系山茶碗	底部片　底径(4.1)cm　ロクロ成形　胎土は明灰褐色、堅緻　高台部に籾殻痕あり
5	遺構外	渥美　壺	底径(9.8)cm　輪済み成形　胎土・器表は灰色
6	遺構外	竜泉窯青磁蓮弁双魚文折縁鉢	口縁～胴部片　底径(5.9)cm　素地は明灰色　釉は緑灰色失透、気泡含む　大き目の貫入少し入る　内底面に魚文貼り付け　削り出し高台、畳付のみ露胎
7	遺構外	元豊通宝	初鋳1078年　北宋　篆書
8	遺構外	熙寧元宝	初鋳1068年　北宋　楷書
9	遺構外	砥石　中砥	遺存長(8.8)cm　幅4,2cm　厚3.0cm　黄灰白色　砥面2面　伊予産
10	遺構外	楕円硯	遺存長(2.8)cm　遺存幅(8.3)cm　遺存厚(1.2)cm　灰色　高島硯　惣生地　硯面は四葉か
11	遺構外	砥石　仕上砥	遺存長(6.6)cm　幅3.1cm　厚0.7cm　明黄灰色　砥面2面　鳴滝産
12	遺構外	円板状木製品	遺存長(13.8)cm　遺存幅(2.3)cm　厚0.8cm　柾目材
13	遺構外	木製　独楽	径(5.0)cm　高さ2.2cm　中央に心棒の通る小孔(径0.4cm)貫通　外側は細かい削り、内側を同心円状に三

第四章　まとめと考察

1．遺構の変遷と年代

1 期

最終面であるⅥ面が相当する。北西～南東に主軸方位を持つ幅広の溝、もしくは池状の落ち込みがあるが、完掘できなかったので、何であるかは不明である。面の年代は 13 世紀前半。溝の方位角は N－56°－W で、現在の浄妙寺諸堂の主軸方位が N－34°－E であるところから、いちおう直交していることを指摘しておきたい。ただし、この 13 世紀前半期には「浄妙寺」は存在せず、あってとしても「極楽寺」という名の寺院であった可能性が高いが、もとよりその頃からの伽藍主軸が現在まで引き継がれているとも考えにくいので、ここでは事実の指摘のみにとどめる。

建物も検出されておらず、性格はつかみがたい。

2 期

第Ⅴ面が相当する。町並の 1 区画の北東角であろう。年代は 13 世紀第 2 四半期～中葉を充てたい。掘立柱建物が区画溝とほぼ主軸方位を同じくして建っている。建物の南北柱間距離は約 193 ㎝で、これは鎌倉時代中期の 13 世紀第 2 四半期以降一般的になる数値の 198 ㎝前後にいくらか足りないが、一部分だけの検出であることがその理由かもしれない。柱穴はいずれも礎板を持ち、この点も時代的特徴を備えているといえる。

すぐ西側の小路の軸方位が N－23°－E で、検出された建物や溝が N－27°－E なので、浄妙寺よりも稲荷小路のほうに近いといえる。名称は措くにせよ、この小路がこの頃出現した可能性は否定できない。なお、本期以後、遺構主軸方位はこれを踏襲する。すなわち、当地点一帯の歴史的変遷の中で、本期が一つの画期であることが示されている。

遺構の全体的性格としては、かなりしっかりした建物であるが、これが若宮大路一帯で検出される都市型の小規模住居なのか、もっと高位のたとえば武士住居のようなものかはわからない。溝等の区画標識と遠くない位置に方位を合わせて収まっている点は、前者であることをどことなくうかがわせる、といえば印象に頼りすぎだろうか。

3 期

Ⅳ面下層面を充てる。北側の溝が消えて地境が広がり、ほぼ同一の主軸を持つ掘立柱建物が次々と建て替えられる。井戸も備わる。この期をもって本遺跡はその盛行期を迎える。第三章で述べたように、次述のⅣ面上層面とは遺構のあり方が全く異なり、同じく「Ⅳ面」とはしながらもその性格は大きく異なるため、ここでは期を独立させて扱う。年代は大きく 13 世紀後半、鎌倉時代後期としておきたい。

建物範囲には土坑や溝等が含まれているが、付帯施設としても性格は不明。柱間はおおむね 2m という鎌倉時代後期に特有の数値を見せる。

この建物の住民がどういう性格であったかを、遺物からはかることは難しい。しかし前代よりも区画が拡充されていること、若宮大路沿いによく検出される小規模都市住宅に特有の、板囲いや囲炉裏などの施設が見られないこと、等から武士住居と推定しておく。

4 期

Ⅳ面上層面が相当する。前代 3 期にみられた複数の掘立柱建物はなくなり、平坦な面に木材等遺物の散乱する状況になる。前述のように、同じⅣ面とはしたが下層面とは明らかに性格を異にする。年代は

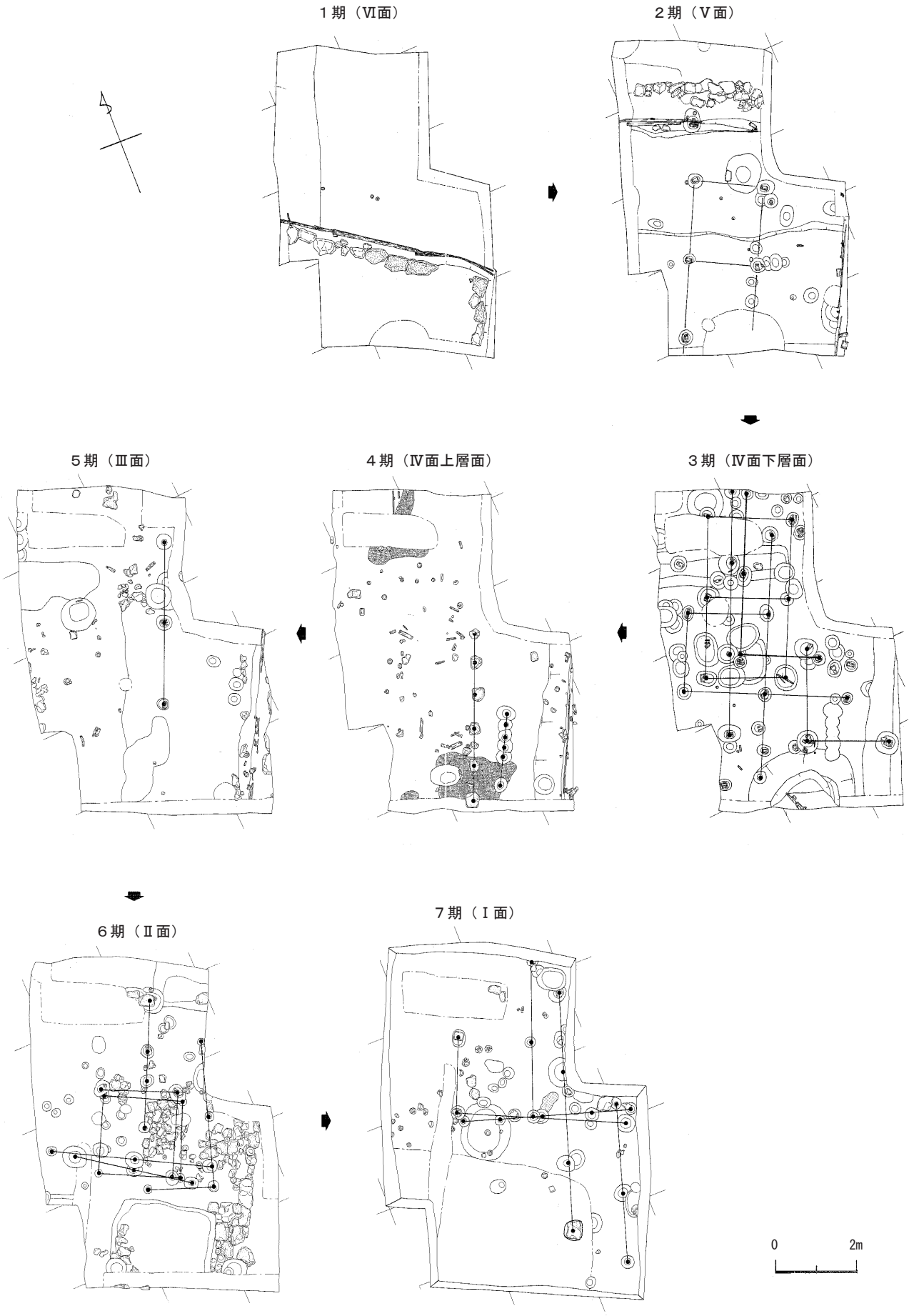


図35　遺構変遷図

Ⅲ面との相対的な関係も考慮して、13 世紀第 3 四半期～第 4 四半期を充てたい。

南北に直線的に平たく割った石を並べ、縁のようなものの束とする。石列西側は板材や角材、土器皿等の散乱する、若宮大路周辺で多く検出される小規模都市型住居と同様の状況を呈する。前代の武士住宅から住民が変わったことは明白であり、遺構の性格としては、おそらくこれも都市住民の小規模住宅とみたい。石列の東側には 5 つほど連接した小穴が石列に平行して存在する。おそらく石列と連接する小穴列の二条の列はここが建物の前面であることを示唆しており、とすれば調査区外の東方に何らかの入口施設を想定しても的外れではあるまい。遺構主軸方位は西側の稲荷小路に平行している。

5 期

Ⅲ面が相当する。地形面上に広がりの掘めない 1 列の柱穴列があり、西側には土器皿等、遺物の散乱した状況が見られる。しかしこれだけでは情報に乏しく、面の性格は把握しがたい。年代は前代のⅣ面上層面との関係から、13 世紀第 4 四半期～14 世紀初頭に位置付けられよう。

次述の 6 期に東側に出現した溝が、本期から木組を持ちはじめている。

6 期

Ⅱ面が相当する。再びこの一帯に建物が建てられる時期である。面は大型凝灰岩とローム土で堅く構築され、建物とおそらく組み合わさって方形の浅い落ち込みが備わる。調査区東側にはこれまでの木組ではなく、石敷きの切れ目という形で敷地境界が示される。年代は 13 世紀末～14 世紀前半、すなわち鎌倉時代末期～南北朝時代初期としておきたい。

性格については、これも判断しにくいが、掘立柱建物が調査区外に拡がっていく可能性は高く、都市型住居というよりもっと広範な、武士住居や寺院の一隅と捉えたい。掘立柱建物や柱穴列の多くは前代までの主軸方位を維持しており、継続性がうかがえる。しかしその一方で、1 棟とはいえ（「柱穴列 10」）7 期に共通する方位を持っている点は、過渡期と評価することも可能かもしれない。

7 期

Ⅰ面が調査で確認できた当地点の最後の生活面である。面上の出土遺物には、14 世紀第 2 四半期以後 15 世紀前半までのものが含まれている。南北朝時代以後の中世後期にすでに入っているとみてよい。遺構面の性格については判断材料を欠く。

建物主軸方位はこれまでと異なり、いくらか西に傾く。すなわちこの時点であらたな基軸が出現したことになる。また、鎌倉時代中期に始まった調査区東壁際の溝は、本期には消滅している。このような変化について、東側のほとんど隣地といってよい場所にこの頃出現する鎌倉府の影響によるものかどうか、その主軸方位や地割は不明ながら、視野に入れておくべきと考える。

面上の包含層には大量の炭化物が何層か含まれており、それぞれが南北朝～室町時代のいくつかの動乱に対応する可能性は高いと考えるが、具体的には不明である。

２．まとめ

以上みてきたように、本地点の遺跡は 13 世紀前半の鎌倉時代前期に始まり、14 世紀前半の室町時代前期に終わることが確認できた。ほぼ 200 年間のうちに営為が集中していることになる。しかし、以上の年代比定が妥当であれば、さらに次の点が指摘できる。

本遺跡では実に 1 期から 6 期までが鎌倉時代に属し、南北朝以降は最後の 7 期のみしか相当しない。鎌倉時代にはしきりに生活面の更新があったのに対し、14 世紀第 2 四半期～15 世紀前半のほぼ 1 世紀の間はほとんどそれがなかったということになる。これは本地点に限らず、市内東北部でしばしば観察

できる現象である。

これが何を意味するのか、慎重でなければならないが、地形（じぎょう）による生活面の更新が「都市性」の一つの目安であるとする筆者の立場でいえば、鎌倉時代が終われば鎌倉は「都市性」を失った、と評価することもできよう。

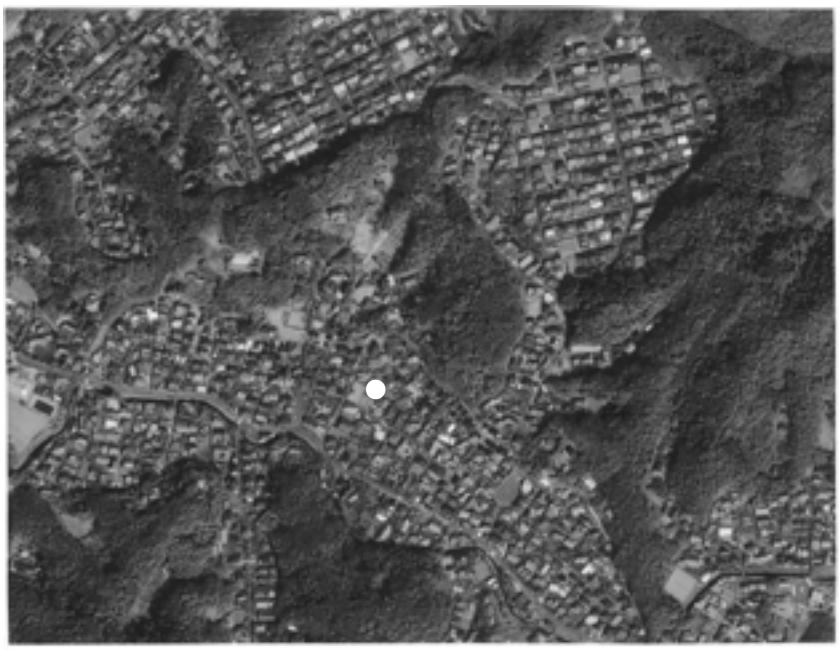
2 期と 7 期に観察される建物主軸方位の変化は、このときがこの一帯における画期であったことを示している。前者は稲荷小路に主軸が一致することから、稲荷社の出現にともなう町構造の改変があった可能性を示唆する。後者は先述のように、隣地の鎌倉府の設置に年代的に符合することから、その影響も視野に入れておくべきだろう。

（馬淵）

引用・参考文献（本報全体に共通）

赤星直忠 1959　『鎌倉市史　考古編』吉川弘文館
阿部正道 1958　「鎌倉の古道〈後篇〉」『鎌倉国宝館論集』第 2 集
大河内勉 1996　「浄妙寺旧境内遺跡　浄明寺三丁目 6 番地 3 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12　鎌倉市教育委員会
川副武胤・貫達人 1959　『鎌倉市史　社寺編』吉川弘文館
川副武胤・貫達人 1980　『鎌倉廃寺事典』有隣堂
斎木秀雄ほか 2007　『大倉幕府周辺遺跡発掘調査報告書―雪ノ下 4 丁目 581 番 5 地点―』有限会社　鎌倉遺跡調査会
高柳光寿 1959　『鎌倉市史　総説編』吉川弘文館
西岡芳文 2001　「六浦津のはじまり」西岡ほか『図説　かなざわの歴史』金沢区制五十周年記念事業実行委員会
野口実 1993　「頼朝以前の鎌倉」『古代文化』45　財団法人古代学協会
野本賢二ほか 1999　「横小路周辺遺跡　二階堂字横小路 93 番 11 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15　鎌倉市教育委員会
馬淵和雄 1993　「大倉幕府周辺遺跡群　二階堂字荏柄 38 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9　鎌倉市教育委員会
馬淵和雄 1994　「武士の都－その成立と構想をめぐって－」『中世の風景を読む 2　都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社
馬淵和雄 1998　「大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下四丁目 620 番 5 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14　鎌倉市教育委員会
馬淵和雄 1998　『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社
馬淵和雄 1999　『大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下四丁目 620 番 5 地点』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
馬淵和雄ほか 2002　『杉本寺周辺遺跡　二階堂字杉本 912 番 1 ほか地点発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

図版1



1．調査地点鳥瞰

2．浄妙寺背後から調査地点を方向を望む（矢印の下）

3．稲荷小路（調査地点は奥右手）

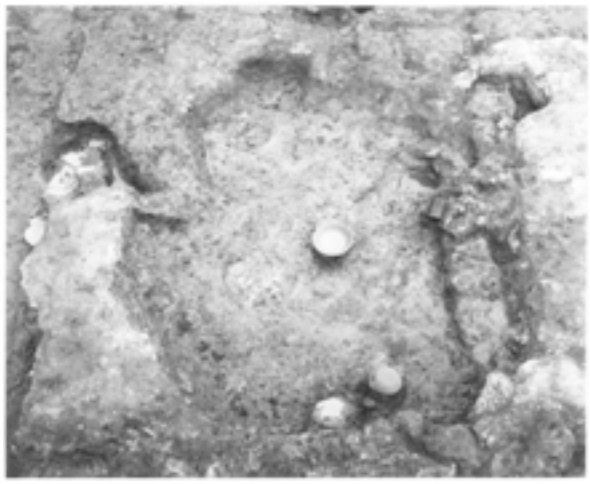
図版2

1．Ⅰ面全景（西から）

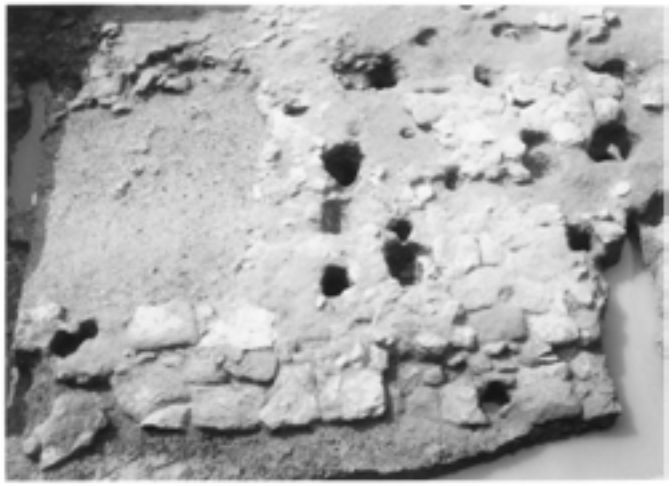
4．Ⅱ面全景（南から）

2．Ⅰ面全景（東から）

5．土坑14（西から）

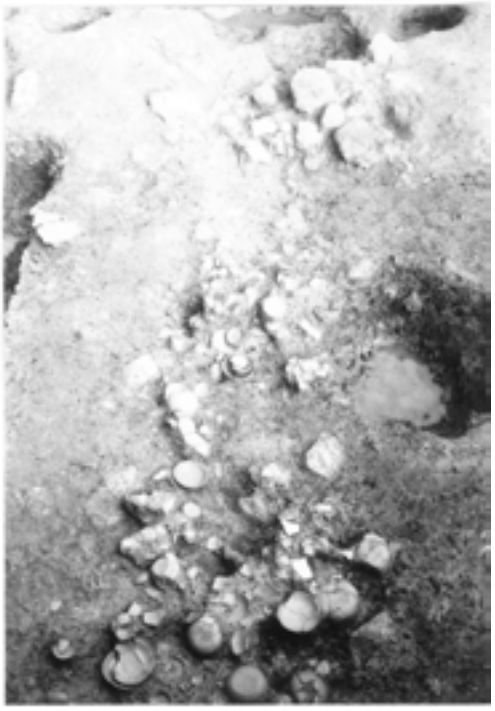


3．土坑１（南から）



6．土坑14東側石敷き（東から）

1．漆布状物質が付着した常滑片

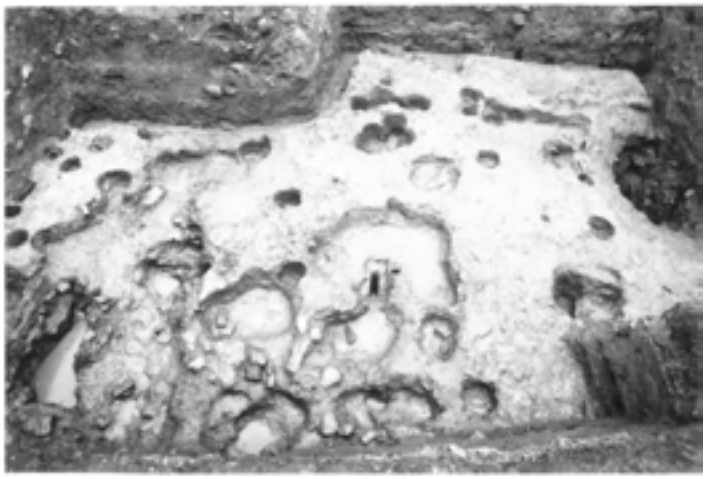


4．土師器集中部２（西から）

2．Ⅲ面全景（西から）

5．Ⅳ面下層面全景（南から）

3．溝１（西から）



6．Ⅳ面下層面全景（西から）

図版4

1．溝２・柱穴列12・石列（東から）

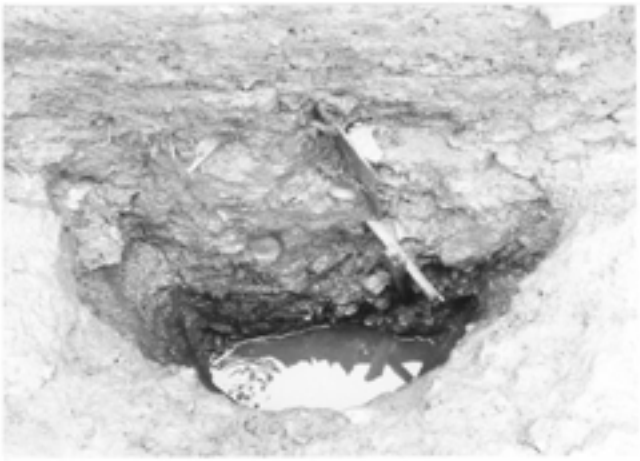
3．溝２・柱穴列12・石列（南から）

2．溝２・柱穴列12・石列（西から）

5．溝２内常滑集中部（西から）

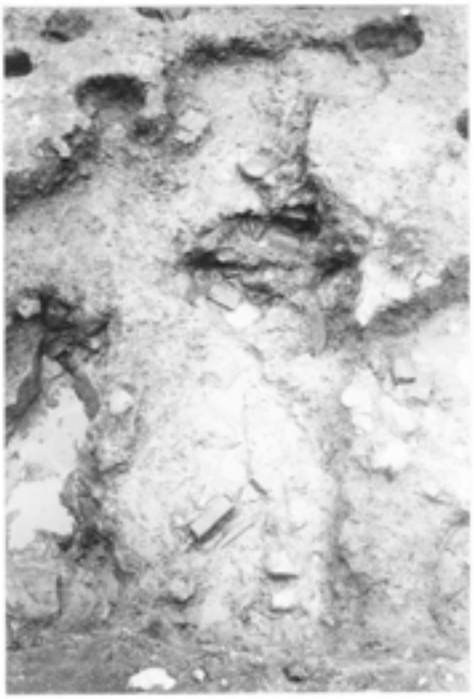
4．溝２（南から）

6．溝２（東から）



1．井戸１（北から）

2．井戸１（北東から）



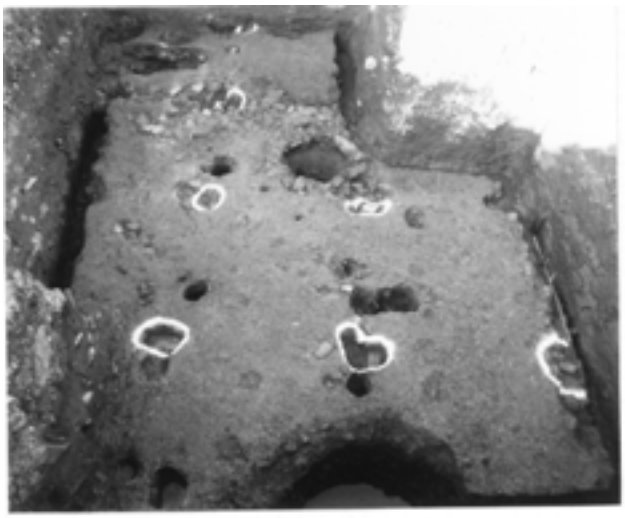
3．土坑７（西から）

5．Ｖ面上層西全景（東から）

4．土坑６内検出の柱・礎板（東から）

6．Ｖ面上層面全景（南から）

図版6



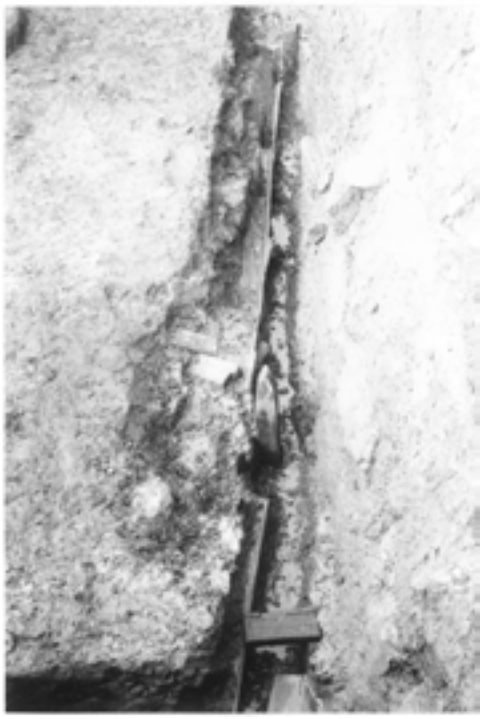
1．建物５（南から）

4．Ｖ面全景（南から）

2．同前（東から）

5．溝４（東から）

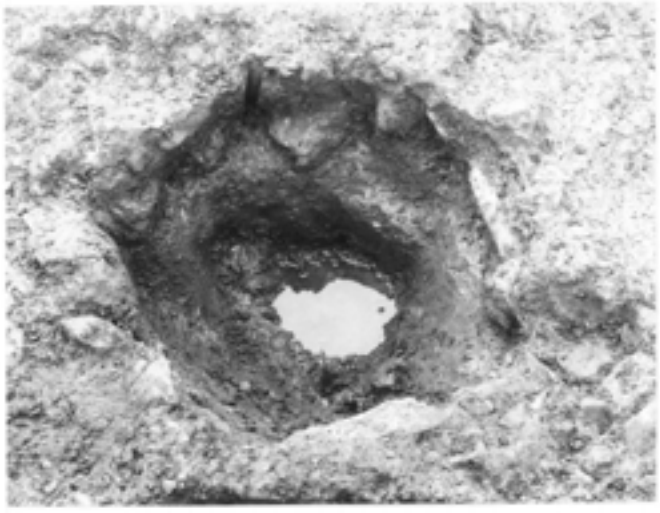
3．Ｖ面全景（西から）



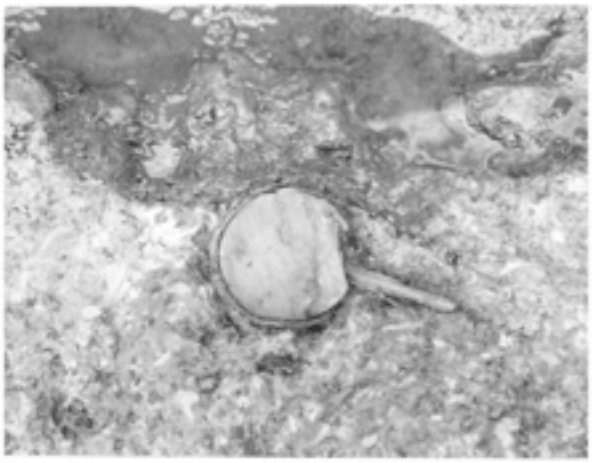
6．溝３（南から）

1．溝４側板（北から）

2．溝４内柱穴・束柱（北から）



3．土坑13（北東から）



4．柄杓出土状況（北壁際）

5．Ⅵ面全景（西から）

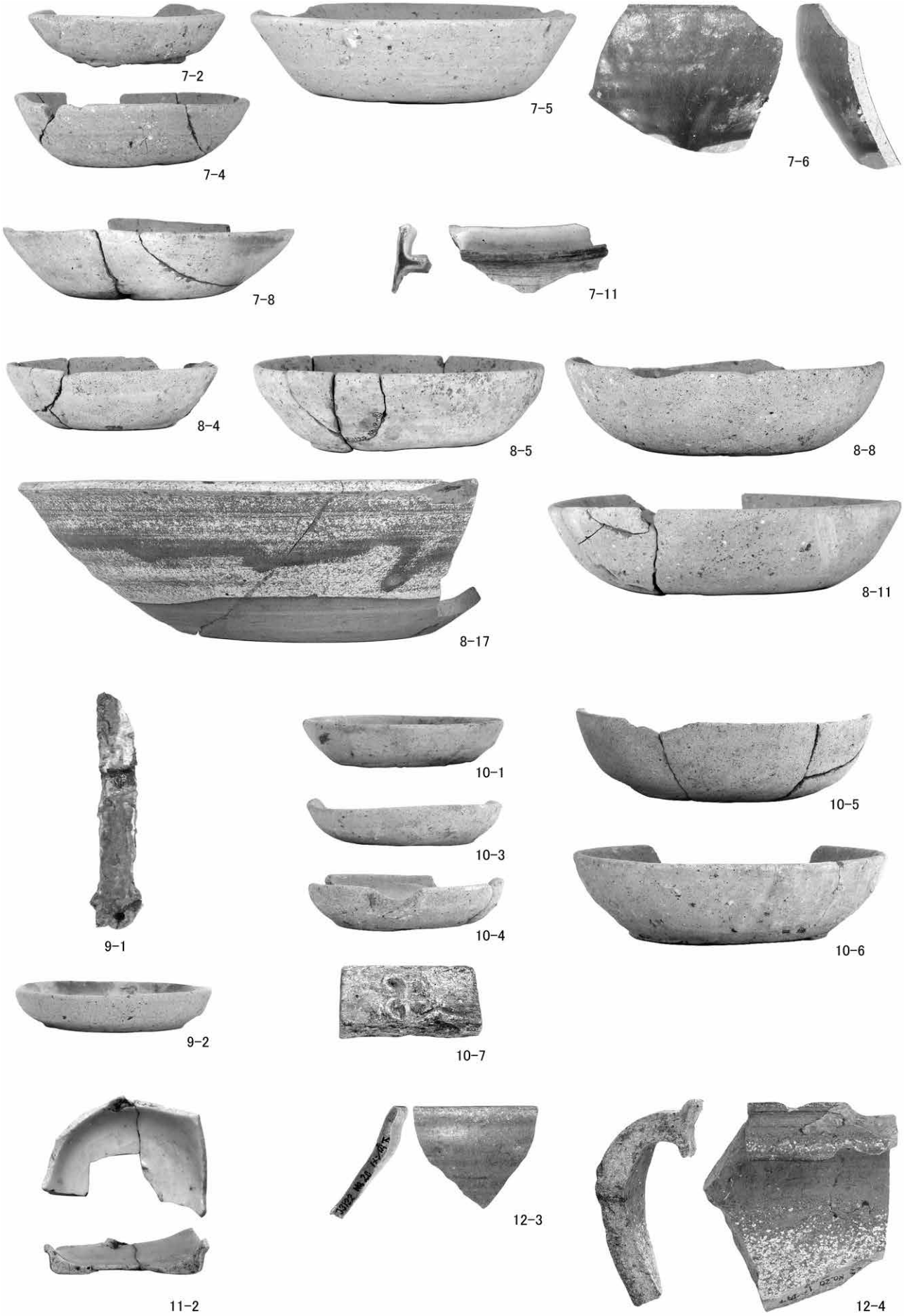
6．溝５（東から）

図版8

1．調査区東壁土層断面

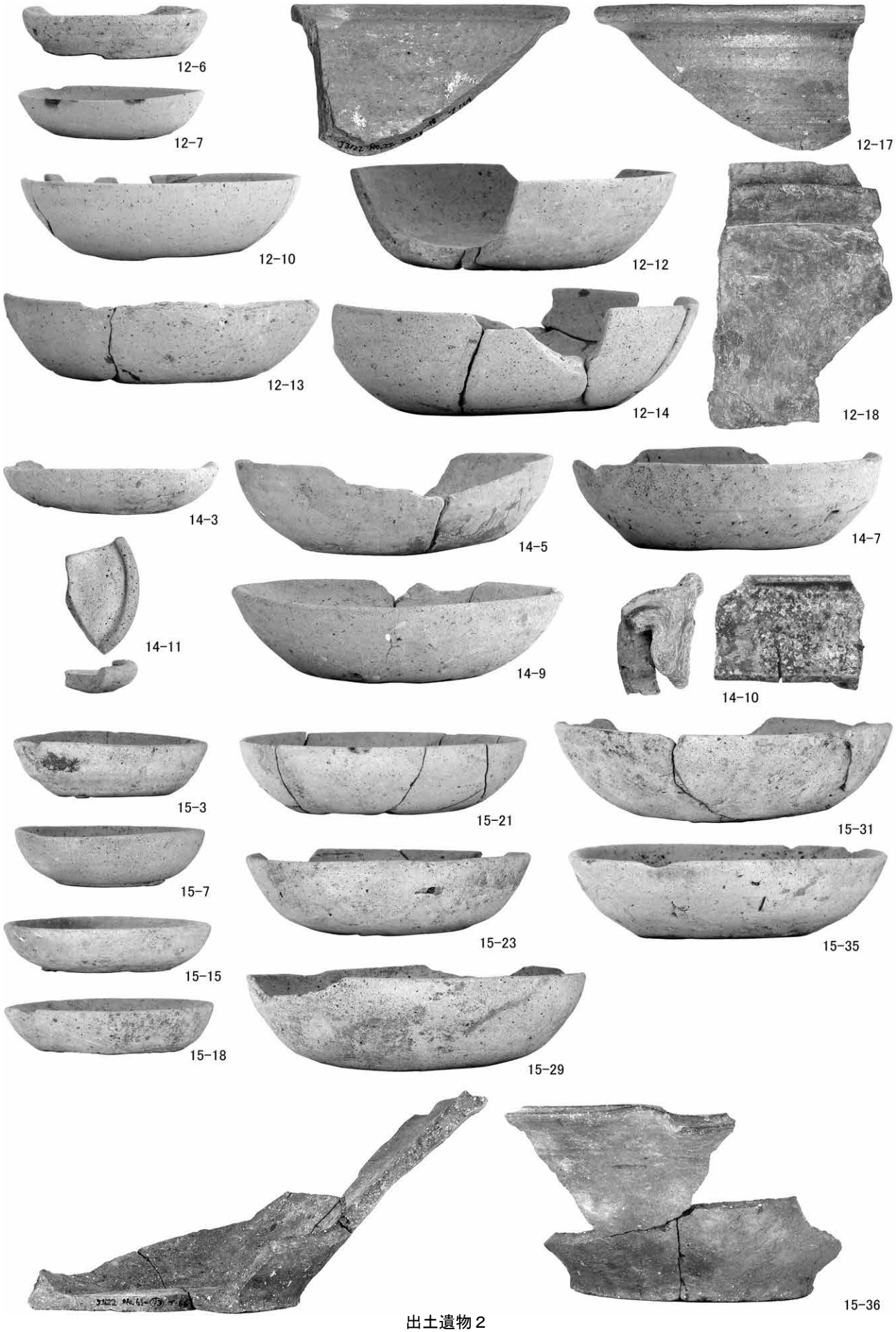
2．調査区南壁土層断面

1．調査区西壁土層断面

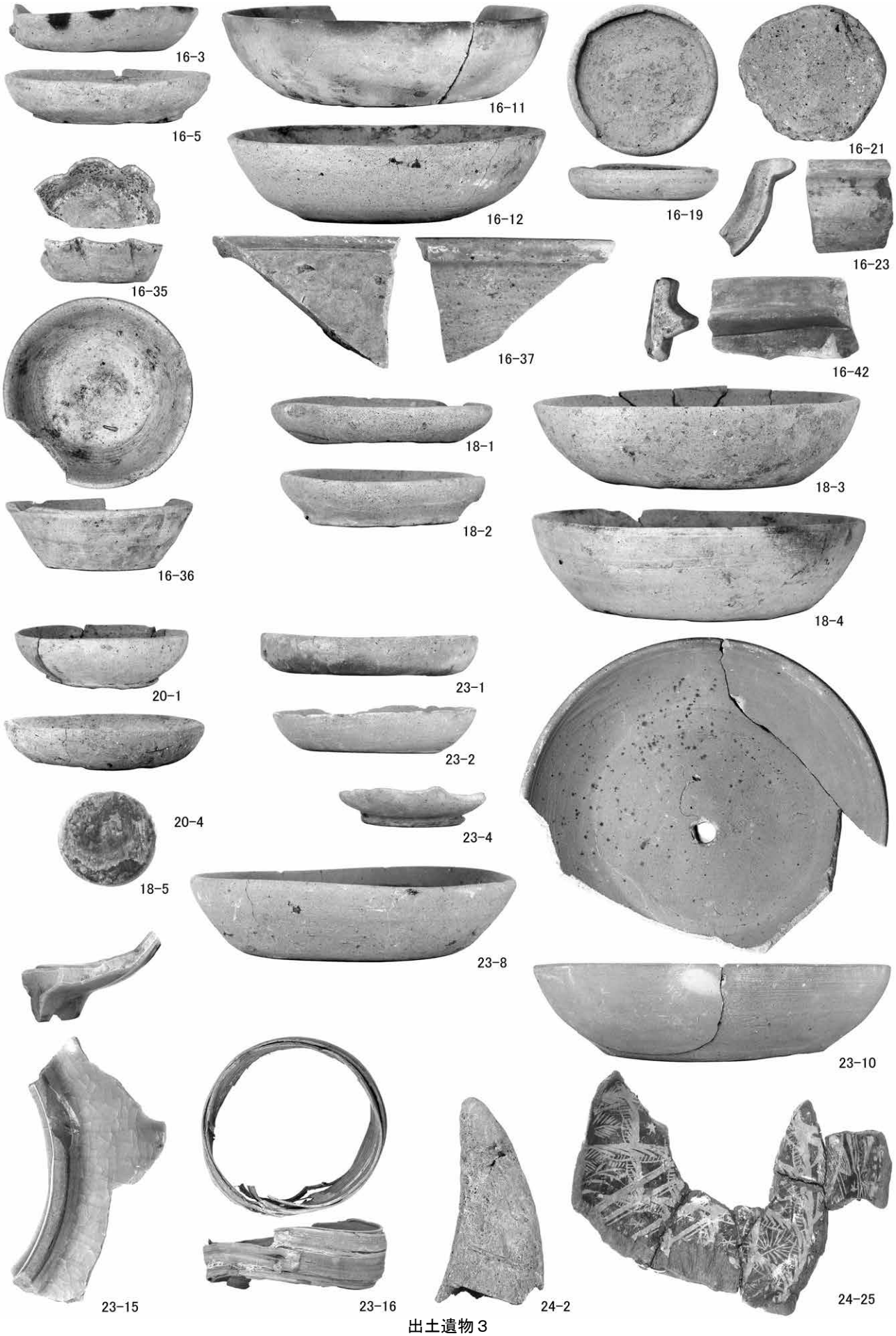

7-2
7-5
7-6
7-4
7-8
7-11
8-4
8-5
8-8
8-17
8-11
9-1
10-1
10-5
10-3
10-4
10-6
9-2
10-7
11-2
12-3
12-4

出土遺物 1

図版10

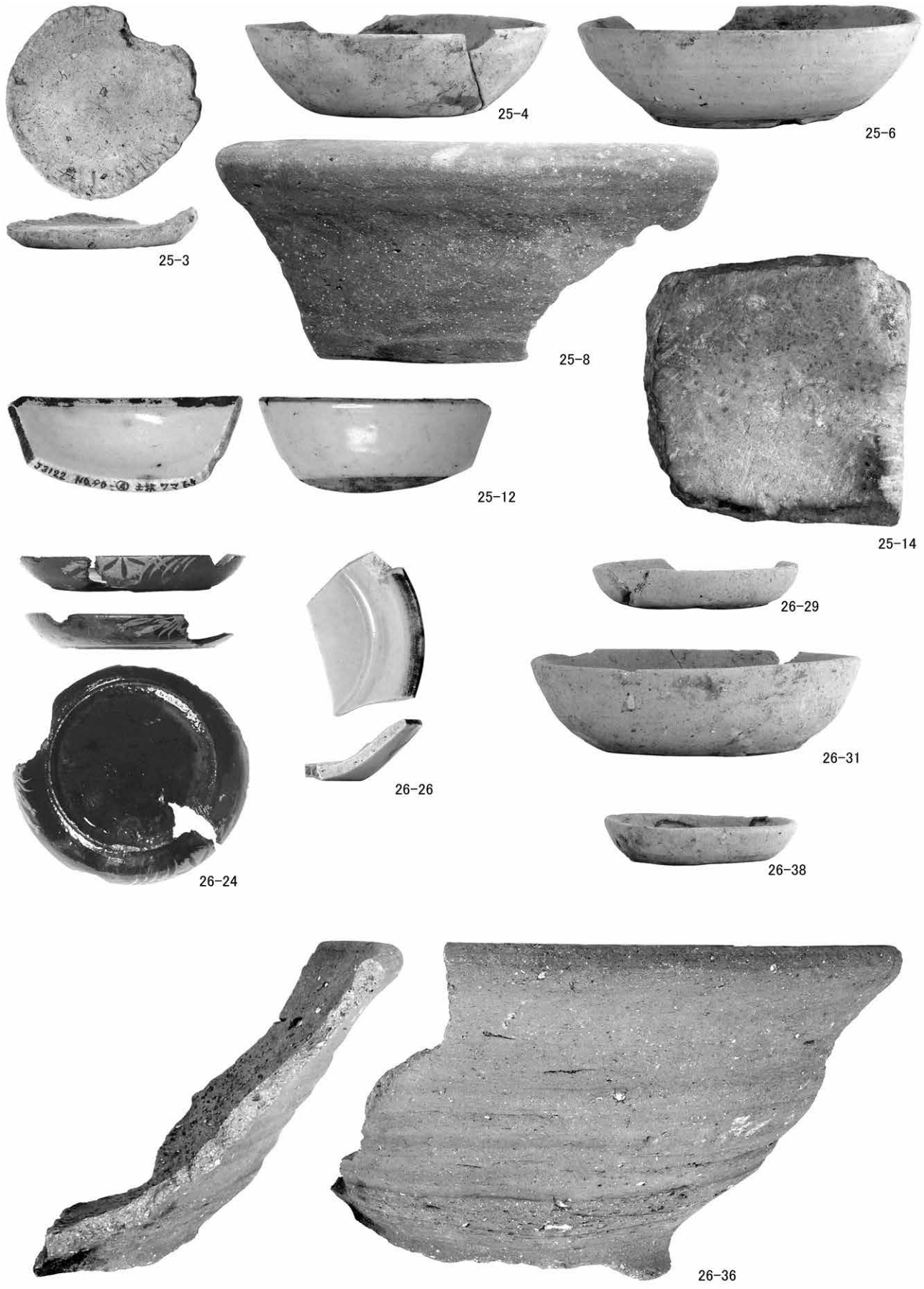

12-6
12-7
12-17
12-10
12-12
12-13
12-14
12-18
14-3
14-5
14-7
14-11
14-9
14-10
15-3
15-21
15-31
15-7
15-23
15-35
15-15
15-18
15-29
15-36

出土遺物２


16-3
16-5
16-11
16-12
16-21
16-19
16-23
16-35
16-37
16-42
16-36
18-1
18-2
18-3
18-4
20-1
23-1
23-2
20-4
23-4
18-5
23-8
23-10
23-15
23-16
24-2
24-25

出土遺物３

図版12



出土遺物４

27-4

27-5

27-7

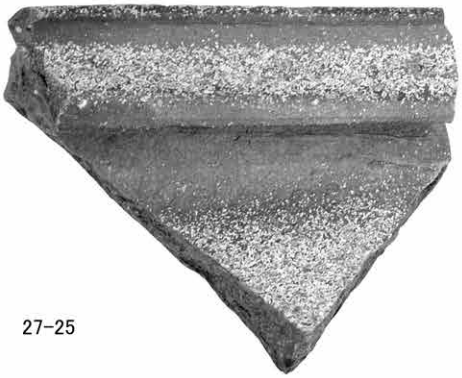
27-12

27-16

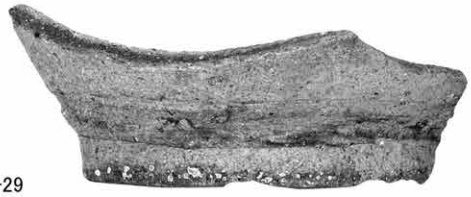
27-17

27-20

27-21


27-25

27-30


27-29

27-33

27-35

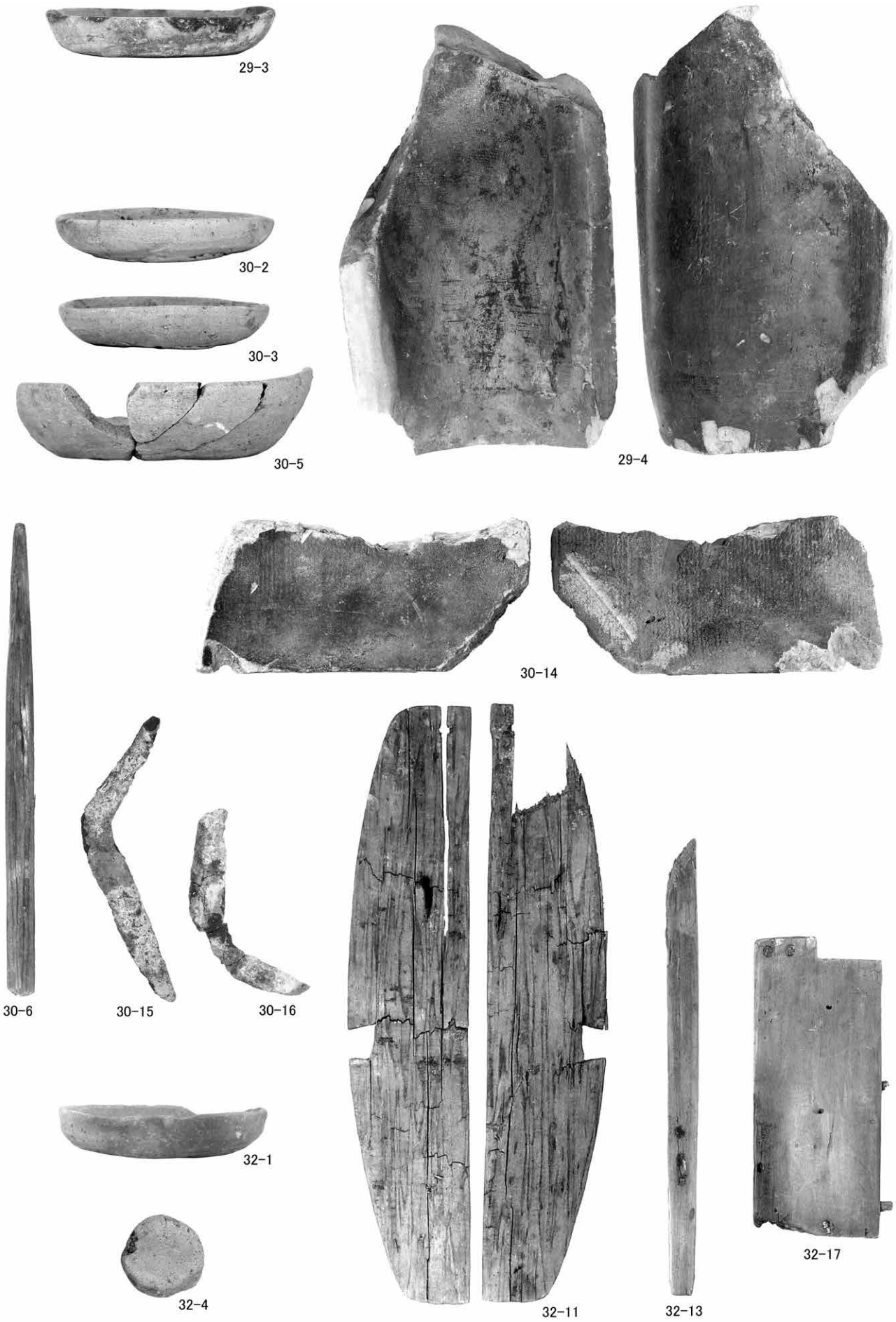
27-38

27-50

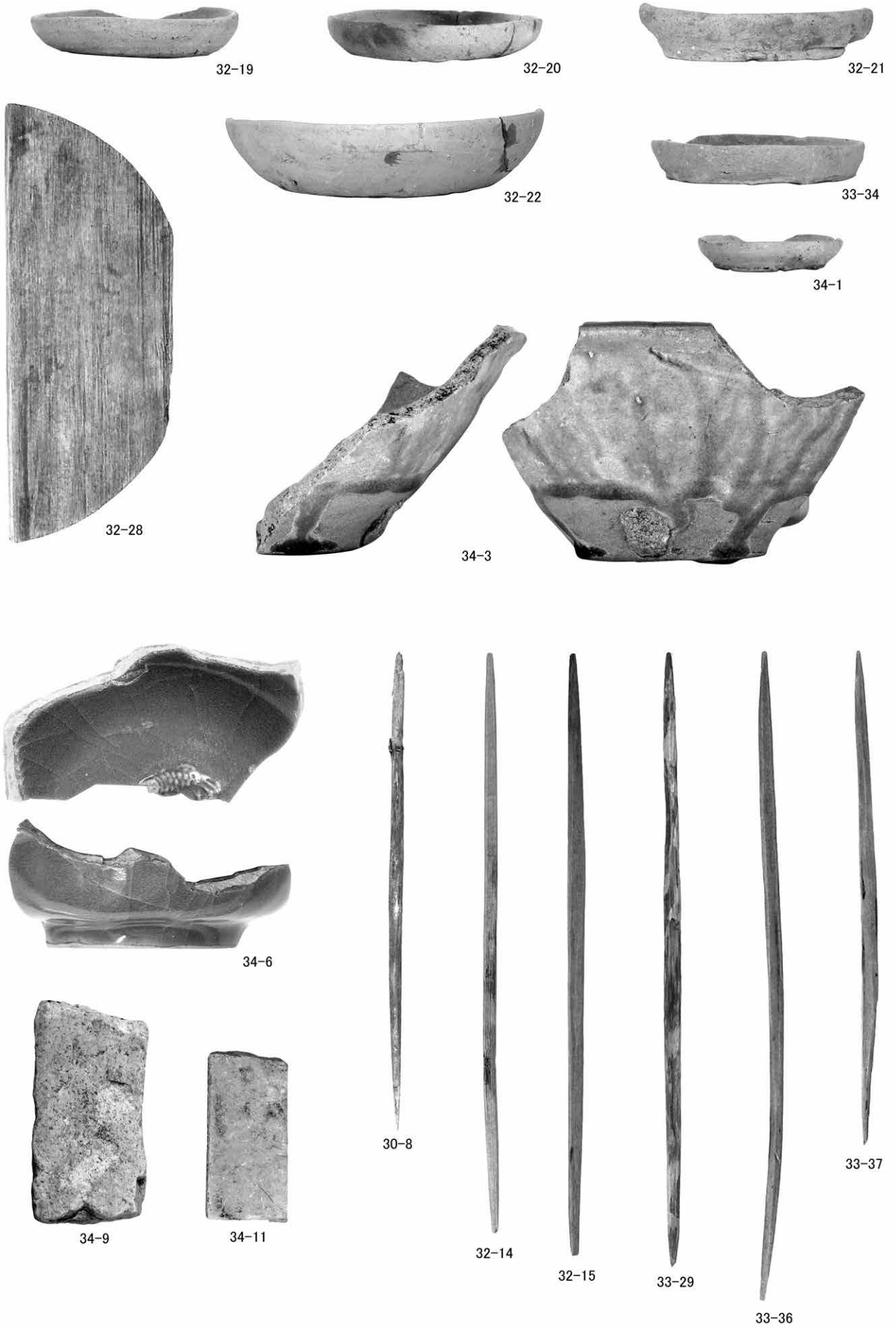
28-4

出土遺物５

図版14

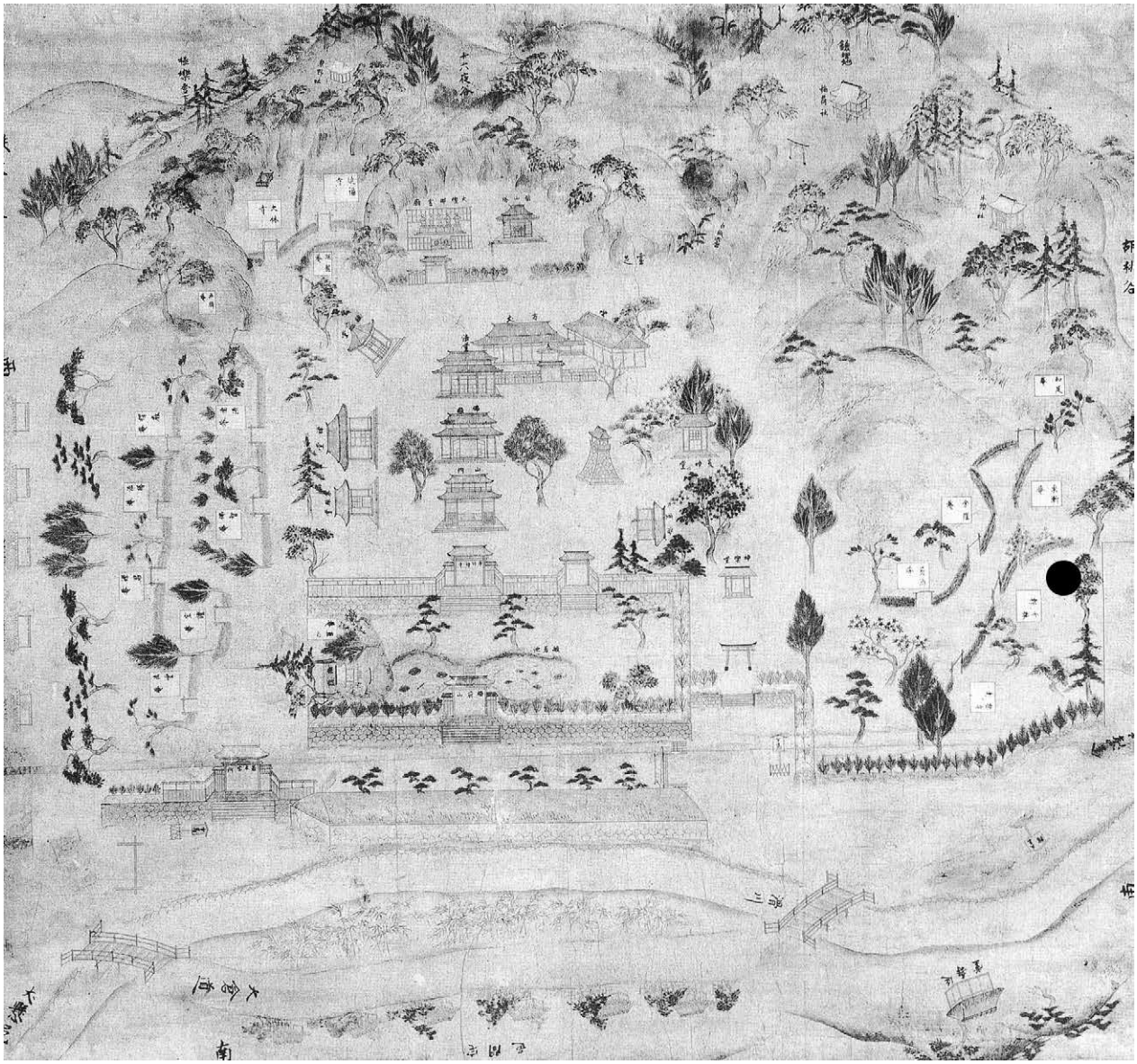


出土遺物６


32-19
32-20
32-21
32-22
33-34
34-1
32-28
34-3
34-6
30-8
33-37
34-9
34-11
32-14
32-15
33-29
33-36

出土遺物７

図版16



参考資料「浄妙寺境内絵図」（『鎌倉の古絵図』Ⅰより）